

日本地球化学会ニュース

No.152

1998. 2. 20

主な記事

●学会記事

- 1998年度日本地球化学会年会のお知らせ
- 評議員会、各委員会、研連議事録
- 日本地球化学会よりの、その他のお知らせ
- GJ 新編集長より、シニア会員の制度について、等
- 鳥居基金実施報告

●その他の研究助成、学会、シンポジウム等の各種情報のお知らせ

- シンポジウム、講演会、人事公募など

●新名誉会員（黒田和夫先生）、及び1997年日本地球化学会各賞受賞者の紹介

●その他（書評）

現在、日本地球化学会では、1996—1997年度将来計画委員会の案に基づき、地球化学書の出版が企画・検討され、出版準備委員会が発足しています。出版準備委員会の経過報告（出版目的、構成・内容、編集出版体制等）を3月末までに地球化学会のホームページに掲載いたしますので、皆様の御意見をお待ちしております。

1998年度地球惑星科学関連学会合同大会について

前号のニュースで1998年度地球惑星科学関連学会合同大会について、申し込み等のお知らせをいたしました。プログラム、最終案内は3月以降になると予想されます。ニュースでもお知らせいたしますが、念のため、本学会のホームページからもリンクを張っておきますので、合同大会のホームページ (<http://gakkai.stp.isas.ac.jp/>) を必要に応じてご参照ください。

現在、日本地球化学会のホームページを学術情報センターのホームページ内の Academic Society Home Village で公開しております。URL アドレスは、<http://wwwsoc.nacsis.ac.jp/gsj2/index.html> です。

ご覧の上、ご意見、ご要望をお寄せください。みなさまのご協力で、より魅力的でアップデートなものにしていきたいと思っています。

1998年度日本地球化学会年会のお知らせ

主催：日本地球化学会

日時：10月9日(金)～11日(日)

会場：九州大学文系キャンパス講義棟

(福岡市東区箱崎6-19-1)

内容：総会と懇親会は10月10日(土)に開かれます。会場等の詳細は、次号のニュースをご覧ください。

一般講演の外に、次の4つの課題討論と日本鉱物学会・日本岩石鉱物鉱床学会・資源地質学会との共通セッションを予定しています。課題討論と共通セッションの内容とコンビナーは以下の通りです。

(1) 市民社会にかかわる地球化学

地球温暖化、酸性雨、オゾン層破壊、ダイオキシン、地下水汚染など、今、地球環境は生産活動や社会生活に起因する様々な環境問題を抱えている。これらの環境問題の原因やメカニズムを明らかにし、環境影響の大きさを評価し、環境保全の方策、技術を提示し実行することが強く求められている。市民社会に深くかわるこれらの問題に、地球化学はこれまで以上に積極的に取り組むことが求められる時代である。本課題講演では、メカニズム解明、評価法、分析法、発生源での対策技術など広く産学から環境問題に関わる発表を募集する。

コンビナー：

百島則幸 (九州大学理学部)

Tel: 092-642-2590, Fax: 092-642-2607

e-mail: momoscc@mbox.nc.kyushu-u.ac.jp

横山拓史 (九州大学理学部)

Tel: 092-642-2571, Fax: 092-642-2607

e-mail: yokotscc@mbox.nc.kyushu-u.ac.jp

(2) 化学進化とバイオマーカーからみた原始地球環境

火星由来の隕石中に生物活動の痕跡があるとする報告の根拠に、バイオマーカーとしてのPAHの検出があるが、報告されたPAHが確たるバイオマーカーと呼べるか否か疑問の余地がある。このような疑問を除くためには、化学進化で非生命的に合成される有機化合物、およびバイオマーカーとして今日扱われている有機化合物が、原始地球環境や惑星環境でどのような形態を取っていたか、またそれらの化合物から何が推定できるかを明らかにすることが重要な課題になる。我が国でも惑星資料のサンプルリターンがタイムスケ

ジュールに乗りつつある現在、化学進化とバイオマーカーの接点について、総合的に討論し理解する機会を持ちたい。

コンビナー：

下山 晃 (筑波大学化学系)

Tel: 0298-53-6510, Fax: 0298-53-6503

e-mail: ashimoya@staff.chem.tsukuba.ac.jp

村江達士 (九州大学理学部)

Tel: 092-642-2660, Fax: 092-642-2684

e-mail: murae@geo.kyushu-u.ac.jp

(3) 大陸と日本列島の環境地球化学的相互作用

日本列島には中国大陸から偏西風が吹き寄せ、その卓越風に乗って様々な化学物質が由来する。近年中国大陸での工業活動がめざましく、人間活動由来の物質の飛来が問題となっている。冬期の酸性物質やその中和物質としての黄砂はよく知られている環境問題の一つである。日本海の海上での観測が十分でないために、大陸からの影響量の評価や輸送形態の検討、日本列島への影響評価などはまだ議論されている話題である。ここでは環境問題としての観点から、地球化学的にこれらの現象をどのように解釈されるのか講演いただく。

コンビナー：

鶴見 実 (弘前大学理学部)

Tel: 0172-39-3613, Fax: 0172-39-3613

e-mail: tsurumi@cc.hirosaki-u.ac.jp

吉村和久 (九州大学理学部)

Tel: 092-726-4743, Fax: 092-726-4842

e-mail: kazz@rc.kyushu-u.ac.jp

(4) 大陸周辺地域での地殻物質の循環

日本列島はアジア大陸に近く、黄砂現象を始めとして、大陸起源の固体物質が飛来する。本セッションは大陸周辺域における大陸地殻起源の固体物質の循環について討論することを目的とする。砂漠砂、黄土、海洋堆積物(堆積岩)、風成塵、日本海沿岸などの土壌などに大陸地殻物質がどのように取り込まれているかについて、主成分、微量成分、有機成分、同位体、鉱物など幅広い手法からの研究を取りまとめたい。また第四紀の堆積物に限らずより広い地質時代を対象とする。これまで交流の少なかった分野の研究者に共通の討論の場を提供したい。

コンビナー：

中井俊一 (東京大学地震研究所)

Tel: 03-3812-2111, Fax: 03-5802-3391

e-mail: snakai@eri.u-tokyo.ac.jp

浅原良浩 (名古屋大学大学院理学研究科)

Tel: 052-789-2530, Fax: 052-805-6383

e-mail: asahara@eps.nagoya-u.ac.jp

(5) 新世紀に向けての地球外物質の研究と地球外資源探査(日本鉱物学会・日本岩石鉱物鉱床学会・資源地質学会との共通セッション)

南極氷床で採取した宇宙塵が1999年4月に到着する。また、MUSES-C計画が成功すれば、小惑星ネレウスの試料が2006年1月に手に入る。これらの試料の記載・管理法、これらを使う新しい研究の提案、非破壊で化学組成(major and trace)・鉱物組成等の多項目のデーターをとるための分析法、MUSES-C計画、地球外資源探査などをとりあげる。宇宙塵・MUSES-C・地球外資源探査以外でも、新世紀に向けた斬新な宇宙物質の研究に関する発表を歓迎する。

コンビナー：高岡宣雄 (九州大学理学部)

Tel: 092-642-2668, Fax: 092-642-2684

e-mail: takaoka@geo.kyushu-u.ac.jp

鉱物学会：坂本尚義 (東京工業大学理学部)

Tel: 03-5734-2243, Fax: 03-3727-4662

e-mail: yuri@geo.titech.ac.jp

岩鉱学会：土山 明 (大阪大学大学院理学研究科)

Tel: 06-850-6111, Fax: 06-843-7194

e-mail: akira@ess.sci.osaka-u.ac.jp

資源地質学会：古宇田亮一 (地質調査所)

Tel: 0298-54-3637

講演申込締め切り：1998年7月10日(金)

講演要旨締め切り：1998年8月10日(月)

参加申込締め切り：1998年9月10日(木)

講演申し込み、講演要旨、参加申し込み、その他の詳細は次号のニュースをご覧ください。

宿泊・交通

東武トラベル(福岡支店)でお世話します。詳細は次号のニュースをご覧ください。

年会申込・連絡先

〒812-8581 福岡市東区箱崎6-10-1

九州大学理学部地球惑星科学科

1998年度日本地球化学会年会準備会

村江達士

Tel: 092-642-2660, Fax: 092-642-2684

e-mail: murae@geo.kyushu-u.ac.jp

または

〒812-8581 福岡市東区箱崎6-10-1

九州大学理学部地球惑星科学科

1998年度日本地球化学会年会準備会

高岡宣雄

Tel: 092-642-2668, Fax: 092-642-2684

e-mail: takaoka@geo.kyushu-u.ac.jp

以上

1997年日本地球化学会総会報告

(1996年度決算, 1997年度決算中間報告, 1998年度予算)

1996年度日本地球化学会決算報告 (1996年1月1日～12月31日)

収入の部

科 目		収入額(円)		予算額(円)
1. 会費収入		8,480,714		8,000,000
(内訳)	1.1 一般正会員		6,914,000	
	1.2 学生正会員		678,000	
	1.3 賛助会員		465,000	
	1.4 海外会員		281,714	
	1.5 入会金		142,000	
2. 刊行物売上		4,163,603		4,100,000
(内訳)	2.1 講読料		4,097,400	4,100,000
	2.2 別刷		66,203	0
3. 広告料		650,500		600,000
4. 出版助成		1,740,000		1,670,000
5. 公開発表(B)助成		1,100,000		0
6. 雑収入		20,599		15,000
7. 前年度名簿積立金		0		0
8. 前年度基本財産充当金		3,400,000		3,400,000
9. 前年度繰越金		1,877,322		1,980,000
収入合計		21,432,738		19,765,000

支出の部

科 目		支出額(円)		予算額(円)
1. 事業費		14,204,666		14,525,000
(内訳)	11. 出版費		9,957,046	11,240,000
	印刷費		7,808,171	8,590,000
	編集費		1,300,000	1,500,000
	発送費		848,875	1,150,000
	12. 行事費		466,500	450,000
	13. 公開発表(B)		1,106,624	0
	14. 学会賞経費		44,743	15,000
	15. 委員会活動費		26,020	150,000
	16. 名簿積立金		400,000	500,000
	17. 名簿作成費		0	0
	18. 会員業務委託費		2,092,053	2,050,000
	19. 会員業務郵税		111,680	120,000
2. 管理費		1,607,909		1,500,000
(内訳)	21. 庶務費		200,000	200,000
	22. 会議費		70,857	50,000
	23. 通信費		33,249	40,000
	24. 旅費		1,144,000	1,000,000
	25. 選挙費		0	0
	26. 雑費		39,803	90,000
	27. 雑誌保管費		120,000	120,000
3. 予備費		0		340,000
4. 基本財産引当金		3,400,000		3,400,000
5. 次年度繰越金		2,220,163		0
支出計		21,432,738		19,765,000

11. 出版費明細

事 項	英文誌	和文誌	ニュース	その他	支出計
111. 印 刷	5,504,166	1,369,900	775,485	158,620	7,808,171
112. 編 集	1,000,000	250,000	50,000	0	1,300,000
113. 発 送	382,270	116,260	286,790	63,555	848,875
出版費計	6,886,436	1,736,160	1,112,275	222,175	9,957,046

英文誌: Geochemical Journal Vol. 30, 1-6

和文誌: 地球化学 Vol. 30, 1-2

ニュース: No. 144, 145, 146, 147 (No. 145と147は地球化学[2]に合本化して発行)

その他: 地球惑星科学連絡会ニュース No. 11, 12 (No. 12は地球化学[2]に合本化して発行)

1997年度日本地球化学会中間決算報告（1997年1月1日～6月30日）

収入の部

科 目		収入額(円)		予算額(円)
1. 会費収入		9,283,450		10,100,000
(内訳)	一般正会員		8,001,000	8,380,000
	学生正会員		444,000	530,000
	シニア正会員		20,000	205,000
	賛助会員		555,000	700,000
	海外会員		255,450	285,000
	入会金		8,000	0
2. 刊行物売上		2,225,276		4,100,000
(内訳)	講読料		2,206,050	4,100,000
	別刷		19,226	0
3. 広告料		240,000		1,300,000
(内訳)	地球化学		240,000	800,000
	会員名簿		0	500,000
4. 出版助成*		0		1,740,000
5. 公開発表(B)助成**		0		0
6. 雑収入		5,792		20,000
7. 前年度名簿積立金		400,000		500,000
8. 前年度基本財産引当金		3,400,000		3,400,000
9. 前年度繰越金		2,220,163		1,600,000
収入計		17,774,681		22,760,000

*¥1,790,000入金（1997.8.25）

**¥1,400,000入金（1997.9.4）

支出の部（1997年1月1日～6月30日）

科 目		支出額(円)		予算額(円)
1. 事業費		8,017,366		14,790,000
	11. 出版費		6,179,888	10,930,000
	印刷費		4,508,028	8,910,000
	編集費		1,450,000	1,400,000
	発送費		221,860	620,000
	12. 行事費		300,000	450,000
	13. 公開発表(B)		0	0
	14. 学会賞経費		0	80,000
	15. 委員会活動費		167,901	150,000
	16. 名簿積立金		0	0
	17. 名簿作成費		473,710	1,360,000
	18. 会員業務委託費		876,027	1,710,000
	19. 会員業務郵税		19,840	110,000
2. 管理費		1,291,352		1,880,000
	21. 庶務費		200,000	200,000
	22. 会議費		85,425	70,000
	23. 通信費		18,325	40,000
	24. 旅費		969,000	1,260,000
	25. 選挙費		0	90,000
	26. 雑費		18,602	90,000
	27. 雑誌保管費		0	130,000
3. 予備費		0		400,000
4. 基本財産引当金		0		3,400,000
5. 消費税+2%		0		340,000
6. 次年度繰越金		0		2,290,000
支出計		9,308,718		22,760,000

11. 出版費明細

事 項	英文誌	和文誌	ニュース	その他	支出計
111. 印 刷	2,751,699	1,756,329			4,508,028
112. 編 集	1,000,000	400,000	50,000		1,450,000
113. 発 送	221,860				221,860
出版費計	3,973,559	2,156,329	50,000	0	6,179,888

英文誌：Geochemical Journal Vol. 31, 1-3

和文誌：地球化学 Vol. 31, 1-2（ニュース No. 148, 149を合本発行）

地球化学索引（Vol. 1-30）¥490,280を含む。

発送費：地球化学と索引号は GJ と同時発送（フリーコピー181件の発送費¥19,910を含む）

1998年度日本地球化学会予算案（1998年1月1日～12月31日）

収入の部

科 目		収入額(円)		1997年予算(円)
1. 会費収入		10,050,000		10,100,000
(内訳)	一般正会員		8,400,000	8,380,000
	学生正会員		600,000	530,000
	シニア正会員		50,000	205,000
	賛助会員		640,000	700,000
	海外会員		360,000	285,000
	入会金		0	0
2. 刊行物売上		4,400,000		4,100,000
(内訳)	講読料		4,400,000	4,100,000
	別刷		0	0
3. 広告料		820,000		1,300,000
(内訳)	地球化学		820,000	800,000
	会員名簿		0	500,000
4. 出版助成		1,790,000		1,740,000
5. 公開發表(B)助成		0		0
6. 雑収入		20,000		20,000
7. 前年度名簿積立金		0		500,000
8. 前年度基本財産引当金		3,400,000		3,400,000
9. 前年度繰越金		3,980,000		1,600,000
収入計		24,460,000		22,760,000

支出の部（1998年1月1日～12月31日）

科 目		支出額(円)		1997年予算(円)	
1. 事業費		13,340,000		14,790,000	
	11. 出版費	10,280,000			10,930,000
	印刷費	8,320,000			8,910,000
	編集費	1,400,000			1,400,000
	発送費	560,000			620,000
	12. 行事費		460,000		450,000
	13. 公開發表(B)		0		0
	14. 学会賞経費		40,000		80,000
	15. 委員会活動費		250,000		150,000
	16. 名簿積立金		400,000		0
	17. 名簿作成費		0		1,360,000
	18. 会員業務委託費		1,800,000		1,710,000
	19. 会員業務郵税		110,000		110,000
2. 管理費		1,320,000		1,880,000	
	21. 庶務費		150,000		200,000
	22. 会議費		100,000		70,000
	23. 通信費		40,000		40,000
	24. 旅費		850,000		1,260,000
	25. 選挙費		0		90,000
	26. 雑費		50,000		90,000
	27. 雑誌保管費		130,000		130,000
3. 予備費		400,000		740,000	*
4. 基本財産引当金		3,400,000		3,400,000	
6. 次年度繰越金		6,000,000		2,290,000	
支出計		24,460,000		22,760,000	

*消費税 + 2 %分 ¥340,000を含む

11. 出版費明細

事 項	英文誌	和文誌	ニュース	その他	支出計
111. 印 刷	5,920,000	2,400,000			8,320,000
112. 編 集	1,000,000	350,000	50,000		1,400,000
113. 発 送	560,000				560,000
出版費計	7,480,000	2,750,000	50,000	0	10,280,000

英文誌：Geochemical Journal Vol. 32, 1-6

和文誌：地球化学 Vol. 32, 1-4（ニュース No. 152～155を合本発行）

発送費：地球化学は GJ と同時発送

第16期第11回地球化学・
宇宙化学研究連絡委員会議事録

日時：1997年7月17日(木) 13：30～16：30

場所：日本学術会議第4部会議室（6F）

出席者：石渡良志委員長，青木謙一郎，秋元肇，日下部実，田中剛，野津憲治，半田暢彦，松田准一，宮本正道

1. 報告事項

(1) 学術会議関係（青木委員より）

1) 5月27～30日，日本学術会議第125回総会および各部会が開かれた。総会では，専門委員会を課題別研連に準じた扱いとする「日本学術会議の運営の細則に関する内規の一部改正」が承認された。また，「計算機科学研究の推進について（勧告）」「学術団体の支援について（要望）」，第3常置委員会報告「学術の動向とパラダイム」が承認された。部会関係では，「アジア学術会議（SCA）活動指針（案）」，第4部附置科学教育の振興と人材育成小委員会報告が承認された。人類学・民族学研連および天文学研連（天文学国際共同観測専門委員会）から申請された対外報告が承認された。

2) 7月3日第4部夏期部会が北見工大において開かれた。平成10年度科学研究費補助金の時限付分化細目に第4部から出した「複維系科学」が採択されなかったが，平成11年度に継続提出する。鉱物学研連の対外報告「地球・惑星物質科学の現状と展望」が承認された。さらに，次期への申し送り事項を審議了承した。

(2) 研連見直しについて（青木委員より）

研連見直しに関する各部から出されている考え方について説明がなされ，第4部における現況を検討，審議した。

(3) 対外報告「地球環境に関わる地球化学の推進について」（石渡委員長より）本年2月に承認された標記対外報告の冊子を作成し，約150部を関係する大学の教室や研究機関などに送付した。

2. 審議事項

(1) 前回議事録

議事録（案）を承認した。

(2) 平成10年度科学研究費補助金審査委員の推薦について

科学研究費補助金，分科「地球科学」の第2段審査委員1名に対する候補者2名および，細目「地球化学」の第1段審査委員2名に対する候補者4名の選考を行った。昨年度と同じく18学協会に推薦を依頼したところ，第2段審査委員には11学協会から，第1段審査委員には15学協会から候補者の推薦があった。第2段審査の交代委員がBグループ（大気水圏生物圏関係）であるので，候補者第1位はAグループ（固体地球関係），第2位はBグループとすることとした。また，第1段審査の継続委員がAグループ1名であるので，候補者第1位から4位までB，A，B，Aグループの順とすることとした。

具体的な選考作業は，第15期委員会から引き継いだ方法で行った。まず最初に第2段審査委員の選考を行ない，各学協会から推薦を受けた候補者10名をA，Bグループにわけ，各グループごとに第1位を選出し，Aグループ第1位を候補者第1位，Bグループ第1位を候補者第2位とした。ついで，各学協会から推薦を受けた第1段審査委員候補者17名から，第2段審査委員候補者に選出された1名を除く16名をA，Bグループにわけ，各グループごとに第1，2位を選出し，Bグループ第1位を候補者第1位，Aグループ第1位を候補者第2位，Bグループ第2位を候補者第3位，Aグループ第2位を候補者第4位とした。なお，選出にあたっては，審査委員が同一機関に片寄らないように配慮した。

(3) 第17期への申し送り事項

石渡委員長が作成した第16期の活動のまとめと第17期への申し送り事項の資料にもとづいて討議がおこなわれ，申し送り事項を了承した。

Geochemical Journal の
新しい編集体制について

大阪大学大学院理学研究科 松田准一
1998年1月のGeochemical JournalのVol. 32より，松久編集長から引き継いで，私が新しくGeochemical Journalの編集長になることになりました。松久前編集長は10年以上もの長きにわたって大変な労力と時間を費やされ，Geochemical Journalの発展に尽くされ

ました。その結果，今日のGeochemical Journalがあることは皆様御周知の事実です。最近では投稿数も増え，遅滞なく順調にGeochemical Journalが発刊されるようになりました。私は，この松久前編集長から編集長の役目をバトンタッチされ，その責任の重大さを痛感している次第です。

日本では，国際的に名前の通っている地球科学の雑誌はGeochemical JournalとJournal of Geomagnetism and Geoelectricity (JGG)の2冊だといわれています。どちらも掲載される論文の引用がcitation indexに数え上げられる雑誌です。後者のJGGは，いくつもの学会の総合英文誌として，1998年1月からEarth, Planets and Space (EPS)として生まれ変わることになっています。Geochemical Journalもこれに参加するかという話しもあったようですが，結局Geochemical Journalの大きさから統合するのは難しいだろうということになり，独立誌として存続になったようです。このように，EPSが地球物理としての代表雑誌であるなら，Geochemical Journalはまさに地球化学の代表雑誌として，その存在を認められているといえます。また，多くの雑誌Geochimica et Cosmochimica ActaやEarth and Planetary Science Letters等が商業誌として存在する中で，Geochemical Journalは学会の持つ雑誌としての独自性から，その存在と重要性が国際的にも注目されています。私は，このようなGeochemical Journalがさらに国際的な雑誌として発展していくよう，編集長として取り組みたいと思います。そのためには，日本地球化学会員の皆様を初め，地球化学に携わる多くの方々の御協力を必要とすることは申し上げるまでもありません。積極的にGeochemical Journalに投稿し，Geochemical Journalが国際的な雑誌に発展していくよう御協力をお願いいたします。このたび，編集長就任とともに新しく編集委員会も組織しました。学問の細分化と同時に，従来の枠を越えたより広い地球化学の分野の方々からの投稿にも適切に対処できるよう，これまでの2倍にあたる20人規模のAssociate Editorからなる編集委員会の体制を計画しました。また，Geochemical Journalをさらに国際的にするため，Associate Editorの半数を外国人研究者にお願いすることにしました。その結果，最終的には日本人12名，外国人11名の計23名のAssociate Editorが確定しました。外国人Associate Editorはオーストラリア，インド，オーストリア，台湾，フランス，ドイツ，カナダ，U. S. A.，韓国と全世界に

わたっています。この中にはGeochimica et Cosmochimica Actaの現Associate Editorも3名含まれており，大変強力な編集体制になりました。また，このような方々がGeochemical Journalの編集委員会に参加して下さるというのは，Geochemical Journalの発展に国際的にも多くの方々の方が期待が集まっている証拠だとも言えます。ジャーナルが良くなるためには，多くの論文が投稿され，多数の論文からふるいにかけられた良い論文が掲載されることが不可欠です。そうすれば，より多くの研究者からその論文が引用され，多くの研究者がそのジャーナルを見る必要があることから，ジャーナルのサーキュレーションはより広がっていきます。こうなると，プラスのフィードバックで，より多くの論文が投稿されるようになり，ますますGeochemical Journalのサーキュレーションは良くなっていきます。このように，多くの論文の投稿とジャーナルのサーキュレーションの拡大は，相補的にジャーナルの質を向上させるはずです。今後，Geochemical Journalは，review processの迅速化，ホームページでのcontentなどの紹介，国際会議，EOS（AGUニュース新聞）等での宣伝を通しての海外でのcirculationの拡大等を強力に推進していくつもりです。また，日本国内の学会のニュースにも広く投稿を薦める案内を載せるつもりです。日本地球化学会員の皆様には御自身からのGeochemical Journalへの投稿を重ねてお願いするとともに，近辺の方，また海外のお知り合いの研究者にも是非，Geochemical Journalへの投稿，購読を勧めて下さるようお願いいたします。そして，日本地球化学会員全員でGeochemical Journalを育成，発展させていただきようをお願いしたいと思います。

連絡先：松田准一

〒560 豊中市待兼山町1-1

大阪大学大学院理学研究科宇宙地球科学専攻

Tel：06-850-5495，Fax：06-850-5541

e-mail：matsuda@ess. sci. osaka-u. ac. jp

(Jun-ichi Matsuda)

シニア会員について

一昨年，ご承知のように，日本地球化学会では，会則改正を行い，シニア会員制度を設けましたが。しかしながら，まだ，幅広い御認識がいただけていない様にも思われます。会員歴35年以上かつ年齢70歳以上の

方は、申告いただければシニア会員とされます（会費は年額5,000円になります）。どうか、該当する方がいらっしゃるれば、御申告くださるようお願いいたします。申告は、名簿号等についている「日本地球化学会（入会・変更）申込書」に、記入の上、日本学会事務センターにご送付ください。評議員会で承認の上、シニア会員へ移動させていただきます。

1997年度第2回「鳥居基金」助成 実施報告（TE-11）

氏名：早川和秀（滋賀県琵琶湖研究所研究員）

助成：国内研究集会

課題：1997年度地球化学若手会

地球化学若手会は、水圏分野を中心に地球化学を研究する若手研究者が、年に一度全国から集まり、現在自分たちが行っている研究・観測の問題点等を議論し、情報交換を行い、親睦を深めることを目的に活動しています。1997年度の地球化学若手会は11月1日から3日までの3日間、静岡県 の 培本塾会館(財)で開催しました。今年は13の研究機関から30名（一般8名、学生22名）の参加者がありました。参加者は水圏分野の大学院生、若手研究者が主体ですが、水圏分野以外の参加者も年々増え、大気圏、古環境、分析などからも参加があり、毎年異なる顔ぶれが集まるのが特徴となっています。

集会は、招待講演と一般講演、short communicationに区分されています。招待講演は、田中剛氏（名古屋大・理）「地面（地圏）の化学環境評価のこころみ」、紀本岳志氏（財海洋化学研）「最近の海洋変化について～化学は何をはかるか？～」両氏にお願いし、興味深い研究紹介と研究の問題提起が行われ、活発な議論が交わされました。一般講演は、研究発表や研究活動の報告などの30分程度の講演で、学生、若手研究者を含む大気、湖水海水関係の7件の講演がありました。学会では行いにくい、詳細な分析方法の検討や、研究の方向性など徹底した討論が行われました。また学生にとっては発表の練習として活用されていました。short communicationは、参加者全員による自己紹介を兼ねた短い発表で、5～10分程度のものです。今年は時間に余裕があったこともあり、20分を越える熱の入った発表や質疑応答が多くなされ、予定を変更して時間を延長する一幕もありましたが、全員での積極的な討論があったことは、世話役としても満足していま

す。集会の終わりには会の反省とともに会の将来についても話し合われ、これからもこの地球化学若手会を続けていくことが確認されました。

この地球化学若手会は、前身のものから数えて21年目（途中、中断以後10年目）を迎えましたが、今後はさらに講演等に工夫をしてゆくとともに、インターネット（地球化学若手会ホームページ〔http://www.htokai.ac.jp/SAPORO/Staff/~minami/wakatekai/〕）等を活用しながら、若手研究者のネットワークを発展させていきたいと考えています。

第34回理工学における同位元素研究発表会

表記関連学会が開催されますのでご案内致します。

主催：日本アイソトープ協会

共催：日本地球化学会他

会期：1998年6月29日(月)～7月1日(水)

会場：国立教育会館（東京都千代田区霞ヶ関3-2-3）

内容：それぞれの研究分野において、その専門的成果を得るにいたった放射性および安定同位元素ならびに放射線の利用技術に重点をおいた論文と、これら同位元素、放射線の利用の基礎となる研究。研究の内容には、少なくとも一部に未発表の部分が含まれていること。

発表形式：口頭発表またはポスター発表

発表申込区分：地球科学・宇宙科学、環境放射能その他の区分があります。お問い合わせ下さい。

発表申込：所定の申込書（1件1通）により、申し込む。申込書は下記宛請求して下さい。

〒113 東京都文京区本駒込2-28-45

日本アイソトープ協会内

理工学における同位元素研究発表会運営委員会

Tel：03-5395-8081, Fax：03-5395-8053

e-mail gakujiu@sunl.jria.or.jp

発表申込締切：1998年2月28日(土)

講演要旨：発表申込有り次第、所定の原稿用紙をお送りします。口頭発表、ポスター発表とも、1件につき原稿用紙1枚。

講演要旨原稿締切：1998年4月15日(水)

参加費：無料

日仏KAIKO-TOKAI国際シンポジウムのご案内

表記シンポジウムの開催についてご案内致します。

実行委員会 木下 肇（海洋科学技術センター）

平 朝彦（東京大学海洋研究所）

平成5年度～9年度にかけて、南海トラフ沈み込み付加体における地殻構造や流体循環をターゲットとして実施された日仏共同KAIKO-TOKAI計画の最終取りまとめとして、下記の要領で国際シンポジウムを開催いたしますので、お知らせいたします。

記

日程：平成10年3月25日～27日

場所：日仏会館（東京都渋谷区恵比寿3-9-25）

主催：海洋科学技術センター・東京大学海洋研究所

後援：文部省・科学技術庁・仏大使館・日仏会館

以下の5テーマにわたって、口頭またはポスターによる約60件の研究発表が行われます。

- 1) New findings by submersible and ROV observations
- 2) Geological/geophysical structure and tectonics
- 3) Material fluxes: accretion, fluid migration, and biological processes
- 4) Development of observation technologies
- 5) Others

ご不明の点がございましたら、日本国内事務局 (loc-kaikotokai@jamstec.go.jp) までお問い合わせ下さい。プログラム等詳しい情報は、ホームページ (http://www.jamstec.go.jp/index-e.html) に順次掲載いたしますので、ご参照下さい。

熊本大学人事公募のご案内

下記のような人事公募の案内がまいりましたので、お知らせいたします。

熊本大学理学部環境理学科 学科

関係各位

熊本大学理学部環境理学科 学科長

拝啓 時下ますますご清栄のこととお慶び申し上げます。

さて、この度、熊本大学理学部環境理学科では、下

記の要領で教員を公募することになりました。つきましては、貴関係方面に御周知いただきますようお願い申し上げます。

当・環境理学科は、人間社会と自然との調和ある発展を教育理念として、平成9年度に新設された学科（学生定員30名）であり、環境解析学と環境動態学の2大講座で構成されています。現在、理学部の既存学科（化学、地球科学、生物科学）から移籍した8名の教員が在籍していますが、今回公募する2名の教員を含め、完成年度（平成12年度）には教官定員は13名になる予定です。環境科学は、その守備範囲が広く、自然科学の全領域にわたっていますので、現スタッフではカバーできない領域の専門家に参画していただき、自然科学のゼネラリストであると同時に環境科学のスペシャリストたる人材の育成を目指して、共に手を携えて、新しい学科を創設したいと念願しています。

記

1. 公募の職名及び人員：

①助教授（環境動態学講座）1名

②助手（環境解析学講座）1名

※以下、公募職名（所属講座名）を①及び②で表記します。

2. 専門分野：

①広い意味での陸域の動物生態学を専攻し、河川・湖沼・山地・草地などの野生動物（微小動物を含む）を対象として、フィールドワークを主たる研究手法としている方

②化学、地学、物理学の境界領域で環境の解析・評価ができる方

3. 応募資格：

①40歳前後の方で博士の学位取得者（平成12年度から大学院博士後期課程を担当していただく予定です。文部省設置審の審査をパスできる方）

②30歳前後の方で博士の学位取得者あるいは取得見込み者

4. 授業科目：

①動物生態学関連科目（野外実習などを含む）、自然科学分野の一般教育（全学対象）、大学院自然科学研究科（博士前期・後期課程）

②広い意味での環境解析学（化学、地学及び関連科目、野外実習を含む）の学生実験並びに情報教育

5. 任用予定日：平成10年6月1日以降の可能な限り早い時期

6. 提出書類 (A4版):

- (1) 履歴書
- (2) 研究業績目録 (査読付き雑誌に発表された原著論文, 総説, 著書, その他を区分してリストにする)
- (3) 主要研究論文 (10篇以内) 別刷各1部
- (4) 研究成果の概要 (2,000字程度)
- (5) 今後の研究計画と教育に関する抱負 (2,000字程度)
- (6) 照会が可能な2名の方とその連絡先

7. 応募締切日: 平成10年4月30日 (必着)

8. 書類提出先: 〒860-0862 熊本市黒髪2-39-1

熊本大学理学部環境理学科 学科長
(簡易書留にて「環境理学科教員応募書類在中」と朱記して郵送)

9. 問い合わせ先: 書類提出先

Tel: 096-342-3384 (実政), 096-342-3316 (環境理学科事務室)

Fax: 096-342-3320 (理学部事務)

e-mail: sanemasa@aster.sci.kumamoto-u.ac.jp

当学科のホームページ <http://www.sci.kumamoto-u.ac.jp/~todakei/kankyo.htm>

環境理学科には、現在、以下の教員が在籍しています。

環境解析学講座: 黒澤 和・教授 (有機化学)

実政 勲・教授 (分析化学)

清水 洋・教授 (地球化学)

戸田 敬・講師 (分析化学)

環境動態学講座: 松坂理夫・教授 (動物形態学)

石田昭夫・教授 (環境微生物学)

内野明徳・助教授 (植物細胞遺伝学)

高宮正之・助教授 (植物分類学)

九州大学理学部教官公募について

人事公募の案内がまいりましたので、お知らせいたします。

1. 職種人員 助教授1名

2. 専門分野 希元素地球化学 (無機地球化学, 化学地質学, 鉱床学, 地球惑星資源学を含む)

3. 着任時期 決定後なるべく早い時期

4. 提出書類 ・履歴書

・これまでの研究概要 (A4用紙2枚

以内)

・研究業績リスト (原著論文, 総説, 報告書, 著書に区分)

・主要論文の別刷3編 (業績リストに○印を付す)

・着任した場合の研究・教育に対する抱負 (A4用紙2枚以内)

・応募者を熟知し, 意見を聞ける方2名の氏名と連絡先ならびに応募者との関係

5. 応募〆切 平成10年5月8日(金)

6. 書類送付先および問合せ先

〒812-8581 福岡市東区箱崎6-10-1

九州大学理学部地球惑星科学科

希元素地球化学講座所属

助教授候補者選考委員会

委員長 島田允亮

Tel: 092-642-2516, Fax: 092-642-2684

e-mail: nshimada@geo.kyushu-u.ac.jp

7. その他

・提出書類のうち, ・以外は全てA4用紙を使用すること。

・封筒に「応募書類在中」と朱書きし, 簡易書留で郵送のこと。

以上

名誉会員の紹介

このたび、黒田和夫先生 (アメリカ, Arkansas 大学名誉教授) が日本地球化学会名誉会員に推挙されました。坂本 浩先生 (金沢大学理学部) に黒田先生をご紹介いただき、また黒田先生よりもメッセージをいただくことができました。以下ご紹介申し上げます。

日本地球化学会新名誉会員黒田和夫 (Paul Kazuo Kuroda) 博士のプロフィール



を発見 (1964) され、太陽系元素の年令を決める時計

1997年度日本地球化学会総会において、黒田和夫博士 (アメリカ, Arkansas 大学名誉教授) が名誉会員に推挙されました。黒田先生は、既によく知られている「太陽系初期における Pu-244 の存在」に気付かれて (1960) これ

として、また太陽系の形成過程を解く有力なプローブとして詳しい研究を進展させてきたこと、及び「天然原子炉の存在」を予言 (1956) し、かつ、アフリカ Oklo 鉱山でこの予言が立証 (1972) されて、17億年前の地球上で大規模の核変換が起こったこと、このとき大量の水などウラン鉱床の形成と核連鎖反応を起こす十分な地質学的条件が存在したことなどが分かることとなり、これらを主な業績として、1991年度の日本地球化学会総会において第1回柴田賞が贈られています。

黒田先生は大正6 (1917) 年4月1日福岡県黒木町のお生まれで、核分裂発見の昭和14 (1939) 年東京帝大理学部木村健二郎研究室を卒業後、同研究室助手、助手 (一時は柴田雄次研) を経て、昭和19 (1944) 年理博、助教授となられましたが、昭和24 (1949) 年に戦後頭脳流出第1号として渡米 (Minnesota 大, E. B. Sandell 研) されました。昭和26 (1951) 年には Arkansas 大 R. Edwards 教授に招かれ、1987年同大 Edgar Wertheim Distinguished Professor of Chemistry として停年御退官されるまでの40年近くを Arkansas 州 Fayetteville を拠点に宇宙・地球化学、核・放射化学の研究 (研究論文・著書約350編) と教育 (Ph. D. 約80名) に巨大な足跡を残されました。その後は Nevada 大学客員教授兼アメリカ環境保護局 (Las Vegas) 上級研究員を勤められましたが、80歳の現在は Las Vegas のお宅にあって、Arkansas 時代の高弟の一人、W. A. Myers 教授 (Arkansas 大) の協力を得つつ、なお意気盛んに研究を続けておられます。先生は、柴田賞の他に、渡米直前 (1949) に第1回日本化学会純正化学賞、1963年 Arkansas 大 Distinguished Faculty Achievement Award, 1970年 AEC Southwest Regional Award, 1973年 ACS Southern Chemist Award, 1977年 ACS Midwest Regional Award, 1978年 ACS Award (核化学) と数々の賞を受けておられます。これらの受賞の背景については、第1回柴田賞受賞者紹介として本ニュース No.128 (1992, II. 25) p. 8~9 に筆者による短い記事があり、また先生御自身による解説が日本語でも出版されています (例えば、自伝を込めた「17億年前の原子炉—核宇宙化学の最前線」講談社ブルーバックス B720, 1988など)。先生の御研究の大きな流れは「核分裂」を中心にしたユニークな展開と見えますが、基本は丁寧で綿密な実験化学です。特徴的な点は、単純そうに見えても大量試料処理など他の人が手を出しそうにないやり方で実験

をやったのけ、多くの人が見落としてしまうポイントを見つけて、さらにこれを裏付けてゆく洞察力と実行力です。それは、先人の画期的な研究や新しい研究の状況をよく勉強されていて、大きな視点で何が重要な研究であるかを常に考えるという態度から出てくるものです。余人が考えもつかない、いわば途方もないアンビシャスなアイデアを胸に秘めて、辛抱強く挑戦され続ける、とも言えます。従って、私共凡人には俄かには信じられないことが始終です。初期の「本邦温泉の微量化学成分と天然放射能の分析」では、初めての分析測定というだけでなく、なぜそのようになっているか? という地球化学的意味を考え、また後の「天然原子炉」を考える伏線とされました。戦時研究として大量の有馬温泉から集めたセシウムについて、失敗したとは云え激しい空襲下で分別結晶を繰り返して、新元素「エカセシウム」の発見を目指したなどは、若き日の先生の意欲の高さをよく表しています。温泉で有名なアーカンソーに赴任された当初は、温泉の核分裂生成核種を中心に天然・人工放射能を調べていましたが、核実験盛んな当時、雨水の放射性フォールアウトの観測をはじめられ、これは御停年まで続き、大気圏核実験由来のみでなく、地下実験の場合や一連の Cosmos 衛星落下、Chernobyl 事故、El Chichon と St. Helens 火山等々からの人工・天然放射能の変動を辛抱強く追跡されました。そして、この間、有名な2-box モデルを提唱して⁸⁷Sr, ⁸⁶Sr の解析を行い大気循環・粒子降下過程、さらにホットパーティクルの形成過程 (時間・温度) など、数式化した理論を構築して解明されました。当初は米ソの核兵器開発最盛期で、フォールアウト研究はその負の側面を衝くものであって、かつ有色の日本人がアメリカでということから計り知れない困難があったようですが、大変きれいなデータと分かり易い理論を次々と出され、大気化学・水文化科学研究という科学へ転化されたことは驚くべき成果です。1954年、先生は、Curie 夫妻の Ra, Po, Seaborg らの Pu の探索の流れで、大量のピッチブレンドから⁸⁷Sr, ⁸⁶Sr の分離に成功され、以来、1970年近くまで各地のピッチブレンドなど非照射ウラン中の⁹⁹Mo, ¹³¹⁻¹³⁵I, ¹⁴⁰Ba, ⁹⁹Tc, ¹⁴⁷Pm, ¹⁴⁹Pm の発見を続けますが、これらがすべて²³⁵U の自発核分裂によるものとの証明をされました。これは、前述の天然原子炉—Johanngeorgenstadt 産ピッチブレンドを例にして、いろいろの条件下で Fermi 理論による計算を試み、21億年前 (²³⁵U が4%) に鉱物析出の際

の水の附加、原子炉毒となる不純物質、鉱床の大きさ次第で、自然に核連鎖反応がおきてもよい—の自らによる実証を目指したものでした。先生はこの努力の一方で、機会ある毎に自説を披露され続けられました。1964年に直接にこの話を伺った筆者も含めて殆どの人々は信じ難い話として受け止めました。それだけに1972年の Oklo 現象のニュースは衝撃的でした。先生の苦節16年、着想から数えれば30余年後の大きな稔りでした。E. Fermi は、1930年代 Rn や Po の α 線を使って熱中性子捕獲反応の広範な測定でノーベル賞を得ましたが、黒田先生は1960~70年代には Cockcroft-Walton 加速器を手元に置いて、14MeV—中性子を使った核反応の研究を連綿と続けられ断面積データや新アイソトープについて沢山の報告をされています。上に述べた研究とは直接関係がないように見えますが、先生の中性子反応への深い造詣があつてのことであり、後述の「黒田の統一理論」への布石にもなっているようです。化学元素の起源や年令に関心をもつのは、物理学・天文学或いは天体核物理学の研究者で、一般の化学者は消極的にみえます。しかし、古くは R. Boyle や F. W. Clarke, W. Crookes, 今世紀になって T. W. Richards, V. M. Goldschmidt, H. C. Urey, H. E. Suess といった化学者達は元素存在度と元素の起源の解明に貢献してきています。黒田先生は、大正5~6年頃にはじまる長岡半太郎先生の宇宙論と柴田雄次・木村健二郎両先生の希元素鉱物の化学研究の伝統の中で、この分野に深い注意を払ってきたとのことです。1960年 J. H. Reynolds が Richardton コンドライト中の Xe 同位体スペクトルに消滅核種 ^{129}I 由来の ^{129}Xe の過剰を発見しましたが、黒田先生はこのスペクトルを見て重い $^{132}\text{--}^{136}\text{Xe}$ の僅かな変動がある(地球大気と比較して少ない)ことに注目し、これが消滅核種 ^{244}Pu によるものであらうとされました—Pu-244仮説—。先生はあまり自信がなかったようですが、自分で詳しく調べてやろうとして、早速に総バイレックス分析管よりなる Reynolds 型質量分析計を導入し、Arkansas に Xenology 研究の一大拠点作りをはじめられました。大学院生 O. K. Manuel は装置を組み立てて Xe 測定を軌道に乗せ、M. W. Rowe, D. D. Bogard が続きます。Pu-244起源の Xe が発見されたのは、1964年夏のことです。先生は、Xe スペクトルパターンの研究の一環として、東大核研(当時)の電子シンクロトロンを使って ^{238}U の光核分裂を筆者と共に徹夜実験をされましたが、その留守中に M. W. Rowe が行っ

たいたずら実験という瓢箪から駒が出たのです。短寿命の消滅核種の痕跡は、より始源的なコンドライトで探るのが常道で、Berkeley でも Arkansas でもその方向の探索がされていましたが、Rowe は偶々手持ちのエイコンドライト Pasamonte の Xe を測定しました。この結果は、4ヶ月遅れで発表された R. L. Fleisher らの核分裂飛跡の ^{244}Pu 由来の過剰に続いて多くのエイコンドライトの Xe 測定で確認され、さらに1971年人工合成の ^{244}Pu を使った E. C. Alexander ら Reynolds グループによる Xe スペクトルの測定により決定的となり隕石(太陽系)形成時間の導出による r-過程元素の年令の議論ができるようになりました(最近までの進展は海老原 充氏による総説「 ^{244}Pu 年代法の可能性と問題点」, 地球化学, 27巻, 83~95 (1993) を参照)。この様にして黒田の「Pu-244仮説」は提出後12年の苦節を経て確固たるものとなり、翌年の「天然原子炉発見」と合わせて、先生の名声は大変大きなものとなりました。この時期頃からは Apollo 計画による月試料の研究が盛んになり、月での希ガス同位体の組成も明らかになってきました。

ところで、上記の消滅核種を求めての始源的隕石の Xe 測定の流れの中で、1963年 Berkeley で見付けられた炭素質隕石 Renazzo の Xe 同位体に CCF-Xe と呼ばれる成分があり、これは既知のどのような過程でも説明がつかず、「ゼノンの謎」として諸説が飛び交うこととなります。黒田先生の「謎」解きは、月と地球と隕石の比較から、質量分別、高エネルギー粒子による核破砕反応、並びに T. Tauri 段階での速中性子捕獲反応を考え、これに ^{244}Pu の自発核分裂と ^{129}I の壊変分を加えればよい、とするものです。一方、1975年に E. Anders グループは炭素質隕石 Allende を(HCl+HF)で処理したあとの0.5%ほどの溶解残渣に隕石 Xe の殆どが含まれ、さらに酸化処理等を加えてゆくと軽 Xe 同位体と重 Xe 同位体が相関して富化する顕著な CCF-Xe パターン(1972年 O. K. Manuel が発見)が得られることをかなり偶然に見出しました。その後、偶数質量数の Xe 同位体(s—過程核)に富む成分や ^{21}Ne (Ne-E)が異常に濃集している成分などが探索され、隕石の400ppmを占めるダイアモンドに CCF-Xe、数 ppm の SiC に s-Xe, s-Kr, Ne-E がふくまれており 2 ppm のグラファイトは高い(12C/13C)比の炭素から成りより純度のよい Ne-E を含むことなどが分かり、これらが星内核反応起源物質であるとされてきて、現在もこの方向の研究が主流となっ

て甘利幸子さん達が活躍されています。しかし、隕石の大部分を占めるケイ酸鉱物や他の同位体組成の希ガスなどの成因の追求はおろそかになっています。他方、黒田先生は、Xe 以外の希ガスや酸素, Mg, Si, Ca, Ti, Ba, Ce, Nd, Sm, Gd 等々の同位体異常の全てが太陽系初期の過程で生じた同位体効果による「黒田の統一理論」で説明できるとして、精力的に自説を主張しておられます。黒田理論への反論は、同位体差を説明するのに必要な宇宙線フラックスが多き過ぎるといわれていますが、提唱以来30年近く経た今、凡人が納得するような決着はまだつきそうにありません。最近の先生の御心境と日本の若い宇宙・地球化学者へのメッセージをとお伺いしましたところ、以下の文『宇宙化学稀瓦斯怪談』を戴きました。「黒田節」意気軒昂というところでしょうか! 以って学び、銘すべきところです。

(金沢大学理学部 坂本 浩)

『宇宙化学稀瓦斯怪談』

黒田和夫

今から27年前の昭和45(1970)年の12月はじめのある日、ニューオレアンズのあるレストランで、私の門下生十数名が、私のアメリカ化学会西南地区賞の受賞祝賀会を開いてくれていた。その席上、一人の大学院学生が第1図に示すような『The New Orleans Star』という架空の新聞の号外を全員に配布して一座は大笑となった。その号外のヘッドラインは『黒田門下生プルトニウム-244の存在を否定』という穏やかならぬもので、彼はニューオレアンズの繁華街でこのような贗の号外を印刷する店を見付け出したらしい。いかにもアメリカ人の学生のやりそうな悪戯であるから、私は一笑に付してこの事件は忘れかけていた。ところが『嘘から出た真』といわれるように、この事件は私の学者としての生涯に致命的な影響を与える一連の大事件に発展してゆくこととなった。明くる年の昭和46(1971)年には、カリフォルニア大学のレイノルズ(J. H. Reynolds)教授の研究室で、私が11年前の昭和35(1960)年に提唱した『プルトニウム・二四四説』が正しいものであるという最終確認実験が行われ、その次の年の昭和47(1972)年になると、私が16年前の昭和31(1956)年に予言した通りの『天然原子炉』の化石がフランスの原子力研究所の所員達によって発見され、私の研究室の前途は洋々たるものとなった様に思われた。そこで私は、次の年から研究費を2倍にして

くれと政府に申請したところ、『オクロ現象』の発見はフランスにしてやられ、 ^{244}Pu の仕事はもう済んだことであるという理由で、逆に前年度の3分の1にカットされたのです。そして思ひかけぬ伏兵が次々に私の前に出現しはじめたのである。第1表にその時出現した伏兵のリストを示す。

第1表 伏兵のリスト

- 一. グレン・シーボルク教授(1951年ノーベル化学賞)
- 二. ウィリアム・ファウラー教授(1983年ノーベル物理賞)
- 三. グリン・ホフマン教授(1997年アメリカ科学賞、日本の文化勲章に相当するもの)
- 四. 坂本 浩教授(日本の金沢大学理学部化学教室)(a)
- 五. オリバー・マニユエル教授(米国ミズリー大学)(b)
- 六. カルビン・アレキサンダー教授(米国ミネソタ大学)(c)

(a)1960年代後半にアーカンソー大学化学教室に留学。

(b)1963年博士課程終了のアーカンソー大学における私の一番弟子。

(c)ミズリー大学における(b)の一番弟子。

こうなつては今から25年前に私の学者としての生涯は終わったようにみえたのであるが、最近になって決してそうではないことに気が付き、そのことを詳しく記した論文2編を私が30年以上も前から毎年きちんと日本のお金で会費を払い続けていた『Geochemical Journal』に投稿したのが今年の5月か6月の末であった。すると、日本地球化学会の会長から、私に『日本地球化学会名誉会員の会員証を渡すから、9月の中旬に都立大学まで取りに来て貰いたい。但し、アメリカからの旅費は出せない。』という手紙と前後して『Geochemical Journal』から『二人の査読者の方々の御意見では、貴殿の論文は本誌に出版するに値せぬものであるから却下せざるをえぬ故、何卒悪しからず云々』という丁重な手紙が届いた。どうやら地球化学会名誉会員になると論文審査の基準が普通会员の場合より遥かに高くなるものらしい。

これが『宇宙化学稀瓦斯怪談』という、私の身の上話でございますが、私が自分もいつの日か希瓦斯の研

[illegible]

究をしようと決心したのは、今から62年前の遠い昔、昭和11年に私が東大理学部1年生の時、柴田雄次先生の研究室でまだ大学院学生であられ、現在日本地球化学会名誉会員の方々の中で最年長であられる野口喜三雄先生が、毎日希ガス分析装置の組み立てや、調整に力を注いでおられるお姿を拝見して、深い感銘を受けたからでした。

(1997年10月8日、4191 Del Rosa Court, Las Vegas, Nevada, U. S. A. 89121)

1997年日本地球化学会各賞受賞者の紹介

以下の方々が1997年度の柴田賞及び奨励賞を受賞されました。各氏を知る方々に、紹介文を寄稿していただきました。

柴田賞：立本光信先生

(米國地質調查所 名譽研究員)

受賞課題「U-Pb, Lu-Hf 同位体惑星科学の研究」



炭酸塩のウランの
の師友となつた

ターソンの元で、碎屑性堆積物の鉛同位体より地殻、マントルの進化を探索しました。そして、1962年には米国地質調査所 (USGS) の主任研究員となり、1995年に退官するまでの33年間、火山岩、月の岩石、隕石の精密同位体分析研究で数々の先駆的な業績をあげられました。その成果は、140編を越す原著論文として発表され、地球科学、惑星科学の教科書、専門書、論文に数多く引用されています。その輝かしい業績と学

会への貢献により、1976年にはパリ大学の名誉博士号を、1977年には米国内務省から業績功労賞、1988年には特別功労賞を受賞し、国際地球化学会、国際隕石学会、国際地球物理連合の Fellow に選ばれています。さらに1996年には、立本先生の退官を記念する AGU 特集号 (Geophysical Monograph Series) “Earth Process: Reading the Isotopic Code” 437p. (Eds: A. Basu & S. Hart) が出版されました。

立本先生が USGS に赴任した頃は、海洋底拡大説

からプレートテクトニクス論に至る地球科学の新しいパラダイムが出現しつつある時期でした。多くの地球物理観測の結果はこの仮説を証明するものでした。しかし、中央海嶺で生成されたプレートの行方（沈み込みと火山マグマへの取り込み）についての実証的な証拠はかならずしも十分ではありませんでした。立本先生は沈み込み帯の火山岩の鉛同位体比にその証拠があると考え、鉛汚染（blank）の格段に低い、精密な鉛同位体分析法を開発し、超微量の鉛同位体の精密分析に成功しました。これを用いて日本列島の火山岩を始め、ハワイなどの海洋島火山岩の鉛同位体比を徹底的に分析し、プレートの沈み込みを実証すると共に、当時よくは知られていなかったマントルの同位体比の不均一性を次々と明らかにしていられました。これは同位体を用いたマントルダイナミクスの先駆的研究であり、プレートテクトニクス論の発展史上の極めて大きな貢献であります。

こうした実験手法は地球の岩石にとどまらず、1969年の最初のアポロ月試料に対しても用いられ、立本による「月の石のU-Th-Pb年代決定」は多くの研究者の注目を集めました。米国地質調査所（デンバー）の無鉛実験室（Lead-Free-Lab）に象徴されるように、1970年代を通じてデンバーで得られた同位体の精密データは、月の年代学の確立に決定的に重要な役割を果たしました。1973年には、かねてから懸案となっていた始原鉛同位体組成の確立に成功しました。キャニオンディアプロ鉄隕石中のトロイライトの精密な初生鉛同位体組成の結果は、隕石の年代の精密化にとどまらず、地球の年齢推定、月の年代計算を信頼に足るものになりました。これは、太陽系年代学を確信をもって語れるようにしたものであり、惑星科学の原点とも言える発見であります。1980年代から1990年代では、火星隕石や月隕石など新たな惑星物質のSm-Nd・U-Th-Pb・Rb-Sr法による精密年代決定でも重要な惑星科学的貢献をされました。

さらに1980年には、世界で初めてLu-Hf法の開発に成功しました。これにより、隕石、地球の深海底玄武岩、月の火成岩中のハフニウム同位体を分析し、Pb-Nd-Sr同位体と比較して、ハフニウム同位体が惑星マントルの進化の極めて有効なトレーサーであることを実証しました。この方法の開発は、現在一般化しているマルチアイソトープ手法の基礎を確立する上での重要な貢献であります。

立本先生と接した日米や欧州の地球、惑星科学研究

者は限りなく多く、これらのひとびとからは常に“Tats”の愛称で親しまれております。先生は若手研究者へ気を配られ、ほとんど毎日深夜まで研究員と一緒に働かれました。先生はこよなく日本を愛し、多くの日本の若手研究者を育てられました。その他にも、日本の地球、惑星科学研究者でデンバーを訪ね、立本先生ご夫妻のお世話になった人の多いことを最後に付しておきます。

中村 昇（神戸大学理学部）

日本地球化学会奨励賞：岩森 光会員

（名古屋大学大学院理学研究科）

受賞課題「地球化学的数値実験によるマグマの形成・移動メカニズムの研究」



数値実験は、気候変動や星の形成など物理学に関連した分野で盛んに用いられるが、固体地球化学の分野ではさほど多くない。それは分析を手段とする地球化学者には、自然界の元素や同位体の挙動は数値で表現できないほど複雑に見えることによると思われる。岩森さんは、岩石学とテクトニクスを基礎として数値地球化学の研究に飛び込んで来た。

西南日本中国地方に分布する新生代玄武岩の化学組成が帯状分布をもって変化することを見いだしたのは東京大学の大学院生の時で、その解釈のため $\text{H}_2\text{O}-\text{CO}_2$ を含む系についての高圧融解実験、XRF・INAA・EPMAを駆使した化学分析に基づいて研究を進め、その火成活動が低融点成分の導入による融解と湧昇流に伴うものであるとの結論を得た。この研究を通じて、マグマの生成過程が動的なものであることに気づいた岩森さんは、名古屋大学の助手として赴任の後、元素存在度や同位体組成がその“流れながら反応する系”の重要な指標であるとし、化学情報から物理モデルを追及した。そして、海嶺下では生成されたマグマの80%以上がまばらなチャンネルを通り、溶融後1600年以内という比較的短時間で地表に運ばれることを明らかにした。

液相（マグマ）が流れながら周囲と反応する場では系の化学組成が溶融とともに変化して行くため、溶融の熱力学も影響を受ける。岩森さんはこのことを化学組成をファクターとする数値計算によって評価し、 H_2O を含む系では減圧固化—圧縮溶融が起こると考え

るのが妥当であることを見いだした。この結果を沈み込み帯に応用し、沈み込み帯では圧縮溶融が大規模に起こっている可能性を指摘した。同時に沈み込み帯のマントル対流パターン、U/Th/Kなどの熱源と発熱量と溶融の関係についても検討を行い、沈み込み帯の火成活動を支えるためには平均的なマントルより一桁大きな熱源が必要であることも明らかにした。いま、沈み込むスラブから放出される水や生成されるメルトの移動と化学反応を競合させた言わばフルモデルの構築に取り組んでいる。

地球化学会の草創には地質や岩石学を専攻するたくさんの方が地球化学の将来に夢を馳せたものと思う。ニュース No.12によると1960年には、坪井誠太郎、久野久、須藤俊男、渡辺武男、八木健三などの諸先生が役員として積極的に会の運営に参画されていたことが記されている。いまから20年の後、岩森さんと彼の学問を発展させた学生が地球化学に新風を吹き込んでいることを確信する。

さて、ここからは多少 confidential な紹介である。

岩森さんは平成4年に名古屋大学に赴任して来られた。相撲部では舞の海と同期にあたりかたで、歓迎会のとき土俵入りを見せてくれた。しかし、飲み過ぎて自力では立ち上がれなかった。その分学生もパワーをつけ、プロボクシングの4回戦に臨んだ指導生も出てきた。地球惑星科学教室では講義のほか地球化学実験を分担している。実験書を見ながらあれこれ予備実験をしている岩森さんを見ると、地球化学の教育は経験ではないことがわかってくる。また、岩森さんの研究領域は同じ講座にいる私の研究分野と完全に一致しない。しかし、一致するのではなく隣に余裕のある人がいることがどれだけ自分の視野と行動範囲を広げてくれるかもわかった。岩森さんが名古屋に来られて5年が過ぎた。名古屋には有名な？「名古屋嫁取り物語」というテレビ番組がある。私は、番組は見たことがないが、ぜひ本物を見たいものだと思っている。

田中 剛（名古屋大学）

日本地球化学会奨励賞：木多紀子会員

（地質調査所）

受賞課題「エンスタタイトコンドライトおよびユレイライトに関する年代学的研究」



木多さんは、これまで各種の隕石について、精度の良いRb-Sr、U-Th-Pb、Sm-Nd同位体系の分析に基づいて、太陽系の初期過程に関する研究を実施してきた。特にユレイライトの年代については、地球上での汚染を除去することにより、46億年の年代を得ることに成功し、これまでの国際論争に決着をつけ、ユレイライトの成因に強い制約を与えた。最近では、大型の二次イオン質量分析計の測定技術開発に大きな役割を果たしており、既に隕石のFe-Ni同位体系などの測定に成功している。以下に詳しく述べるように、木多さんの今後の活躍が大いに期待される。

木多さんは東京大学大学院修士課程では、同大学山越和雄教授のもとで、隕石中のCAIの同位体の研究を実施した。引き続き同大学院博士課程では、同大学小嶋稔教授のもとで、国立科学博物館島正子博士とともに世界的にも珍しいエンスタタイトコンドライトの研究に取り組み、段階溶解と粒度分離を用いたRb-Sr等時線年代法や質量分析計の改造を行うことにより精度の良い同位体組成分析を実現した。その結果、エンスタタイトコンドライトの一部には、21億年前に再加熱されているものがあることが明らかになった。この年代は45億年の形成年代に比べて著しく若く、世界でも初めての報告となっただけでなく、再加熱が太陽近傍の軌道上で生じた可能性をも示している。博士号取得後、日本学術振興会の特別研究員として、神戸大学の中村昇助教授のもとで、南極産ユニーク隕石の希土類元素、K、Rb、Sr、Ba、Mg、Ca、Feの組成とSr同位体組成の研究に取り組み、これらがコンドライトの一部が溶融して生成することを示した。さらに米国地質調査所の立本光信博士のもとで、米国宇宙局との共同研究を行い、分化した隕石であるユレイライトおよび月隕石の同位体的研究に取り組んだ。ユレイライトについて、きわめて低濃度の同位体の分離に成功し、隕石が地球に落下してからの汚染を分離評価することを可能にした。地上での汚染の評価については、国際論争があり、木多さんはこの論争に正面から取り組み決着をつけた。さらに、やまと793169月隕石のU-Th-

Pb年代系について明らかにし、月に低U/Pb源がある可能性を指摘した。

地質調査所に入所後、高感度高精度二次イオン質量分析計のたちあげに大きく寄与し、消滅核種であるNi-60について、40ミクロンの微小領域について、 $^{60}\text{Ni}/^{64}\text{Ni}$ 比を1パーミルの精度で同位体比測定することに成功した。この技術を最も古い年代の得られているユレイライトMET78008中のかんらん石に適用し、この隕石がCAIの形成後5 Ma以上経過してから形成されたことを明らかにした。現在、隕石中の燐酸塩のU-Pb年代測定法および地球のマントル起源のダイヤモンドの微量元素組成の研究にも手を広げ、精力的に取り組んでいる。

今後も、太陽系の初期過程に関する研究において、木多さんの持つ科学的な問題意識の鋭さと問題を解決するための集中力を発揮し、日本はもちろん世界の宇宙科学の発展に寄与してほしい。木多さんは何かを始めるとまっすぐにその世界を突き進む。それは大変良い点であるが、ときどき、その世界に首をつっこみすぎた時、ちょっと肩をたたいて振り向いてもらおうのが、私の当面の役割かと思っている。今後の活躍に大いに期待している。

富樫茂子（地質調査所）

書評

「地球システムの化学 環境・資源の解析と予測」
（鹿園直建著、東京大学出版会、A5版319頁、1997年9月発行、定価5,400円＋税）

現在大きな社会問題となっている地球表層環境、この問題に関係する地球化学者にとって最近大変参考になる本が出版された。近年の分析機器や観測測定機器の進歩によって、地球システム内の様々な対象物・空間・時間に関して、膨大な量のデータが生産されるようになっている。しかし、自分の専門分野をベースに地球環境問題に取り組もうとすると、得られたデータを数学的・物理学的モデルに組み込んで解析する事が必要であり、さらにそのモデルを立てるためには地球表層において起こっている様々な物質移動のプロセスについても理解しておく事が必要であると痛感している人は多いと思う。しかしながら、LasagaやAlbarede、それにStummなどの本は難解すぎると思っ

ておられる方（実は私もその一人）は本書を手にとってみてほしい。本書では地球表層システム中の地質現象やそれらの相互作用のモデルとその物理化学的な解析法について、様々な実例を挙げて平易に解説している。

第2・3章は手始めに化学平衡モデルの立場から水の化学組成、酸化還元条件、鉱物の溶解度、水-岩石反応と鉱床生成について解説している。第4章では次のステップである非平衡・動的モデルということで、物質移動の基本式、鉱物の溶解・沈殿の反応速度論、拡散と流動、さらにそれらの結合モデル、及び部分平衡では説明できない組織・構造・パターン形成について、様々な相互作用を鉱床での現象を例にして解説している。このように第2～4章では最近の鉱床学ではどのように物質の移動や濃集過程が解析されてきたかが具体的な例としてわかるし、これらの手法は他の分野での地球表層の物質移動の解析にも有用である。第5章では前章までの理論と方法論を基礎にしたシステムの解析の例として、熱水性鉱床を伴う熱水系と海水組成について解説している。1980年のアルビン号の海嶺熱水鉱床の発見以来この複雑なシステムについては集中的に研究が行われており、そのモデリングの成果が要領よくまとめられているのはうれしい。第6章は、物質移動のメカニズムを問わない数学モデル、いわゆるボックスモデルによる物質収支の解析例の紹介である。炭素、硫黄、隣、及びいくつかの微量元素についてのグローバルで長期的な地球化学サイクルについて記述している。さらに第7章では地球化学サイクルに対する人間社会システムへの影響について簡単に述べた後、酸性雨、地下水、湖水など水に関連した人為汚染や放射性廃棄物の地層処分での物質移動モデルの簡単な例について解説がなされている。第1章と最後の第8章は総論と本書の基本思想の解説である。また、「ロジステックモデル」などの数理学的な専門用語や「縞状構造」のような理解のキーになる概念のみならず、地学系以外の読者に対する配慮であろう、「グリーンタフ」や「黒鉱」などの記述の理解に必要な最小限の鉱床の専門用語についても別枠で平易に解説してあるのが、本書を読みやすくしている。

本書は1992年に同じく東京大学出版会から出された「地球システム学入門」の続編という事だが、内容的には全く異なる。前書は地球表層にある様々な対象物の一般的な記述であり、いわゆる大学教養課程の学生向きの概論であるのに対し、本書は地球システムの解

析に関する応用例を数多く具体的かつ定量的に記述した専門書である。これまで帰納的な手法のみを用いていた物質科学（岩石学・鉱物学・鉱床学）の研究者が、さらに物理化学的法則である演繹的な手法を活用できるようになるための手がかりになることを著者は意図して執筆したという。通常、地球環境問題で扱う系はあまりにも要素や要因の数が膨大でかつ相互作用が複雑なためにまだ不明な点が多く、また、研究も日進月歩なので研究例を紹介するのは容易ではない。これまでに出版されたシュミレーションやモデリングの教科書は工学系や農学系の人為的な汚染に関する内容の書物が多かったが、本書では著者の専門である鉱床学における豊富な研究例を通して、地球表層における物質の移動の解析方法について紹介に成功したといえる。

著者は現在慶應義塾大学理工学部の地球システム科学、地球環境学、鉱床学などの講義を担当されており、それ以外に東京大学、茨城大学、広島大学、日本大学、山口大学の大学院などでの講義の内容が本書の基礎になっているという。そのため大学で地球環境科学関係の講義をする上でも大変参考になる本といえる。ただし大学院生の教科書とするには税なしで5400円とやや高価すぎると言えよう。しかし著者自身の二十編近い研究成果と二十数編の総論も含めて本書の参考・引用文献は約500編であり、数多くの研究例が具体的に紹介してあるために購入しても損した気がしない。慶応大学に移られた後も東大理学部地質学教室の図書室で文献を調べられている著者を、私は東大在籍中に何度もお見受けした。著者のこれまでの研究成果と博学ぶりが伺える力作である。

豊田和弘（北海道大学大学院地球環境科学研究科）

「深海底の科学—日本列島を潜ってみれば—」
（藤岡換太郎著、NHK ブックス、249ページ、1997年11月刊、¥1,020）

深海底は今、いろいろな意味で、世界中の多くの研究者の注目を集めている。そこには、地球表面の7割を占める深海底のことを知らずに、どうして地球全体のことを理解できるだろうか、という共通の認識がある。我が国は、世界で最も深く潜ることのできる潜水調査船「しんかい6500」を運航し、その研究調査能力は世界最高のレベルにあるといつてよい。また世界最大級の掘削調査船の建造にも取りかかろうとしてい

る。このような状況において本書の出版されたことは、たいへんタイムリーであり、また意義深いものがある。

著者は、海洋科学技術センター深海研究部主幹として、我が国の深海底研究の最前線で活躍する地質学者である。深海底と一口にいっても、そこには極めて多くの地質学的事象が、複雑にからみあって存在している。筆者はそのことを十分に承知したうえで、限られたページ数を最大限に活用し、それらのできるだけ多くを読者の目前に取り出してみせる。序章と第1章では、深海底地球科学の基礎が要領よくまとめられている。そして以下の2、3、4章と、我々に最もなじみの強い日本列島周辺の深海底に関する壮大な絵巻物が展開されていく。第5章では、日本列島の陸上の地質現象まで視野が広がっていく。これらの章を通じ、話題が頻繁に切り替わったり、あるいは重複したりするが、さまざまな切り口から現象を見てゆこうとする筆者の苦勞がしのばれる。そこかしこから熱い蒸気が発泡しているような本であり、また決まった枠をはめにくい本である。深海底の科学という学問分野は極めて新しく、まだまだ謎だらけなのだ。見方を変えれば、本書は磨いていない原石ともいべき魅力に富んでいる。筆者は意図的に、読者によって磨かれることを期待しているのかもしれない。

水深6,500mの日本海溝をはじめ、ほぼ40回もの潜航調査を経た筆者ならではの記述は読みごたえがある。なかでも、「日本海溝初のシロウリガイ群集の発見記」（p.76～84）は圧巻のひとつである。何千メートルもの深海底に潜る研究者は、狭い潜水船の中でいったい何を考えているのか、どんな作戦を立て、どんな作業をし、どんな光景に胸躍らすのか、淡々とした筆致の中に生き生きと描かれている。読者は筆者と一緒に手汗を握り、わくわくしながら、深海底のサイエンスが切り開かれてゆく醍醐味を味わうことができる。「大変な苦勞や経費をかけてまで、なぜ

深海底まで潜って行く必要があるのか？」という問いを発する読者のために、筆者は終章にその答えを用意している。

潜水船を用いても見ることのできない、海底下の地球内部を探る手段である深海掘削船も、随所に登場する。ここでも筆者の豊富な乗船体験が十分に生かされている。地球について研究する者は、まず地球を自らの足でしっかりとふみしめ、その堅さ柔らかさを実感する必要があるだろう。深海底へ潜水船で潜ったり、深海底に掘削孔を開けることも、実はその延長線上にあるのである。

本書は、我々のふみしめている日本列島、さらには地球のなりたちと現実の姿についてさまざまな示唆を与えてくれる。と同時に、地球化学分野の研究者に対しても、多くの問題点を投げかけ、その解決を迫っている。

なお、わずかではあるが、明らかに筆者の記憶違いもしくはミスプリントと思われる箇所が散見される。たとえば、1982年の白鳳丸の航海でマリアナトラフの熱水活動に関連するメタンガス濃度異常を発見したのは私（蒲生）であると記載されている（p.178）が、これは明らかな誤りで、発見者は堀部純男博士（当時東京大学海洋研究所教授）を中心とする研究グループである（1986年にNatureに発表された）。また、海洋地質学の予備知識がほとんどない読者でも、さして苦勞せずに読み進める配慮がもう少しあるとありがたい。たとえば、海洋地質学の専門家にとってはおそらく常識である用語や人名が、前触れなくボンと飛びだしてくる箇所がかなりあるが、簡単でも注をつけるか、あるいは巻末にまとめてあれば、用語集としても役立つであろう。海底地形や陸上の地形の話は、そのつど適切な地形図を参照しながら読めるとよいと思う。

蒲生俊敏（東京大学海洋研究所）

ニュースへ記事やご意見をお寄せください

今後とも従来と同様、皆様の情報・原稿をお待ちしています。地球化学に関連した研究集会、シンポジウムの案内、人材募集、書評、研究機関の紹介など何でも結構です。編集の都合上、電子メール、フロッピー（マックもしくはDos/Vいずれでも結構です）での原稿を歓迎いたしますので、ご協力の程よろしく願いたします。次号の発行は1998年5月中旬を予定しています。ニュース原稿は3月下旬までにお送りいただくよう、願いたします。また、ホームページに関するご意見もお寄せください。

(編集担当 高橋和也)

編集担当者

高橋和也

〒351-01 埼玉県和光市広沢2-1

理化学研究所 核化学研究室

Tel: 048-467-9420

Fax: 048-462-4662

e-mail: kazuyat@postman.riken.go.jp

米田成一

〒169 新宿区百人町3-23-1

国立科学博物館 理工学研究部

「地球化学」投稿規定 (1996年8月28日改訂)

1. 一般的な事項

1.1 投稿資格、投稿原稿の著者（連名の場合は1人以上）は、原則として日本地球化学会会員であること。

1.2 投稿論文（邦文・Original paper）は、印刷物として未発表のものであって、地球化学に関して独創的で価値ある結論を含むものであると審査員が判定し、編集委員会が認めた場合、これを掲載する。総説（Review）その他の原稿の場合は、審査員、編集委員会が認めた場合、これを掲載する。

1.3 投稿原稿の最終的な採否は編集委員会が決定する。編集委員会は投稿原稿について訂正を求めることがある。訂正を求められた原稿が返送の日より2ヵ月以内に再投稿されない場合は投稿を取り下げたものとみなす。

1.4 論文の掲載の順は原則として受理の順とする。ただし編集委員会が変更することがある。

1.5 初校校正は原則として著者が行う。再校正以後は編集委員会の責任で行う。

1.6 投稿原稿はコピーのみ3部を「地球化学」編集委員会宛に送付する（オリジナル原稿は著者の手元に置いておく）。オリジナル原稿はオリジナルの図表および可能ならば、原稿のテキストファイルが納められているフロッピーディスクと共に、掲載が決定された後に編集委員長宛に送付する。

1.7 印刷後の投稿原稿は原則として著者に返却しない。

2. 本文執筆要領

2.1 原稿の大きさはA4判とする。手書きの場合は400字詰原稿用紙を使用し、ワープロを使用する場合には、原則として1ページを36字×28行とし、行間は6mm以上開ける。

2.2 原稿は簡潔に書く。文章は漢字まじりひらがな書きとし、現代かな使いを用いる。漢字は当用漢字とする。不必要に難解な語句の使用を避ける。ただし、固有名詞や広く用いられている学術用語はこの限りではない。送りがなについて規定はしないが論文では統一する。

2.3 本文の章、節、項に相当する見出しおよび小

見出しは「ポイントシステム」（2.3.1など）による。見出しの数字は原則として3字までとする。章の見出しは2行分をとり中央に位置、節は1行分をとり左1字開ける。項の見出しは左1字開け、本文は1字開けて同じ行から書く。いずれも太見出しとする。

2.4 句点は（.）、読点は（.）を用いる。

2.5 同格の名詞を並記するときには中黒（・）を用いる。（例）砂岩・頁岩および礫岩からなる。

2.6 元素記号を略号として用いることはできるだけ避ける。（例）Liはアルカリ金属元素であるが……→リチウムはアルカリ金属元素であるが……、ただし元素記号が意味を持つときこの限りではない。（例）MnO/Al₂O₃比とCr/Ni比には相関が……、ヨウ素は5価のIO₃⁻として……

2.7 単位はSI系（国際単位系）を使用することを原則とする。

2.8 字体の指定は著者が行う。

イタリック字体：赤で1本の下線

スモールキャピタル字体：赤で2本の下線

ボールド字体・ゴシック字体：赤で波形の下線

2.9 H₂O, Al₂O₃, m⁺などのサフィックス（添字）は、ワープロ等で添字出力のない場合は赤で上付き（V）下付き（^）の指示をすること。

2.10 原稿の長さは、題目、アブストラクト、図表、文献等を含めて刷り上がり8ページ以内を原則とする（刷り上がり1ページは2,100字であるが、1ページ目には本文が殆ど入らないことに注意すること）。刷り上がり8ページを超過する分は著者が出版費を負担する。

3. 標題・アブストラクト

3.1 一連の研究を発表する場合、大題目は脚注とし、その原稿を的確に表す独立した題名をつける。

3.2 投稿原稿には200語以内の英文アブストラクトとその和訳を添える。英文アブストラクトは1枚にタイプする。アブストラクトの和訳は印刷されない。題名、著者名、所属機関名の公式英訳名とその住所を記す。

3.3 英文アブストラクトの下に英語のキーワードをつける。つけ方は「7. キーワードのつけ方」にしたがう。

日本地球化学会ニュース

No. 153

1998. 5. 15

主な記事

●学会記事

□1998年度日本地球化学会年会のお知らせ(Ⅱ)

□1998年度地球惑星科学関連学会合同大会案内

□評議員会, 各委員会, 研連議事録

□三宅賞の推薦依頼

□鳥居基金

□日産学術助成(学会推薦)

□1997年度日本地球化学会年会報告

●その他の研究助成, 学会, シンポジウム等の各種情報のお知らせ

□シンポジウム, 講演会, 人事公募など

現在, 日本地球化学会では, 1996~1997年度将来計画委員会の案に基づき, 地球化学選書の出版が企画・検討され, 出版準備委員会(松久幸敬委員長)が発足しています。出版準備委員会の経過に関する報告(出版目的, 構成・内容, 編集出版体制など)について, 随時本学会ホームページに掲載していく予定ですので, 皆様のご意見をお待ちしております。

現在, 日本地球化学会のホームページを学術情報センターのホームページ内の Academic Society Home Village で公開しております。URL アドレスは, <http://wwwsoc.nacsis.ac.jp/gsj2/index.html> です。ご覧の上, ご意見, ご要望をお寄せください。みなさまのご協力により, より魅力的でアップデートなものにしていきたいと思っています。

1998年度日本地球化学会年会のお知らせ(Ⅱ)

主催：日本地球化学会（共催日本化学会）

日時：10月9日(金)～11日(日)

会場：九州大学文系キャンパス講義棟
(福岡市東区箱崎6-19-1)

内容：一般講演 (15分)

ポスターセッション (展示方法については、申込者に改めてお知らせします。)

課題講演 (原則20分：コンピーナーと連絡先は以下の通りです。内容についてはニュース No.152の記事を参照してください。)

課題1 市民社会にかかわる地球化学

百島則幸 (九州大学理学部)

Tel: 092-642-2590, Fax: 092-642-2607

E-mail: momoscc@mbox.nc.kyushu-u.ac.jp

横山拓史 (九州大学理学部)

Tel: 092-642-2571, Fax: 092-642-2607

E-mail: yokotscc@mbox.nc.kyushu-u.ac.jp

課題2 化学進化とバイオマーカーからみた原始地球環境

下山 晃 (筑波大学化学系)

Tel: 0298-53-6510, Fax: 0298-53-6503

E-mail: ashimoya@staff.chem.tsukuba.ac.jp

村江達士 (九州大学理学部)

Tel: 092-642-2660, Fax: 092-642-2684

E-mail: murae@geo.kyushu-u.ac.jp

課題3 大陸と日本列島の環境地球化学的相互作用

鶴見 実 (弘前大学理学部)

Tel: 0172-39-3613, Fax: 0172-39-3613

E-mail: tsurumi@cc.hirosaki-u.ac.jp

吉村和久 (九州大学理学部)

Tel: 092-726-4743, Fax: 092-726-4842

E-mail: kazz@rc.kyushu-u.ac.jp

課題4 大陸周辺地域での地殻物質の循環

中井俊一 (東京大学地震研究所)

Tel: 03-3812-2111, Fax: 03-5802-3391

E-mail: snakai@eri.u-tokyo.ac.jp

浅原良浩 (名古屋大学大学院理学研究科)

Tel: 052-789-2530, Fax: 052-789-3033

E-mail: asahara@eps.nagoya-u.ac.jp

課題5 新世紀に向けての地球外物質の研究と地球外

資源探査 (日本鉱物学会・日本岩石鉱物鉱床

学会・資源地質学会との共通セッション：10

月9日(金) 14:00～18:00に開催)。

日本地球化学会：高岡宣雄 (九州大学理学部)

Tel: 092-642-2668, Fax: 092-642-2684

E-mail: takaoka@geo.kyushu-u.ac.jp

鉱物学会：坂本尚義 (東京工業大学理学部)

Tel: 03-5734-2243, Fax: 03-3727-4662

E-mail: yuri@geo.titech.ac.jp

岩鉱学会：土山 明 (大阪大学大学院理学研究科)

Tel: 06-850-6111, Fax: 06-843-7194

E-mail: akira@ess.sci.osaka-u.ac.jp

資源地質学会：古宇田亮一 (地質調査所)

Tel: 0298-54-3637

*十分な討論時間を持つために、一般・課題講演を通じ、口頭発表は1演者1件に限らせていただきます。2件目からはポスターセッションで発表をお願いします。ただし、課題講演のうちの依頼講演は例外とします。

*口頭発表は原則としてOHP(一台)使用とします。OHP(一台)以外の機材(OHP二台の場合を含む)を希望する場合は、講演申込時にお申し出ください。

講演申込締切 7月10日(金) 17:00

本号添付の申込用紙またはそのコピーをご利用ください。また、講演申込は1998年度日本地球化学会年会のホームページ (<http://qdeps.geo.kyushu-u.ac.jp/GSJ98/>) および電子メール (gcs98@geo.kyushu-u.ac.jp) でも受け付ける予定です。電子メールで申込を希望される方は、subjectをkoenとして上記宛先に申込書式を要求してください。返信された書式に従って記入し、subjectをkoen-moushikomiとし、上記宛先に再度送信してください。

講演要旨原稿締切 8月10日(月)

“講演要旨作成上の注意”に従って作成してお送りください。遅延、輸送中の紛失の責任は負いかねます。送付方法には十分ご注意ください。

参加費：予約正会員：1,000円、学生会員：無料、

非会員：2,000円、予約外：2,000円

要旨集：予約：4,000円(送料込)、予約外：5,000円

総会：10月10日(土) 開催

懇親会：10月10日(土) 18時から九州大学工学部食堂

(Tel: 092-631-2224) で開催。

予約：5,000円、学生：3,000円、

予約外：6,000円

公開講演会「地球とわたしたち—21世紀のために今の環境を考えよう」

日時：10月18日(日) 午後2時より

場所：アクロス福岡国際会議場

(福岡市中央区天神1-1-1)

詳細は次号ニュースに掲載します。

参加申込締切 9月10日(木) 17:00

予約参加登録、懇親会、要旨集の申込は、本号添付の申込用紙またはそのコピーをご利用ください。また、年会のホームページ (<http://qdeps.geo.kyushu-u.ac.jp/GSJ98/>) および電子メール (gcs98@geo.kyushu-u.ac.jp) でも受け付ける予定です。電子メールで申し込みを希望される方は、subjectをsankaとして上記宛先に申込書式を要求してください。返信された書式に従って記入し、subjectをsanka-moushikomiとし、上記宛先に再度送信してください。

送金：参加費、要旨集代、懇親会費は9月10日(木)までに郵便振替でご送金ください。

郵便振替：01760-1-22010

1998年日本地球化学会年会準備委員会

宿泊および団体便の予約

東武トラベル(株)がお世話します。添付の資料を参照の上、添付の申込書またはそのコピーを用いて9月1日(火)までにお申込ください。詳しくは下記まで直接おたずねください。

〒812-0035 福岡市博多区中呉服町2-1

東武トラベル株式会社福岡支店

Tel: 092-271-2332, Fax: 092-272-0790

年会申込・連絡先

〒812-8581 福岡市東区箱崎6-10-1

九州大学理学部地球惑星科学科

1998年度日本地球化学会年会準備委員会

村江達士

Tel: 092-642-2660, Fax: 092-642-2684

E-mail: murae@geo.kyushu-u.ac.jp

または

〒812-8581 福岡市東区箱崎6-10-1

九州大学理学部地球惑星科学科

1998年度日本地球化学会年会準備委員会

高岡宣雄

Tel: 092-642-2668, Fax: 092-642-2684

E-mail: takaoka@geo.kyushu-u.ac.jp

年会 E-mail: gcs98@geo.kyushu-u.ac.jp

年会ホームページ: <http://qdeps.geo.kyushu-u.ac.jp/GSJ98/>

地球惑星科学関連学会合同大会案内

地球惑星科学関連学会1998年合同大会が下記の要領で開催されます。

詳しくは合同大会のホームページ (<http://gakkai.stp.isas.ac.jp/>) を必要に応じてご参照ください。

1. 会期：1998年5月26日(火)～5月29日(金)

2. 会場：国立オリンピック記念青少年総合センター
(〒151-0052 東京都渋谷区代々木神園町3-1)
小田急線「参宮橋」駅下車 徒歩約7分
地下鉄千代田線「代々木公園」駅下車 徒歩約12分

地球化学関連のセッションは以下の通りです。

5月26日午前 (Cb:地球表層化学) Room:C409 (研修センター館409)

Cb-001 900-915 三浦保範

物質循環と生命化学進化

Cb-002 915-930 佐藤雅規, 下池洋一, 長尾敬介
ほか

薩摩硫黄島火山ガスの炭素同位体平衡温度

Cb-003 930-945 宮田佳樹, 時枝隆之, 天川裕史
ほか

大気中のホウ素同位体比

Cb-004 945-1000 野田雅一, 掛川武, 大本洋

ホウ素のグローバルサイクルにおける生物活動の役割

Cb-005 1000-1015 荒川洋二, 松丸国照, Engin Meric
ほか

トルコ共和国北部のK-T境界層の地球化学的研究

Cb-006 1015-1030 河野元治, 富田克利

電顕分析による桜島火山灰の初期風化

《休憩》 1030-1040

Cb-007 1040-1055 天川裕史, 間仲利樹, 野崎義

行
東部インド洋及びその近隣の孤立海盆における
バリウムの分布
Cb-008 1055-1110 石橋純一郎, 蒲生俊敬, 角皆
潤ほか
堆積層に発達した海底熱水活動の地球化学的特
徴
Cb-009 1110-1125 山中寿朗, 橋本惇, 村江達士
鹿児島湾若尊カルデラ熱水系からの hydro-
thermal petroleum の発見
Cb-010 1125-1140 加藤拓弥, 高野穆一郎, 久野
章人ほか
多摩川河口域における硫酸還元活動
Cb-011 1140-1155 益田晴恵, 三田村宗樹, 北田
奈緒子ほか
大阪層群中の泥質堆積物中のヒ素
《休憩》 1155-1205
Cb-012 1205-1223 各講演者
ポスター 1 番～6 番の preview

5月26日夜 1730-1930 (ポスターセッション) 国際
交流館 1F
Cb-p001 三浦弥生, Thomas Staudacher, 兼岡一
郎ほか
レユニオン島・オリビン試料中の宇宙線照射起
源希ガス
Cb-p002 本多将俊, 清水洋
タクラマカン砂漠の風成堆積物及び中国の黄土
について
Cb-p003 下島公紀
海底熱水系におけるアルミニウムの挙動
Cb-p004 加藤和浩, 和田秀樹, 藤岡換太郎
マリアナ前弧域にある炭酸塩チムニーの炭素・
酸素同位体比
Cb-p005 吉田崇宏, 大本洋, 林謙一郎
Control on biological activity in ocean by si-
derophore
Cb-p006 伊吹祐一, 益田晴恵, 殿界和夫
北摂地域のヒ素含有地下水

5月27日午前 (Cc: 地殻流体) Room: 309
Cc-001 0900-0910 (招待) 岩森光
H₂O and melting in subduction zones
Cc-002 0910-0935 (招待) 鍵裕之, Ren Lu, Russell

J. Hemley
ダイヤモンド中に取り込まれた mantle fluid
Cc-003 0935-1000 (招待) 根岸弘明
地震トモグラフィーによる地殻構造推定と流体
の検出
Cc-004 1000-1025 (招待) 歌田久司, 笹井洋一
電気伝導度構造と地殻活動から見る島弧深部の
流体
Cc-005 1025-1050 (招待) 丸山茂徳, 岡本和明
表層からマントルへの海水の循環機構
Cc-006 1050-1115 (招待) 島海光弘
クラックの分布
Cc-007 1115-1140 (招待) 小林洋二, 岡田義満
たかが山梨県東・西部地震, されど…
Cc-008 1140-1205 (招待) 功刀卓, 深尾良夫, 大
野正夫
伊東沖群発地震時の水位変動解析
Cc-009 1205-1230 (招待) 五十嵐丈二
地殻流体のさざ波

5月27日夜 1730-1930 (ポスターセッション) 国際
交流館 1F
Cc-p001 Tomoyuki Shibata, Eizo Nakamura
B isotope-Nb/B systematics of northeastern Ja-
pan
Cc-p002 小泉尚嗣, 松本則夫, 高橋誠ほか
1995～1997年の伊豆半島東方沖群発地震前後の
地下水位変動
Cc-p003 芳野極
ザクロ石の分布から推定された下部地殻流体の
移動機構
Cc-p004 小山卓三, 小笠原宏, 田村良明ほか
旧生野鉾山中央壑坑水位の潮汐変化の定量的一
解釈
Cc-p005 飯塚義之, Bjorn Mysen, 中村栄三
Experimental study on dehydration and silica
metasomatism
in subduction zones
Cc-p006 大野正夫, 佐藤努, 野津憲治ほか
局所的な地殻歪変化によって生じる地下水流動

5月27日午後 (Ag: 揮発性元素) Room: 402
Ag-001 1400-1415 (招待) 中嶋悟, 伊藤由紀, 鈴
木覚

地殻の水, 粒界, その場観測
Water in the crust, grain boundary, in-situ data.
Ag-002 1415-1430 三部賢治, 藤井敏嗣, 安田敦
マントル中の H₂O 流体相の連結度
Ag-003 1430-1445 溝端裕樹, 大谷栄治, 工藤康
弘ほか
地球内部における水の運搬と存在
《休憩》 1445-1500
Ag-004 1500-1515 住田達哉
高圧下における珪酸塩-水系の熱力学
Ag-005 1515-1530 寺田貴洋, 河村雄行, 秋月瑞
彦
Mg₂SiO₄多形構造中の水素の存在状態と安定性
Ag-006 1530-1545 鍵裕之, 井上徹, John Parise
ほか
高圧含水相中に含まれる水素
Ag-007 1545-1600 井上徹
マントル中の含水鉱物 hydrous β, hydrous γ の
相転移境界
《休憩》 1600-1615
Ag-008 1615-1630 (招待) 黒澤正紀
上部マントル中の水
Ag-009 1630-1645 川本竜彦, John R. Holloway,
David C. Rubie
含水マントルの融解温度とマグマの化学組成
Ag-010 1645-1700 (招待) 大谷栄治, 朝原友紀
初期地球の諸過程における水の役割
Ag-011 1700-1715 (招待) 奥地拓生, 阿部豊
原始大気-マグマオーシャン-金属核間の水素
分配と初期地球進化

5月28日午前 (Ag: 揮発性元素) Room: 402
Ag-012 0900-0915 今井亮
西太平洋島弧の中性～珪長質火成岩微斑晶アパ
タイトの SO₂含有量
Ag-013 0915-0930 宮城磯治, 木多紀子, 森下祐
一
火山岩の揮発性成分分析と火山学
Ag-014 0930-0945 杉浦直治
Light element isotopic measurement by SIMS
Ag-015 0945-1000 佐野有司, 高畑直人, 西尾嘉
朗ほか
Nitrogen recycling in subduction zones
《休憩》 1000-1015

Ag-016 1015-1030 柴田智郎, 宮崎明子, 高橋栄
一
希ガスの固液分配
Ag-017 1030-1045 小嶋稔
“ミッシング・ゼノン”
Ag-018 1045-1100 松田准一, 丸岡照幸, 甘利幸
子
アレンデ隕石中の Q の分離の試み
Ag-019 1100-1115 長尾敬介, 岡崎隆司, 中村智
樹ほか
隕石の希ガス分析
《休憩》 1115-1130
Ag-020 1130-1145 佐々木晶
放射性希ガスから探る, 揮発性物質に富む下部
マントル
Ag-021 1145-1200 (招待) 田近英一
揮発性元素の脱ガス史とグローバル物質循環
Ag-022 1200-1215 倉本圭, 田近英一
「失われた酸素」問題とマントル酸化還元状態
の脱ガス進化

5月27日夜 1730-1930 (ポスターセッション) 国際
交流館 1F
Ag-p001 平賀岳彦
地殻を構成する岩石中の鉱物粒界観察
Ag-p002 河野美香, 山下茂, 日下部実ほか
Excess sulfur degassing メカニズムの解明
Ag-p003 丸岡照幸, 松田准一, Gero Kurat
IAB 鉄隕石包有物の希ガス組成
Ag-p004 井上徹
コマチアイトの生成条件の含水高圧溶融実験か
らの制約
Ag-p005 大和田道子, 長尾敬介, 日下部実ほか
北アルプス周辺地域の温泉ガスの組成と He 同
位体比
Ag-p006 角野浩史, 中井俊一, 長尾敬介ほか
九州高島の捕獲岩に見られるホットスポット的
なヘリウム
Ag-p007 折橋裕二, 長尾敬介, Ashraf Al-Jailani
ほか
イエメン, アルカリ玄武岩にみられる始源的
He 同位体組成の意義
Ag-p008 山本順司, 兼岡一郎
希ガスに基づいたシベリア東部亜大陸下マント

1997年度第4回日本地球化学会評議員会議事録

日時：1997年9月19日(金) 17:20～17:50

場所：東京都立大学91年館多目的ホール

出席者：高岡宣雄会長、石渡良志副会長、赤木右、植松光夫、蒲生俊敬、佐野有司、篠原宏志、清水洋、高橋和也、田中剛、長尾敬介、能田成、増澤敏行、松田准一、松久幸敬、坂本尚義各評議員

1. 第3回評議員会議事録を承認した。

2. 報告事項

(1) 鳥居基金委員会(石渡委員)

学会事務センターに滞っていた申請書について、これを追加審査するのが妥当という第3回評議員会の意見に従って審査の結果、国内研究集会1件の助成を決めた。

(2) その他 なし。

3. 審議事項

(1) テラとの契約について(第2回評議員会からの継続審議)

契約書(案)(第2回評議員会で配付)に基づいて審議の結果、一部を削除して、契約書(案)を承認した。なお、削除した条文および「GJ」と「地球化学」の契約部数と講読先は、テラ出版との覚書として残す。

(2) 1996～1997年度期の活動の概要と残された課題について議論した。

次回幹事会 1998年2月7日

次回評議員会 1998年2月14日

以上

第17期第1回地球化学・宇宙化学研究 連絡委員会議事録

日時：1997年11月13日(木) 13:30～16:30

場所：日本学術会議第4部会議室(6階)

出席者：青木謙一郎(会員)、日下部実(地球化学)、田中剛(地球化学)、中村栄三(岩鉱)、野津憲治(地球化学)、半田暢彦(地球化学)、矢内桂三(地質)、山中健生(生化学)

上記出席者に加えて、秋元肇(化学)、藤井直之(地物研連)、松田准一(地球化学)宮本正道(鉱物)が

今期の委員である。

会に先立って自己紹介の後、委員長に野津憲治委員を、幹事に青木謙一郎委員、田中剛委員、宮本正道委員を推薦により選んだ。

青木委員より学術会議の役割と構成の概略について説明があった。

1. 報告事項

(1) 学術会議関係(青木委員より)

①7月22日に第17期日本学術会議が発足した。126回総会で会長に吉川弘之、副会長に柏崎利之輔と佐々木恵彦会員が、第四部長に和田昭允、副部長に大滝仁志、幹事に土井範久と鎮西清高会員が選出された。

②第127回総会で第五部(工学)世話担当研連のうち12研連は、設置当初の目的を達したので廃止し、新たに12研連を設置した。また第三部担当研連のうち3研連と第七部の1研連を名称変更した。

第17期活動計画(申し合わせ)(案)が審議・検討され、承認された。今期の臨時(特別)委員会が取り上げる重要課題は、学術の社会的役割、20世紀の学術と新しい科学の形態・方法、科学技術の発展と新たな平和問題、アジアのダイナミズムの多面的検討、女性科学者の環境改善の推進、少子社会の多面的検討、食問題、教育・環境問題の8課題である。

③第四部会が7月22、23日、9月25日、10月21～23日に開かれ、下記の審議がなされた。

○各研連の構成が承認され、各推薦研連の指名会員と非推薦研連の世話人が決まった。地質科学関係では「地質研連」と「古生物研連」が斎藤常正会員、「鉱物研連」と「地化・宇宙研連」が青木謙一郎会員、「地質科学総合研連」と「第四紀研連」が鎮西清高会員となった。

○第四部と研連/専門委、さらに関係語学会との縦の連絡を密にする目的で「理学総合連絡会議(理総連)」の設立が承認された。

○第四部附置小委員会として、上記理総連(新規)の外にサイエンス・ミュージアム推進小委員会(継続)と新しい方式の国際研究所推進小委員会(新規)の設置が承認された。

○「研達見直し」問題について

第四部の研連は、A. 主として素粒子・物質・材料、B. 主として生命、C. 主として宇宙・地球、D. 領域横断学術、の4つの大枠に取りまとめられる案が承認され、一年間くらいをめどにして研達見直し問題を議論し、それから具体的な検討を行う予定である。

○ガイアリスト21小委員会の設置(新規)が承認された。

○平成10年度代表派遣会議および代表派遣候補者については、それぞれの研連(専委)において検討し、平成9年12月19日までに書類をだすことが求められている。

2. 審議事項

(1) 前回議事録

第16期第11回議事録(案)を承認した。

3. その他

(1) 「研達見直し」問題について、学問分野の重要性から「地球化学・宇宙化学研連」は必要であることを基本とし、自由な意見交換をおこなった。また、部長提案としてそれぞれの研連がカバーしている分野を部会において短時間で説明することとなっている。本研連は元素の循環や化学プロセスが中心になるが、学問領域や特色を明確にしておく必要がある。第四部は国際対応を重視していることから、IAGCへの対応は本研連の持つポイントのひとつであろう。これに関連して、関係分野で国際会議を開くことが望まれる。などの発言があった。

(2) 今期の本委員会の活動方針については次回から検討を始めることとなった。

(3) 研達議事録を学会広報誌などに迅速に掲載出来るようにするため、幹事は連絡委員会終了後、速やかに議事録(案)を作り、委員の意見を求めた後、議事録として関係学会に配布することが了承された。

次回、第17期2回の委員会は1998年2月20日(金)に開くこととなった。

以上

1998年地球化学研究協会学術賞「三宅賞」の 受賞候補者および研究助成候補者の 推薦依頼について

三宅泰雄教授退官記念事業として1972年に設立され

た地球化学研究協会は、その翌年から、地球化学に顕著な業績をおさめた科学者に、毎年、地球化学研究協会学術賞「三宅賞」を贈呈しています。

さらに1983年から、海外シンポジウムに出席・論文を発表し、または海外の学術研究調査等に参加する地球化学の若手研究者に対し、助成を行なっています。なお、賞金および助成金は本協会を母体として、1983年に創設された公益信託「地球化学研究基金」(受託者：東洋信託銀行株式会社)から贈られます。

つきましては、下記の要領により、受賞候補者および研究助成候補者のご推薦をお願いします。なお、最近3年間の三宅賞受賞者および年年の研究助成受領者は次の通りです。

三宅賞

第23回(1995)秋田大学鉱山学部教授

松葉谷 治博士

「熱水及び火山ガスの水素・酸素同位体による研究」

第24回(1996)筑波大学化学系教授 下山 晃博士

「宇宙起源物質中の有機物に関する地球化学的研究」

第25回(1997)大阪大学大学院理学研究科教授

松田准一博士

「合成実験的手法に基づく隕石及びテクタイトの希ガス同位体研究」

研究助成

第13回(1997)東京大学大学院総合文化研究科広域システム科学系 博士課程1年

学術修士 久野章仁

推薦者 松尾基之(東京大学大学院助教授)

「草津白根山火口湖湯がま湖水の変化と火山活動の関係」

開催場所日時：ブラジル

Sep. 14～20. 1997

主催団体：ブラジル物理研究センター及びメスバウア国際委

発表題目：メスバウア分光法による河口堆積物中の鉄化合物の垂直分布

三宅賞

1. 本賞は地球化学に顕著な研究業績をおさめた科学者に贈呈します。
2. 本賞は賞状とし、副賞として賞牌および賞金(30万円)をそえます。
3. 本賞の贈呈は、1年1件(1名)とします。
4. 規定の用紙に受賞候補者の推薦対象となる研究題目、推薦理由(400字程度)主な論文10編程度に略歴をそえて、協会事務所までお送り下さい。

研究助成

1. 研究助成は地球化学の研究者で、海外における学術調査研究などに参加するもの、ならびに海外のシンポジウム等に出席し論文を発表する者に対して行われます。
2. 助成金は1件10万円とし、年に数件とします。
3. 規定の用紙に推薦候補者(各締切日において満40才迄とする)の海外調査に関しては、略歴、研究業績、調査地(国名、地域名)、調査目的・計画、推薦理由、同行者などを記入し、海外のシンポジウム出席については、略歴、研究業績、国際会議名(主催団体、開催場所、開催年月日)、論文題目、推薦理由等を記入して、協会事務所までお送りください。

三宅賞の贈呈および研究助成者の発表は、1998年12月5日(出)、東京で行ないます。

申込締切日は、三宅賞は、1998年8月31日

研究助成は、第1回締切 1998年8月31日

第2回締切 1999年1月15日

地球化学研究協会

〒166-0022 東京都杉並区高円寺北4-29-2-217

Tel: 03-3330-2455 (Fax 兼用)

第25回日産学術研究助成候補者 推薦依頼について(学会推薦)

今年の表記研究助成の募集の正式な案内はまだですが、次号のニュースですと、締切に間に合わなくなるおそれがございます。そこで、学会推薦に関しては、昨年度の募集案内に基づき、あらかじめご案内申し上げます。本年度募集に関する詳細につきましては各研究機関、大学に揭示されます案内をご参照ください。

1. 推薦件数 一般研究助成 2件、奨励研究助成 推薦枠なし(原則として前件推薦)

2. 一般研究助成につきましては若手・中堅層(40歳前後)の優れた研究者を重視いたします。
3. 日産科学振興財団では次の基準により審査・選考しております。

1. 適合性: 一般的に公的な高額助成金を得にくい、若手の独立した研究か。
2. 重要性: 内容が、独創的、先駆的で学術的な意味が大きい。
3. 明確性: 研究目的が明確であり、さらに研究計画、体制など十分検討されており、実現性が高い。
4. 期待性: 研究者の研究経歴からみて、高い成果が期待できるか。あるいは将来の発展が期待できるか。

4. 推薦者: 学・協会の代表者といいたします。

5. 推薦手続き: 所定の推薦用紙(各機関か、当学会庶務監事に問い合わせてください。日産科学振興財団に直接請求されても結構です)に必要事項を記入され、下記までお送りください。7月31日(金)必着

送付(お問い合わせ)先: 庶務幹事: 海老原充

東京都立大学理学部化学教室

〒192-0397 八王子市南大沢

Tel: 0426-77-2553, Fax: 0426-77-2525

E-mail: ebihara-mitsuru@c.metro-u.ac.jp

研究助成「鳥居基金」募集について

1998年度後期分の応募は7月末日(7/31日金曜日)が締切となります。

つきましては、応募希望者は所定用紙に記載した申請書を書き込み、下記までお送りください。

提出先: 〒113-8622 文京区本駒込5-16-9

学会事務センター内、日本地球化学会鳥居基金委員会

お問い合わせは本学会庶務監事(下記)まで(ホームページにも案内は載せてあります)。

庶務幹事: 海老原充

東京都立大学理学部化学教室

〒192-0397 八王子市南大沢

Tel: 0426-77-2553, Fax: 0426-77-2525

E-mail: ebihara-mitsuru@c.metro-u.ac.jp

1997年度日本地球化学会年会報告

年会準備委員会委員長

石渡良志(東京都立大学理学部)

1997年度の地球化学会年会は9月17(木)から9月19(金)まで都立大学で行われた。前回は1984年、大学セミナーハウス(八王子)での開催であったので、13年ぶりにお世話することとなった。都立大は1991年に八王子新キャンパスに移転し、今回初めて大学内で年会を開くことが出来た。新キャンパスは旧キャンパスのイメージが全くなくなり、初めての方はびっくりされたことと思う。

本年会では、口頭発表210件(課題講演37件、一般講演173件)、ポスター発表61件、学会賞受賞講演3件、を含めて総講演数は273件であった。年会参加者は460名(参加予約者256名、名誉会員6;招待者9)と盛会な年会であったように思う。年会参加者は当初出足が遅く少し心配したが、結果的にほぼ予想通りの参加者があり安堵した。

今回の年会準備委員会は都立大職員だけでは少ないので、いくつかの研究機関(理研、国立科学博物館、神奈川県衛研)、大学(日大、創価大)の会員の方の協力を得て組織した。役割を分担しうまく機能した。年会開催にあたって、年会の会期、課題講演、等について検討し、会期は3日間、課題講演は会期中に行なうこととし、以下の課題(カッコ内はコンビナー)、(1)海洋地球化学の最前線(野崎義行、加藤義久)、(2)21世紀の宇宙化学を目指して(中村昇、海老原充)、(3)質量分析技術の新展開(今村峯雄、杉浦直治)、(4)地球環境変動史の解明に向けて(福沢仁之、奈良岡浩)、を選んだ。課題講演はそれぞれ半日という比較的短い時間しか配分出来なかったため、会員の方々には若干不満が残ったことと思われる。準備段階で工夫した点は、できるだけ各課題講演の前後に関連する一般講演を配置すること、短時間に会場間を移動できるようにできるだけ講演会場は接近させること、などであった。会場近くに関連業者の出展のコーナーを設けた。会期中に時々覗いてみたが、比較的閑散とされていた。もう一つ工夫が必要であった。

1日目夜には、将来計画委員会の世話で「地球化学の将来について」と題した夜間セッションが開かれた。参加者は約70名で、下記のような内容であった。日頃機会の少ない各分野の研究の動向や情報交換が出来て有益な集会であった。カッコ内は発表者。

1. 各分野の研究の動向について: (1)地球環境科学の中核的研究機関について(野崎義行)、(2)海洋: 時系列観測計画 JGOFS/NPTT Station KNOT につ

いて(植松光夫)、(3)大気・環境: ACE-Asia (Asian Pacific Regional Aerosol Characterization Experiment) 計画について(河村公隆)、(4)環境汚染物質研究の現状(高田秀重)、(5)有機分子の炭素同位体測定の研究集会(南川雅男)、(6)古環境: 古海洋学の動向と深海掘削の今後(多田隆治)、(7)地殻: 同位体地球化学の新たな流れ(中井俊一)、(8)惑星科学: 飛翔体を使う月惑星計画の現状と将来(坂本尚義)、(9)隕石研究の展望(海老原充)。

2. 学会関係について: (1)学会をとりまく状況: 学術会議について(研連の役割と今後)(野津憲治)、(2)学会の現状と課題: 財政、学会誌、ニュース、情報ほか、学会運営の改善点など(高岡宜雄)、(3)将来計画: 地球化学書の出版企画について(石渡良志)。

2日目の昼から大講堂のロビーを使ってポスター講演(61件)が行なわれた。場所も良かったこともあって大盛況であった。もっと広い場所が必要であったこと、また時間ももっと欲しいと感じた。学会総会はいつものながら出席者は少なかったが、学会賞の受賞講演時には出席者も多くなった。奨励賞: 地球化学的数値実験によるマグマの形成・移動メカニズムの研究(岩森光氏)、エンスタタイトコンドライトおよびユレイライトに関する年代学的研究(木多紀子氏)の講演が行われた。熱のこもった講演でこれからの研究の展開が期待される内容であった。引き続き、柴田賞: 鉛のパラドックス? : 鈍の歯ざしり(立本光信氏)の講演が行われた。氏の過去40年の足跡を詳しくお聞きするには時間は短かすぎたが、研究に取り組む姿勢の一端に触れさせて頂くことができ、大変感銘を受けたご講演であった。夜の懇親会は大学生協食堂で行った。参加者は約250名。特にアトラクションは用意せず、会員同士の交流に時間をあてさせていただいた。

今回は講演および参加申し込みの方法をE-mailでも出来るようにした。この点は好評であったが、締め切り間近に申し込みが殺到して回線がパンク状態になって、申し込み用紙の請求をしても返事がないなど、結果として皆さんに大変迷惑をかけてしまった(地球化学ニュース No. 150号参照)。最大のトラブルとして1件だけではあるが、申し込みが受け付けられていなかったというものがあつた。結果としてなんとか解決できたが、これらの経験は次回開催の九州大学の年会準備委員会にお伝えした。以上、1997年会には多数の方々の参加を頂き無事終了した。会員の方々

のご協力に心から感謝する次第である。また、年会のスムーズな進行のために多数の学生諸君の協力を受けた。感謝致します。

年会に先立って、9/13日(土)午後1時半～5時、公開シンポジウム「生命の起源と惑星探査」(日本地球化学会主催：科学技術館サイエンスホール、千代田区北の丸公園2-1)をお世話した。公開シンポジウムは、地球上の生命の起源や進化、環境変動の将来への関心、昨今の火星探査に対する関心の高まりを背景として、今後のわが国が計画している宇宙探査計画等への社会的支援に少しでも役立てばと企画した。講演会は、秋山雅彦、杉浦直治両先生の司会で、(1)地球上で生命はいつ誕生したか(熊澤峰夫先生)、(2)火星に生命体?地球外有機物を探る(下山晃先生)、(3)21世紀の惑星探査と展望(水谷仁先生)の、いずれもホットでおもしろく分かりやすい話しがなされた。出席者は100～120名でその半分以上は中学生、高校生と若い人で、大変熱気が感じられたシンポジウムであった。入場の際にアンケート用紙を配り、感想を求めたところ、大半の人が「非常におもしろかった・良かった」、「新聞の記事で読んだものよりかなり詳しく説明されていて面白かった」という感想で、評判は非常に良かった。またこれらの話題への一般の人の関心の高さを知ることが出来た。今後ともこのような企画を学会として積極的に立てる必要性あると感じた。

1998年度日本水文科学会学術大会及び 総会のお知らせ

大会期日：1998年6月20日(土)～21日(日)

大会会場：三重大学講堂三翠ホール

〒514-8507 三重県津市上浜町1515

大会日程：6月20日(土) 10:00～19:00

一般発表、総会、懇談会

6月21日(日) 10:00～16:00

一般発表、WG研究発表

大会費用：参加費 1,000円(大学院・学部学生500円)

予稿集代 2,000円

懇親会費 5,000円

(大学院・学部学生3,000円)

問い合わせ先：

〒305-8571 茨城県つくば天王台1-1-1

筑波大学地球科学系

日本水文科学会事務局 嶋田 純

Tel/Fax: 0298-53-2568

E-mail: jahs@erc2.suiri.tsukuba.ac.jp

http://wwwsoc.nacsis.ac.jp/jahs/index.html

第20回宇宙ステーション利用計画 ワークショップ開催のお知らせ

表記ワークショップの案内が参りましたのでお知らせいたします。

主催者：科学技術庁、宇宙開発事業団

開催日：1998年6月30日～7月1日

開催場所：砂防会館 シェーンバッハ・砂防

(東京都千代田区平川町2-7-5)

内容：宇宙開発事業団に設置された宇宙環境利用研究委員会(委員長：菅野卓雄)、宇宙環境利用研究システム(システム長：井口洋夫)が中心となって開催し、JEM利用の具体的内容についてJEM等ユーザー及びJEM利用に関心を持つ研究者と意見交換を行う。

参加費：無料

問い合わせ先：財宇宙環境利用推進センター

調査研究部 担当：大橋永嗣

〒169-0051 東京都新宿区西早稲田3-30-16

Tel: 03-5273-2442, Fax: 03-5273-0705

ニュースへ記事やご意見をお寄せください

今後とも従来と同様、皆様の情報・原稿をお待ちしています。地球化学に関連した研究集会、シンポジウムの案内、人材募集、書評、研究機関の紹介など何でも結構です。編集の都合上、電子メール、フロッピー(マックもしくはDos/Vいずれでも結構です)での原稿を歓迎いたしますので、ご協力の程よろしくお願いいたします。次号の発行は1998年8月下旬頃を予定しています。ニュース原稿は7月中旬までにお送りいただくよう、お願いいたします。また、ホームページに関するご意見もお寄せください。

(編集担当 高橋和也)

編集担当者

高橋和也

〒351-0198 埼玉県和光市広沢2-1

理化学研究所 核化学研究室

Tel: 048-467-9420

Fax: 048-462-4662

e-mail: kazuyat@postman.riken.go.jp

米田成一

〒169-0073 新宿区百人町3-23-1

国立科学博物館 理工学研究部

海底堆積物中の長鎖アルケノン、アルケノイトによる海洋環境変動の復元

Paleoceanographic variability revealed from long-chain alkenones and alkenoates in coastal and pelagic sediments

(提出先：名古屋大学大学院理学研究科，1997年)

沢田 健 (Ken Sawada)

所属：筑波大学化学系

過去数万年スケールの海洋表層水温の変動を復元することは、地球の環境・気候システムを解明する上で重要な課題である。そのために、近年、海底堆積物に普遍的にみられるハプト藻に由来する長鎖アルケノン、アルケノイトを用いた方法が提案され、有力な水温指標として確立しつつある。しかし、このハプト藻が記録する水温は、その藻のアルケノン、アルケノイトを合成するタイミングや生息する水深のような生産性や生態学的要素によって多様になる可能性がある。また、海洋表層から下方輸送されて堆積まで、また堆積後に変質する可能性がある。したがって、堆積物などからより精度の高い水温解析をするためには、海洋におけるそれら化合物の生産性の時空間的な変化や輸送、分解過程をも把握する必要がある。

本研究は、アルケノン、アルケノイトを合成するハプト藻である *Emiliania huxleyi* (南太平洋産) と *Gephyrocapsa oceanica* (日本近海産) の培養試料を用いて、アルケノン不飽和指数 (U_{37}^{kw}) と温度 (T) の関係式を調べ、それが2つの培養株の間で有意に異なることをみとめた。しかし、*E. huxleyi* と *G. oceanica* 各々の U_{37}^{kw} - T 関係式は、過去に報告されている各々の同一海域から分株されたハプト藻培養株のそれとほぼ一致した。このことから、同一海域に生息するハプト藻の間では、 U_{37}^{kw} - T 関係式の多様性は小さいと推察した。

次に、日本近海の海洋表層から亜表層の懸濁粒子試料から U_{37}^{kw} - T 関係式を求めた。その関係式が、おもに東部北太平洋の懸濁粒子やその海域産の *E. huxleyi* から得られた U_{37}^{kw} - T 関係式や日本近海産 *G. oceanica* のものとよく一致することがわかった。この結果と培養実験の結果から、日本近海に生息するハプト藻類に関しては、単一の U_{37}^{kw} - T 関係式： $U_{37}^{kw} = 0.0327T - 0.0012$ 、を適用することが出来るかと推論した。

また、日本海溝のセディメントトラップによって採集された深層における沈降粒子試料の分析から、海洋表層におけるアルケノン、アルケノイト生産は、春季ブルームの時期を含む季節に最大であることが明らかになった。また、 U_{37}^{kw} から見積もられた水温の季節変動パターンは、観測された表面

水温のそれと調和的であった。さらに、アルケノン、アルケノイトの海洋表層から深層への輸送および堆積物への埋積過程における量的・質的变化を検討すると、それらの化合物のフラックス (F : mg/m²/年) は水深 (z : km) に対して著しく減少する。次のような関係式が得られた。 $\ln F = -0.144z + 0.663$ 。しかし、 U_{37}^{kw} やアルケノイト/アルケノン比はほとんど変化しないことがわかった。この結果からアルケノン・アルケノイト指標は水カラム内や底層における分解作用に影響されないことが確認された。

最後に、培養実験や海洋表層の粒子試料から得られた知見に基づいて、中部日本沖西七島海嶺域の黒潮流軸を交差する方向に得られた3本の堆積物コアに対して U_{37}^{kw} 温度計を適用し、最終氷期から現在までの過去約3万年間の数千年スケールの水温変動を復元した。その結果、中部日本沖は最終氷期以前において現在の水温よりも低く、完新世には徐々に上昇したことが明らかになった。最終氷期における水温低下の要因について、親潮由来の冷水塊の南下といった地域的な現象ではなく、日射量の低下から引き起こされた全球規模のグローバルな冷却に起因するものと推論した。また、 U_{37}^{kw} から見積もった中部日本沖の南北方向の水温勾配から、蛇行、直進といった黒潮流軸の年代変化を復元した。その結果、過去3万年間に中部日本沖において黒潮流軸が南北方向に著しく振動していたことが示唆された。また、その変動パターンと東部北太平洋低〜高緯度域の古気候・古海洋データから復元された貿易風や亜熱帯高気圧の年代変動とよく対比され、中部日本沖の黒潮流軸の変動は、北太平洋の亜熱帯循環の変動と密接に連動していると推論した。これは、アルケノン温度計からグローバルな海洋表層の風成循環を復元するという新しいアプローチの可能性を示唆するものである。

*1 アルケノン不飽和指数 (U_{37}^{kw}) ;

$$U_{37}^{kw} = [37:2]/([37:2] + [37:3])$$

[37: x] : 炭素数37の2重結合を x 個をもつアルケノンの濃度。

日本地球化学会ニュース

No. 154

1998. 8. 25

主な記事

● 学会記事

□ 1998年度日本地球化学会年会の最終案内及びプログラム

□ 評議員会、各委員会、研連議事録

● その他の研究助成、学会、シンポジウム等の各種情報のお知らせ

□ 猿橋賞、沖縄賞、シンポジウム、講演会、人事公募など

● 会員担当幹事より、昨年度、名簿作成時に行われたアンケート結果について

● 編集後記

● 1999年地球惑星科学関連学会合同大会案内 (連絡会ニュース)

現在、日本地球化学会のホームページを学術情報センターのホームページ内の Academic Society Home Village で公開しております。URL アドレスは、<http://www.soc.nacsis.ac.jp/gsj2/index.html> です (Yahoo! JAPAN にも登録しております)。

ご覧の上、ご意見、ご要望をお寄せください。みなさまのご協力で、より魅力的でアップデートなものにしていきたいと思っています。

博士論文抄録を募集します。

詳細は Vol. 31-4, p. 245 (1997) をご覧下さい。

1998 年度日本地球化学会年会

主催：日本地球化学会（共催 日本化学会）

日時：10月9日（金）～11日（日）

会場：九州大学文系キャンパス講義棟（福岡市東区箱崎 6-19-1）

発表：

一般講演（質疑応答を含む発表時間：15分）

ポスターセッション：コアタイム 10日（土）13:00～14:00

ポスターセッションは一般講演と同じフロアー（2階）および一階上（3階）のフロアーの部屋で行います。ポスターは学会初日午後より掲示していただき、学会終了日の午前中に撤去していただきます。なお、10月10日（中）の午後1時より2時までポスター発表のコアタイムとしますので、活発なご討論をお願いいたします。ポスターパネルの大きさは幅90cm×高さ180cmです。掲示のためのピンはポスター会場でお受け取りください。

課題講演（質疑応答を含む発表時間：原則20分）

課題1 市民社会にかかわる地球化学（11日午前・午後 K 会場）

課題2 化学進化とバイオマーカーからみた原始地球環境（10日午前 A 会場）

課題3 大陸と日本列島の環境地球化学的相互作用（11日午後 K 会場）

課題4 大陸周辺地域での地殻物質の循環（10日午前 K 会場）

課題5 新世紀に向けての地球外物質の研究と地球外資源探査（9日午後 K 会場）

夜間セッション：

夜間小集会：「地球化学会内外の諸問題をめぐって」

日時：10月9日（金）18時00分～20時00分（予定：理学部地球惑星科学教室 4A 講義室、会場の位置の詳細は当日掲示します）

話題：

1) 研究機関における地球化学研究体制の現状と将来

2) 学会編集による地球化学書の出版企画について

将来計画委員会では、上記の話題について情報交換、意見交換を行う場として夜間小集會を企画しました。皆さん、ふるってご参加ください。

連絡先：将来計画委員会 松久幸敬（e-mail: mats@gsj.go.jp）

総会：10月10日（土）14時00分から K 会場で開催

学会賞受賞式並びに受賞講演：10月10日（土）15時30分から K 会場で開催

懇親会：10月10日（土）18時30分（ニュース No153 の予告から 30分遅くなりました）から九州大学工学部食堂で開催

予約：5,000円、学生：3,000円、予約外：6,000円

公開講演会：「地球とわたしたち—21世紀のために今の地球を考えよう」

文部省科研費補助金「研究成果公開促進費」の援助を受けて、中高大学生及び一般市民を対象として公開講演会を開催します。

日時：10月18日（日）午後2時より

場所：アクロス福岡国際会議場（福岡市中央区天神 1-1-1）

講師及び演題

永淵 修（福岡県保健環境研究所）「福岡から中国の酸性雨が見える」

長山 淳也（九州大学医療短期大学部）「胎児・乳幼児にしのびよる環境汚染」

北野 康（名古屋大学名誉教授）「地球環境とわたしたち—自然のすばらしさ、やさしさ—」

連絡先：九州大学理学部化学教室 吉村和久

Tel: 092-726-4743, e-mail: kazz@rc.kyushu-u.ac.jp

講演申込締切：講演申込は終了いたしました。

参加申込締切：9月10日（木）17:00

予約参加登録、懇親会、要旨集の申込は、ニュース No153 に添付の申込用紙またはそのコピーをご利用ください。また、年会のホームページ（<http://qdeps.geo.kyushu-u.ac.jp/GSJ98/>）および電子メール（gcs98@geo.kyushu-u.ac.jp）でも受付けております。電子メールで申込を希望される方は、subject を sanko として上記宛先に申込書式を要求してください。返信された書式に従って記入し、subject を sanko-moushikomi とし、上記宛名に再度送信してください。

参加費：予約正会員 1,000円、学生会員 無料、非会員 2,000円、予約外 2,000円

要旨集：予約 4,000円（送料込）、予約外 5,000円

送金：参加費、要旨集代、懇親会費は9月10日（木）までに郵便振替でご送金ください。

郵便振替：01760-1-22010

1998 年日本地球化学会年会準備委員会

宿泊および団体便の予約

東武トラベル（株）がお世話します。ニュース No153 に添付の資料を参照の上、添付の申込書またはそのコピーを用いて9月1日までに申し込み下さい。詳しくは下記まで直接おたずね下さい。

〒812-0035 福岡市博多区中呉服町 2-1

東武トラベル株式会社福岡支店

Tel: 092-271-2332, Fax: 092-642-2684

年会申込・連絡先

〒812-8581 福岡市東区箱崎 6-10-1

九州大学理学部地球惑星科学科

1998年度日本地球化学会年会準備委員会

村江達士

Tel: 092-642-2660, Fax: 092-642-2684

e-mail: murae@geo.kyushu-u.ac.jp

または高岡宣雄

Tel: 092-642-2668, Fax: 092-642-2684

e-mail: takaoka@geo.kyushu-u.ac.jp

年会 E-mail: gcs98@geo.kyushu-u.ac.jp

年会ホームページ: <http://qdeps.geo.kyushu-u.ac.jp/GSJ98/>

講演等時間割

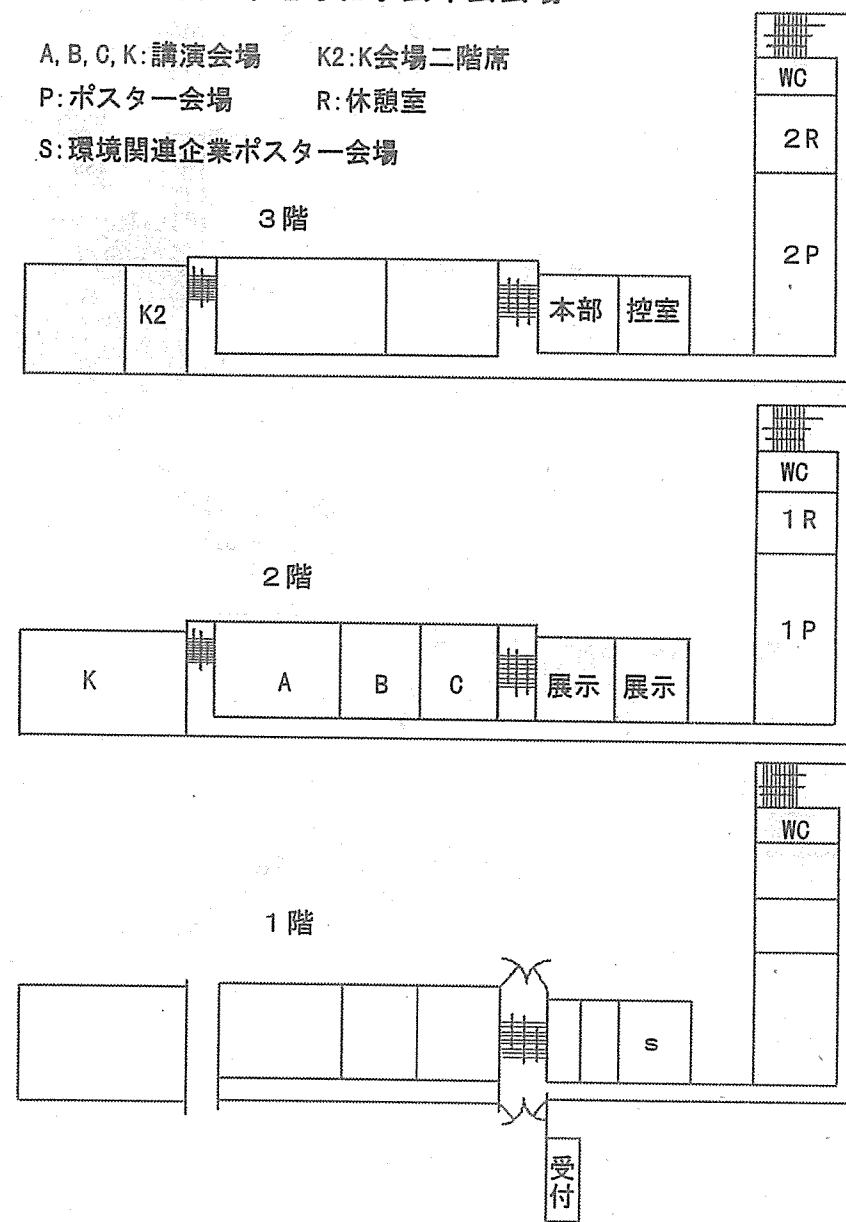
日付	会場	午前	午後	夜
9日 (金)	K	受付	課題5: 地球外	夜間集会 (理学部地球惑星科学教室 4A講義室)
	A	地球外物質		
	B	海洋		
	C	大気・降水 堆積物		
10日 (土)	K	課題4: 地殻物質	ポスター コアタイム (1P, 2P)	懇親会 (工学部食堂)
	A	課題2: 化学進化	総会 (K)	
	B	温泉・環境・生物	受賞講演 (K)	
	C	鉱床・熱水		
11日 (日)	K	課題1: 市民社会	課題3: 大陸と日本列島	
	A	有機物		
	B	陸水		
	C	岩石	岩石・火山	

1998年度日本地球化学会年会会場

A, B, C, K: 講演会場 K2: K会場二階席

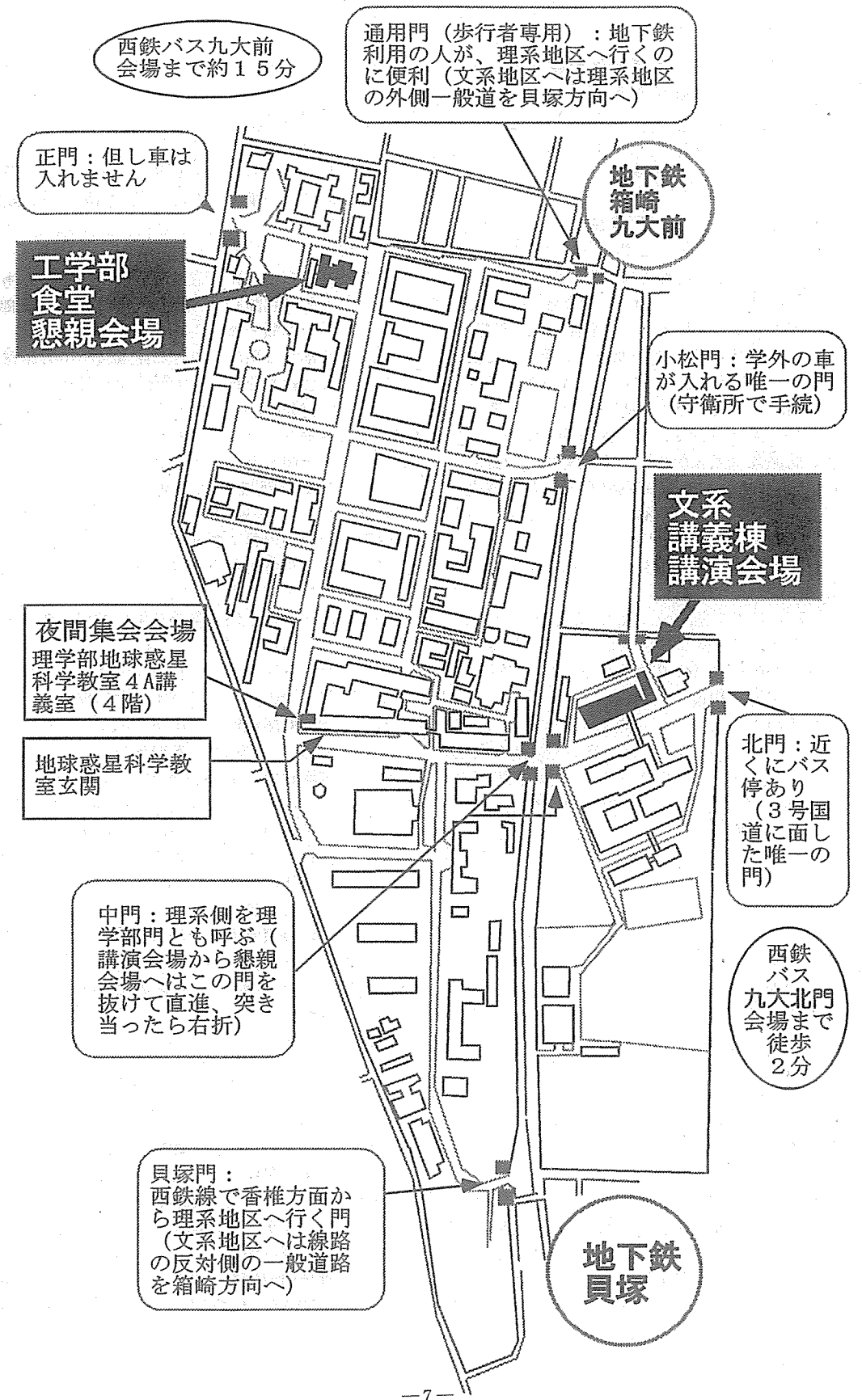
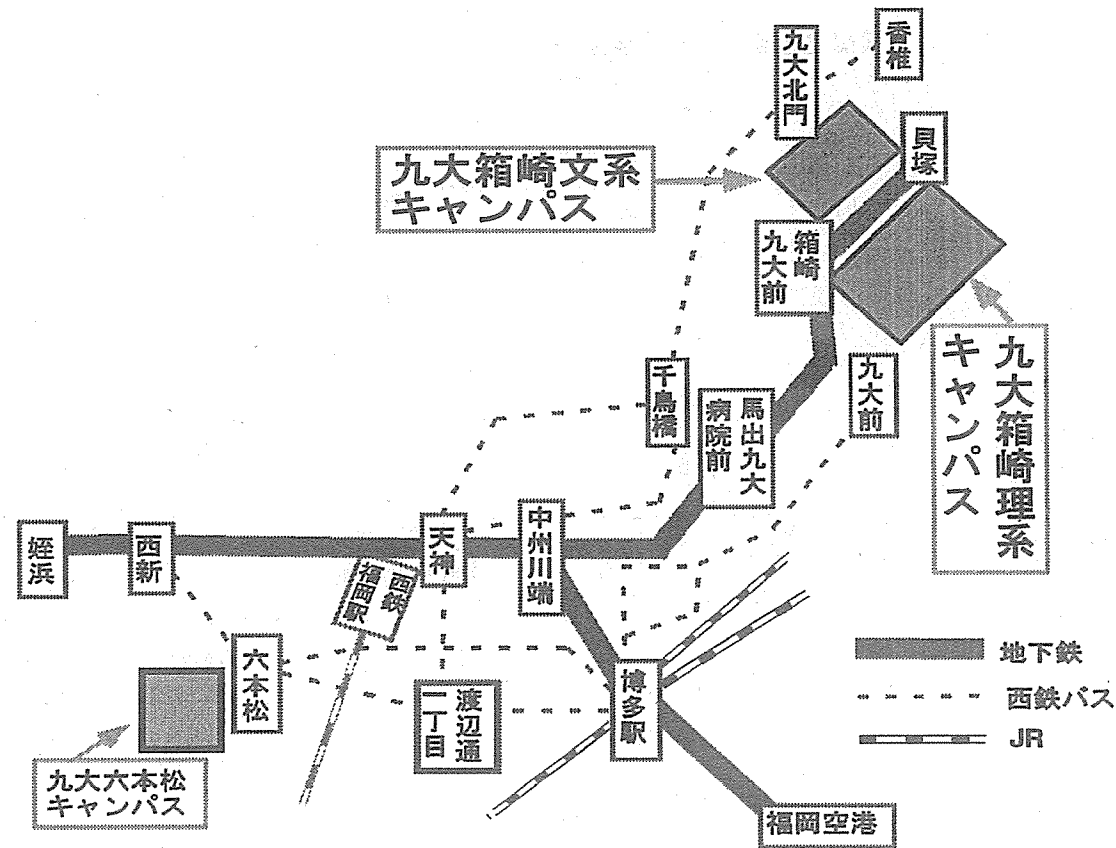
P: ポスター会場 R: 休憩室

S: 環境関連企業ポスター会場



会場へのアクセス

福岡空港から地下鉄約30分（乗換・徒歩所要時間を含む：中州川端乗換）
博多駅から地下鉄約25分（乗換・徒歩所要時間を含む：中州川端乗換）



1998年度日本地球化学会年会
プログラム

第1日(10月9日)

A会場

一般講演[海洋]

(9:30-10:30) 座長: 野尻幸広

- 9A01 海水中に溶存した CCl_3F , CCl_2F_2 及び
 SF_6 の分析(北大地球環境) 笹原歩
9A02 長期連続観測を目指した海水中のアンモニ
アマイクロフロー - 蛍光検出法の開発
(¹滋賀県立大環境・²海洋化学研) ○丸尾雅
啓¹・小畑 元¹・中山英一郎¹・紀本岳志²
9A03 REE(III)炭酸錯体生成定数から見た深海底
マンガノジュールと海水間の見かけの分
配係数(名大院理) ○太田充恒・川邊岩夫
9A04 炭酸カルシウムの結晶核生成と結晶成長へ
の希土類元素の影響(¹東京農工大院・²農工
大農・³東大院理・⁴宇都宮大農) ○津野宏¹・
赤木 右²・鍵 裕之³・深見元弘⁴・土器屋
由紀子²

(10:45-12:00) 座長: 川端穂高

- 9A05 REE(III)炭酸錯体生成定数に見られる水和
3価REEイオンの構造変化と四組効果(名
大院理) 川邊岩夫
9A06 北西太平洋海洋定観測(ステーション
KNOT)の開始(¹国立環境・²科学技術振
興事・³北大地球環境・⁴名大大気水圏) ○野
尻幸広¹・鶴島修夫²・今井圭理²・渡辺修一³・
才野敏郎⁴
9A07 ボックスモデルを用いた中央太平洋赤道域
における新生産量の推定(¹静岡大院理工・
²PEML, NOAA・³住化分析セ) ○滝 雅人¹・
鈴木 款¹・Timothy S. Bates²・伊藤 博³
9A08 原研むつ・AMSによる¹⁴C測定(原研むつ)
○荒巻能史・水島俊彦・山本忠利
9A09 太平洋・インド洋上大気中の化学形別トリ
チウム分布(¹九大理・²九大工) ○柿内秀
樹¹・百島則幸¹・前田米蔵¹・岡井富雄²

(13:00-14:00) 座長: 中山英一郎

- 9A10 亜寒帯海域(石狩湾沖)における生物生産
と重金属除去(北大地球環境) 乗木新一
郎・○松原望美・吉江直樹・申キョン勲
9A11 日本海溝の沈降粒子における元素の存在形
態と鉛直輸送(¹名大大気水圏研・²筑波大化
学・³北大低温研・⁴愛知県立大) ○小杉剛
史¹・増沢敏行¹・沢田 健²・中塚 武³・
半田暢彦⁴

- 9A12 東京湾湾口部の沈降粒子中の希土類元素
(北大地球環境) 乗木新一郎・○工藤純
子・海老原真弓

- 9A13 シャツキーライズにおける生物ポンプとそ
れに伴う物質の鉛直輸送の過去18万年間
の変遷(東北大院理) ○前田玲奈・川端穂
高

(14:00-14:45) 座長: 野崎義行

- 9A14 日本海(大和海域)沈降粒子中の陸源物質
とその起源(北大地球環境) 乗木新一郎・
○早坂順一郎

- 9A15 北部北太平洋における懸濁粒子中の脂質成
分の鉛直分布(北大低温研) ○加治 貴・
河村公隆・大河内直彦

- 9A16 沖縄トラフ中・深層水のアルミニウムの分
布と海水流動(¹静大理・²西海水研) ○皆川
昌幸¹・阿部和雄²・渡辺康憲²

(14:45-15:30) 座長: 乗木新一郎

- 9A17 海水中の希土類元素: 粒子との分配, シェ
ール規格化とCe異常(東大海洋研) ○野崎
義行・アリボ ディア・ソット

- 9A18 珊瑚の希土類元素存在度の解釈(農工大
農) 赤木 右

- 9A19 北太平洋及びベーリング海における微量金
属元素の分布(滋賀県立大環境) ○小畑
元・丸尾雅啓・中山英一郎

(15:45-16:45) 座長: 豊田和弘

- 9A20 定常状態にある炭素循環へのUpwelling-
diffusion modelの適用(名大大気水圏)
○陳 中笑・小牧香織・加藤喜久雄

- 9A21 白保サンゴ礁の炭素循環への陸源物質の寄
与(¹地調・²東北大院) ○川端穂高¹・斉藤
出²・鈴木淳¹

- 9A22 海洋表層水中溶存無機炭素の $\delta^{13}\text{C}$ の変化
と大気-海洋間 CO_2 交換過程について(名
大大気水圏研) ○小牧香織・陳 中笑・加藤
喜久雄

- 9A23 Isotopic study on sea ice formation and
transport in Okhotsk Sea(¹北大地球
環境・²北大低温・³IARC) ○N. Tanaka¹・
T. Kawamura²・J. Ukita³・M. Seimiya³

(16:45-18:00) 座長: 鈴木 款

- 9A24 中央太平洋・深海底堆積物コア(KH68-
4-15)中の生物源有機酸塩相のネオジムとス
トロンチウムの同位体比(北大地球環
境) 豊田和弘

- 9A25 沖縄南西諸島のサンゴのホウ素同位体組成
(¹東京工大原子炉・²上智大理工・³防衛大

地球・⁴岡山大教育) ○野村雅夫¹・大井隆
夫²・丹下 良²・細江守一³・菅 浩伸⁴

- 9A26 大気中のホウ素同位体比 - 大気-海洋間の
ホウ素同位体分別効果(東大海洋研) ○時
枝隆之・宮田佳樹・天川裕史・野崎義行

- 9A27 石垣島浦底湾産のハマサンゴ骨格の高解像
度Mg/Sr比・酸素同位体比と水温変化
(¹東北大院・²地調) ○斉藤 出¹・鈴木 淳²・
川端穂高²

- 9A28 サンゴのホウ素同位体(琉球大理) 大出 茂

B会場

一般講演[大気・降水]

(9:30-10:30) 座長: 河村公隆

- 9B01 海洋大気中のホウ素同位体比(東大海洋
研) ○宮田佳樹・時枝隆之・天川裕史・野
崎義行

- 9B02 北半球中・高緯度の対流圏-成層圏の硫化
カルボニル(COS)の濃度(¹名太陽地球環
境研・²宮城教育大・³国立極地研) ○猪股
弥生¹・松永捷司¹・菅原 敏²・森本真司³・
長田和雄¹・岩坂泰信¹・渡部征春¹・塩原匡
貴³

- 9B03 北部北太平洋における大気-海水間の揮発
性硫黄化合物濃度の関係(北大地球環
境) ○荒波一史・渡部修一・角皆静男

- 9B04 北西太平洋における洋上大気中非メタン炭
化水素の炭素安定同位体比分布(¹東工大
総合理工・²東大海洋研) ○角皆 潤¹・吉田
尚弘¹・蒲生俊敬²

(10:45-12:00) 座長: 角皆 潤

- 9B05 北部太平洋エアロゾル中に存在する低分子
ジカルボン酸類の分布と季節変化(¹北大低
温研・²都立大理・³国立環境研) ○今西克
也¹・河村公隆¹・島野富士雄²・野尻幸広³

- 9B06 北部北太平洋およびベーリング海における
非メタン炭化水素の分布(北大低温研)
○斉藤拓也・河村公隆・中塚 武

- 9B07 1997年インドネシア森林火災に伴う大気
中の低分子ジカルボン酸の挙動(¹北大低温
研・²千葉大環境リモートセンシング・³東
大気候システムセンター) ○成川正広¹・河
村公隆¹・竹内延夫²・中島映至³

- 9B08 1997年のインドネシア森林火災における
微量気体の放出について(¹気象研・
²CSIRO) ○松枝秀和¹・井上久幸¹・澤廣介
¹・堤之智¹・牧野行雄¹・Jorgen Jensen²

- 9B09 森林火災が熱帯泥炭林土壌からの二酸化炭
素放出に及ぼす影響(北大地球環境)

○佐藤文彦・田中教幸

(13:00-14:00) 座長: 遠嶋康徳

- 9B10 島根および東京における大気中の多環芳香
族炭化水素(PAHs)-安定炭素同位体比を
用いた大気中PAHsの起源推定の可能性-
(電中研) ○田中伸幸・坂田昌弘

- 9B11 都市二次林における大気中の二酸化炭素の
炭素同位体組成の変化(¹名大院理・²名大
大気水圏研・³名大年代測定センター・⁴東
工大総合理工) ○高橋 浩¹・高橋厚裕²・
木平英一²・南 雅代³・檜山哲也²・中村俊
夫³・吉田尚弘⁴

- 9B12 衛星データによる植生生産活動の変動に伴
う大気 CO_2 の濃度と $\delta^{13}\text{C}$ の変動(名大大気
水圏研) ○加藤喜久雄・陳 天奇・小牧香
織・福田邦彦

- 9B13 積雪下土壌中の二酸化炭素と亜酸化窒素の
生成速度の見積もりとその変動要因(北大
地球環境) ○金 龍元・田中教幸

(14:00-14:45) 座長: 田中伸幸

- 9B14 SF_6 の連続モニタリング(北大地球環境)
○日名子佳代・田中教幸

- 9B15 質量分析計による大気試料中の一酸化二窒
素のアイソトポマー計測法の検討(¹科技振
興事業団・²東工大総合理工・³サーモ
クエスト(株)) ○豊田 栄¹・吉田尚弘²・
大堀基己³

- 9B16 ガスクロマトグラフ法による大気中酸素/
窒素比の変動の測定(国環研) 遠嶋康徳

(15:00-15:45) 座長: 田中教幸

- 9B17 大気・降水水中の無機態・有機態リンの動態
(¹静岡大理・²科技振興事業団・³水圏科学
コンサルタント・⁴国環研) ○鈴木 款¹・
江頭 毅²・ベアトリス カサレント³・野
尻幸広⁴

- 9B18 多摩丘陵小流域における臭素の地球化学的
循環(¹化学品検査協会・²農工大農) ○栗
原 勇¹・小倉紀雄²

- 9B19 降水連続採取による大気中化学成分の除去
機構(静岡大院理工) ○中村昭彦・鈴木 款

(15:45-16:30) 座長: 加藤喜久雄

- 9B20 山形県におけるエアロゾルの起源に関する
Sr同位体を用いた研究(¹山形大理・²理研)
○田中真理子¹・柳澤文孝¹・矢吹貞代²

- 9B21 ウシュコフスキー氷河の水素・酸素同位体
の変遷(¹北大地球環境・²北大低温研)
○藤川哲弥¹・田中教幸¹・白岩孝行²

- 9B22 洞窟内大気中²²²Rn濃度の変動パターン解

析 (1 琉球大理・2 琉球大機器分析センター)
○伊波秀敏¹・棚原 朗²・平良初男¹

C 会場

一般講演 [堆積物]

(9:30-10:30) 座長: 高田秀重

9C01 美濃帯チャートと三宝山チャートの Rb-Sr
及び Sm-Nd 同位体系: 供給源・堆積物・
堆積環境の比較 (1 熊本大理・2 理研・3 科博)
○國丸貴紀^{1,2}・清水 洋¹・高橋和也²・矢
吹貞代²・米田成一³

9C02 希土類元素存在度と Sr 同位体比からみた愛
媛県・黒瀬川鉱山の炭酸塩岩の形成過程 (名
大院理) ○三浦典子・川邊岩夫

9C03 雨水中の風成塵の Sr 同位体組成 (九大理)
○浜本礼子・柳 哮

9C04 宮城県歌津地域、ペルム紀登米統の磷酸塩
岩中に含まれる黄鉄鉱の形状と硫黄同位体
比 (信州大理) ○松永綱子・森 清寿郎

(10:45-12:00) 座長: 清水 洋

9C05 Pb-210, Cs-137 を用いた東京湾における
堆積過程の推定 (1 農工大農・2 東海大海洋)
○真田幸尚¹・熊田英峰¹・高田秀重¹・佐藤
太¹・山本 愛²・加藤義久²

9C06 XAFS 法による多摩川河口域堆積物の状態
分析 (東大院総合) ○久野章仁・松尾基之・
高野穆一郎

9C07 底生有孔虫殻の Cd/Ca 比に基づいた西太
平洋の深層水循環 (1 東大海洋研・2 電力中
研) ○木本克典¹・児玉幸雄¹・下島公紀²・
平朝彦¹

9C08 古環境復元 proxy としての中層に棲息する
浮遊性有孔虫 (北大地球環境) ○伊藤雅史・
乗木新一郎

9C09 古生代炭酸塩岩中のヒ素含量 (群馬大工)
相沢省一

(13:00-14:00) 座長: 山本修一

9C10 炭素・窒素同位体から推定する日本海・東
シナ海における過去 3 万年間の窒素循環の
変遷 (北大地球環境) ○南川雅男・大場忠
道

9C11 東シナ海縁辺部における過去 15000 年の環
境変遷について (1 名大大気水圏研・2 地調・
3 海洋科学技術セ) ○小栗一将¹・松本英二
¹・斎藤文紀²・本多牧生³・原田尚美³・日
下部正志³

9C12 南大洋における海洋堆積物の脂質成分の空
間及び深度分布 (北大低温研) ○竹本紀之・
河村公隆・池原実・大河内直彦・中塚武

9C13 中央太平洋および南大洋堆積物中に含まれ
る多環芳香族炭化水素 (1 北大低温研・2 地
調) ○大河内直彦¹・河村公隆¹・池原実¹・
川幡穂高²

(14:00-14:45) 座長: 松本英二

9C14 カリフォルニア沖堆積物中の過去 4 万年に
おけるアルケノン・表面海水温度の変動 (都
立大院理) ○関 宰・松本公平・石渡良志・
ODPLeg167 乗船者

9C15 カリフォルニア堆積物 (ODP Leg167, Site
1017) 中の陸起源有機物: 熱化学分解メチ
ル化法による解析-2 (1 都立大院理・2 創価
大教育) ○吉川博康¹・山本修一²・松本公
平¹・関 宰¹・石渡良志¹・ODPLeg167 乗
船者

9C16 バイカル湖湖底堆積物コア試料 (BDP-
96-2) の多元素プロファイリング分析によ
る古環境変動解析 (名大院工) ○山中克仁・
衛 蓉・定免 慶・伊藤嘉記・千葉光一・
原口紘き

(15:00-16:00) 座長: 南川雅男

9C17 中国レスと深海堆積物の石英の堆積量と粒
度の変動 (1 名大大気水圏研・2 地調) ○岡
本孝則¹・松本英二¹・川幡穂高²

9C18 湖沼表層堆積物のクロリンとフィートの
鉛直分布 (都立大院理) ○内田邦子・石渡
良志

9C19 湖沼堆積物中の PAHs の分子レベル炭素同
位体比の特徴とその解釈 (都立大院理)
○奥田知明・石渡良志

9C20 沿岸海洋堆積物における脂質組成と $\delta^{13}\text{C}$ 値
の分布について (長崎大教育) 近藤 寛

(16:00-17:00) 座長: 近藤 寛

9C21 選択的硫黄結合分解法による堆積高分子有
機物中の解放性バイオマーカーの解析
(1 都立大院理・2 地調) ○吉井広太¹・有信哲
哉²・石渡良志¹

9C22 北太平洋とベリング海における間隙水の化
学成分とアミノ酸の地球化学について (東
大海洋研) 石塚明男

9C23 培養実験による海水中の有機物分解過程の
考察 (その 2) (静岡大院理工) 大西由香

9C24 電子スピン共鳴 (ESR) による風成塵起源の
解明の基礎 (1 岡山理大理・2 兵庫教育大・
3 北大地球環境) 豊田新¹・成瀬敏郎²・豊田
和弘³

K 会場

一般講演 [地球外物質]

(9:30-10:45) 座長: 中村智樹

9K01 炭素質隕石中のシクロアルカンの検出とそ
の特徴 (筑波大化) ○藪田ひかる・下山 晃

9K02 アセチレンを使用した PAHs の生成と火星
隕石について (筑波大化) ○国分秀樹・三
田肇・下山 晃

9K03 エンスタタイトコンドライトの捕獲成分希
ガス (1 九大理・2 東大理地殻) ○岡崎隆司¹・
高岡宣雄¹・中村智樹¹・長尾敬介²

9K04 Q の分離の試み (1 阪大院理・2 ワシントン
大) ○松田准一¹・丸岡照幸¹・甘利幸子²

9K05 衝撃変成作用による放射起源鉛の斜長石へ
の取り込み (1 神戸大理・2 神戸大院自然科
学・3 無機材研) ○三澤啓司¹・山崎文枝²・
関根利守³・中村 昇¹

(10:45-12:15) 座長: 三澤啓司

9K06 メリライト中の希土類元素の拡散 (1 学習院
大理・2 東大 RI センター) ○鈴木崇史¹・森
岡正名¹・長沢 宏²

9K07 南極産隕石にみられる正のセリウム異常と
吸着水との関係 (1 東大院地殻化学・2 理研)
鍵 裕之¹・○高橋和也²

9K08 炭素質コンドライト中の希土類元素存在度
の微細な分別 (1 核融合研・2 都立大院理)
○篠塚一典¹・海老原 充²

9K09 南極産 Rumuruti-group コンドライトの微
量元素パターンについて (神戸大院自然科
学) ○澤田 忍・中村 昇

9K10 Sm・Gd 同位体組成からみた月表土の中性
子捕獲効果 (1 広大理・2 都立大院理・3 科博)
○日高 洋¹・海老原 充²・米田成一³

9K11 隕鉄中のモリブデン同位体比変動と核合成
との関連 (電通大) 増田彰正・其 魯

(13:00-13:45) 座長: 日高 洋

9K12 コンドライトの消滅核種 ^{26}Al : FeO に富む
コンドライトからの新しい証拠 (1 地調・
2 東大院理) ○木多紀子¹・永原裕子²・富
樫茂子¹・森下祐一¹

9K13 シンクロトロン放射光を用いた蛍光 X 線分
析法による宇宙塵の微量元素分析 (1 九大
理・2 高エネ研放射光) ○野崎 航¹・中村智
樹¹・飯田厚夫²・高岡宣雄¹

9K14 火星表面土壌の生成過程シミュレーション
と鉄資源としての可能性 (大阪府立工専)
伊藤和男

課題講演 [新世紀に向けての地球外物質の研究

と地球外資源探査]

(日本鉱物学会・日本岩石鉱物鉱床学会・資源地質
学会との共通セッション)

コンピーナー: 高岡宣雄・坂本尚義・土山 明・
古宇田亮一

(14:00-14:50)

9K15 Cosmic dust recovery from the space,
stratosphere, and South Pole regions
(1 九大理・2 NASA/JSC・3 極地研隕石セ)
○中村智樹¹・M. E. Zolensky²・今榮直也³

9K16 MUSES-C 計画 (宇宙研) 藤原 顕

9K17 SELENE 計画 (NASDA) 春山純一・ISAS
/NASDA SELENE 共同プロジェクトチ
ーム

(14:50-17:10)

9K18 リモートセンシングによる物質探査-資源
的・素材の見地から- (地調) 古宇田亮一

9K19 岩石の鉱物組成と鉱物の化学組成のリモ
ートセンシング (ブラウン大) 廣井孝弘

9K20 X線回折法による極微小試料の精密分析
(九大理) 中牟田義博

9K21 放射光をプローブとする X 線分析 (東京理
大) 中井 泉

9K22 放射化分析 (都立大院理) 海老原 充

9K23 地球外有機物・微生物を直接見る (三菱生
命研) 河崎行繁

9K24 地球外微量有機物試料の取り扱いおよび分
析法 (地調) 古宮正利

(17:25-18:00)

パネルディスカッション 司会: 土山 明・坂本尚義
関連分野からのサンプル計画への期待 (各 8 分)
野外地球科学へのフィードバック: 大河内直彦 (北
大低温研) ; 鳥海光弘 (東大院理)
実験地球物質科学へのフィードバック: 大谷栄治
(東北大院理) ; 永原裕子 (東大院理)

第 2 日 (10 月 10 日)

A 会場

課題講演 2 「化学進化とバイオマーカーから
みた原始地球環境」

コンピーナー: 下山 晃・村江達士

(9:00-12:00)

10A01 ベンゼン-水系への紫外線照射によるカ
ルボン酸の生成と彗星中のカルボン酸に
ついての考察 (筑波大化) ○森田泰央・三
田 肇・下山 晃

10A02 アセトアルデヒド-水系への紫外線照射に
よるカルボン酸の生成と彗星中のカルボン

- 酸についての考察(筑波大化)○寺田晋紀・三田 肇・下山 晃
- 10A03 原始地球上での生体有機物生成のエナジエティックス(1横国大工・2NTTシステムエレクトロニクス研・3NTT基礎研・4東大宇宙線研)○小林憲正¹・増田仁美¹・潮 賢太郎¹・金子竹男¹・高橋淳一²・細川照夫²・内海裕一³・斎藤 威⁴
- 10A04 生命の初期進化と熱水環境:好熱性古細菌から何がわかるか(東大生命科学)山岸明彦
- 10A05 バイオマーカーの起源となる古細菌膜脂質とアミノ酸代謝の関連についての基礎的実験並びに脂質成分の多様性(1九大理・2東大工大理)○山内敬明¹・森田幹雄²・江口正²・柿沼勝己²・村江達士¹
- 10A06 新生代における珪藻ステロイド化合物の進化(1北大院理・2筑波大地球科学・3北大地球環境)○鈴木德行¹・川田洋平¹・久田健一郎²・長谷川四郎³・小笠原憲四郎²
- 総合討論
- B 会場
- 一般講演[生物・環境・温泉]
(9:00-10:30) 座長:砂原香織
- 10B01 アフリカゾウ象牙における炭素・窒素同位体比及び微量元素含量(1九大比文・2京大原子炉)○石橋浩¹・小池裕子¹・武内孝之²
- 10B02 シロアリからのメタン放出と酸化(1京大生態学研究セ・2Kasastart Univ.)○杉本敦子¹・井上徹志¹・Nit Kirtibutr²・安部琢也¹
- 10B03 酸性降下物による土壌劣化の度合を示す有機パラメーターの研究(1東海大海洋・2広島大総合)○水野健一郎¹・西村弥重¹・佐久川弘²
- 10B04 円石藻コッコリス中への微量元素の取り込み(1京大化研・2金沢大工)○長谷川 浩¹・三戸彩絵子¹・鈴木みつ子¹・宗林由樹²・松井正和¹
- 10B05 植物プランクトンの鉄キレート錯体の取り込み挙動(京大化研)○東 洋平・長谷川 浩・鈴木みつ子・内藤佳奈子・大橋慈子・松井正和
- 10B06 植物シデロホアの探索と微量金属種の影響-琵琶湖植物プランクトンについて-(京大化研)○内藤佳奈子・鈴木みつ子・大橋慈子・長谷川 浩・松井正和

- (10:45-11:15) 座長:砂原香織
- 10B07 海藻中希土類元素の分別-希土類元素及びケイ素の二つの起源の可能性(1農工大・2理研・3宇都宮大農)○付 鳳富¹・赤木 右¹・矢吹貞代²・岩木正哉²・深見元弘³・小倉紀雄¹
- 10B08 飼育実験におけるマイマイと餌間における元素の挙動:植物、土壌、マイマイ系と比較(東大院総合)○八十島光子・高野穆一郎
- (11:15-12:00) 座長:高野穆一郎
- 10B09 1997年5月秋田県澄川地すべり・水蒸気爆発に関連して行った温泉調査(地調)○高橋正明・塚本 斉・伊藤順一・安原正也・川邊禎久・遠藤秀典
- 10B10 中部地方北部の温泉ガスの組成とHe 同位体比(1富山大理・2東大理・3岡山固体大研)○大和田道子¹・長尾敬介²・日下部実³・佐竹 洋¹
- 10B11 長島温泉地震地球化学観測点の設置とその観測結果(1名大理・2名大人間情報)○伊藤貴盛¹・川崎啓介¹・川邊岩夫¹・山本鋼志¹・足立 守¹・永峰康一郎²
- C 会場
- 一般講演[鉱床・熱水]
(9:00-10:30) 座長:千葉 仁
- 10C01 水酸化アルミニウムによる金(III)イオンの共沈殿とその還元(1九大理・2九大工)松門洋子¹・○横山拓史¹・内田明子²・本村慶信¹・渡辺公一郎²・井澤英二²
- 10C02 高温熱水系での沸騰に伴う金属の挙動(東北大院理)林 謙一郎
- 10C03 ルーマニアのカルパチア山地に産するペグマタイト中の流体包有物のガス分析について(1名城大・2アルイクザ大)○ドラグシャヌ クリスチアン¹・杉崎 隆一¹・ムラリウ チツス²
- 10C04 秋田焼山周辺の火山性地熱水の化学組成・同位体組成の経年変化(1秋田大工学資源・2秋田衛研)○根本匠¹・松葉谷 治¹・川原谷 浩¹・武藤倫子²
- 10C05 熱水性石英に含まれる水の存在状態と水素同位体比の再検討(1地調・2金属事業団)○松久幸敬¹・Kevin Faure¹・目次英哉²
- 10C06 Os, Nd, Sr および Pb 同位体組成による黒鉱の研究(1神戸大発達科学・2メリーランド大)○寺門靖高¹・R. J. Walker²

- (10:45-11:45) 座長:松葉谷 治
- 10C07 SIMSを用いた鉱床構成鉱物の酸素・硫黄同位体比局所分析(地調)○森下祐一・佐々木 昭・木多紀子・富樫茂子
- 10C08 鹿児島地溝帯から湧出する、メタンに富んだガス流体の起源(1岩手大農・2九大理・3富山大理・4東大理・5名大理)○溝田智俊¹・山中寿朗²・佐竹 洋³・石橋純一郎⁴・中村俊夫⁵
- 10C09 鹿児島湾海底カルデラ内における火山および熱水活動に伴った石油の生成(1九大理・2東大院理・3富山大理・4岩手大農・5上智大理・6海洋科技セ)○山中寿朗¹・石橋純一郎²・佐竹 洋³・溝田智俊⁴・木川田喜一⁵・橋本 博⁶
- 10C10 凝灰質岩表面に発生した二酸化マンガンは微生物が作った:国指定史跡「フゴッペ洞窟」(余市町)(1地調・2東文研)○三田直樹¹・朽津信明²
- K 会場
- 課題講演[大陸周辺地域での地殻物質の循環]
コンピーナー:中井俊一・浅原良浩
(9:00-10:20)
- 10K01 第四紀後期における日本海堆積物中の大陸および島弧起源碎屑物寄与率とその変動要因(1北大院理・2東大院理)○入野智久¹・多田隆治²
- 10K02 北太平洋堆積物のSr同位体比の地域分布と時代変化(1名大院理・2地調)○浅原良浩¹・田中 剛¹・西村 昭²
- 10K03 中国各地の砂漠堆積物と黄土の堆積学的・鉱物学的・地球化学的特徴(熊大理)○本多将俊・清水 洋
- 10K04 高級カルボン酸組成に基づいた堆積岩の堆積環境(名大院理)村山正樹・○山本鋼志・三村耕一
- (10:35-12:15)
- 10K05 長江における希土類元素濃度とその東シナ海への寄与(1富山大理・2放医研・3中国科学院地化)○張 勁¹・山田正俊²・劉 叢強³
- 10K06 東部インド洋及びその近隣海域より採取した表面海水のNd同位体比(東大海洋研)○天川裕史・野崎義行
- 10K07 Chromitite formation and ophiolite paragenesis: constraints from Re-Os isotope systematics(1Graduate School of Arts and Sci., Univ. Tokyo・2Ocean Res.

- Inst., Univ. Tokyo) R. A. Santos¹・K. Suzuki¹・B. Takano¹・Y. Miyata²・Y. Nozaki²
- 10K08 含水条件下での玄武岩の溶融実験:大陸地殻の成長に関する意味(東大地殻化)鄭 貞仁
- 10K09 沈み込む堆積物の循環:部分融解 vs. 脱水分解(京大理)巽 好幸
- P 会場
- ポスターセッション
(13:00-14:00)
- 1P01 富山県弥陀ヶ原におけるメタンのフラックス(富山大理)○寺山晃子・清棲保弘
- 1P02 街路樹における葉の炭素同位体比と大気環境の動態解析(富山大理)○木戸口三津・清棲保弘
- 1P03 富山県・縄ヶ池湿地におけるCO₂フラックス(富山大理)○奥野 一・清棲保弘
- 1P04 太平洋-インド洋におけるBe-7,10、Pb-210の大気中の分布(1日大文理・2九大理)○多田 亘¹・小林貴之¹・永井尚生¹・百島則幸²
- 1P05 海洋エアロゾル中に存在するハロゲン化コハク酸の同定(北大低温研)○河村公隆・今西克也・成川正広・大河内直彦
- 1P06 沖縄本島におけるエアロゾル中の化学成分-その3-(1琉球大理・2琉球大機器分析セ・3琉球大学海洋)○主税昭典¹・棚原 朗²・平良初男³
- 1P07 シベリア低地上空の大気中メタンの¹⁴C同位体比解析(1名大院工・2国立環境研)○森泉 純¹・高橋善幸²・シャミル マクシュートフ²・ミハイル ソローキン²・米田 積²・柴田康行²・森田昌敏²・井上 元²
- 1P08 モリブデンナイトの変質実験:顕微赤外スペクトル、マイクロフォーカスX線回折パターンの変化の特徴(1東大院総合・2東大院地殻・3東京医歯大教養・4東大海洋研)○鈴木勝彦¹・鍵 裕之²・奈良雅之³・高野穆一郎¹・野崎義行⁴
- 1P09 愛知県豊田市北部の地球化学図:元素組成と鉱物組成(名大院理)○平原靖大・田中剛・川邊岩夫・山本鋼志・浅原良浩・劉 永忠・伊藤貴盛・三浦典子・太田充恒・高橋浩・谷水雅治・仙田量子・高柳幸央・高木真理・大西郁子・加地拓哉・倉田有里子・高間智宏・田中万也・満田章子

- 1P10 天然石英・長石からの放射線誘起ルミネッセンス (1新潟大院自然科学・2新潟大理) ○片山肇¹・坂上央存¹・橋本哲夫²
- 1P11 熱ルミネッセンス (TL) 現象を利用したテフラの同定法の検討 (1新潟大院自然科学・2新潟大理) ○安田賢哉¹・橋本哲夫²
- 1P12 天然鉱物からの天然蓄熱ルミネッセンスに影響を与える捕捉電子寿命の観測 (1新潟大院自然科学・2新潟大理) ○藤田博喜¹・須貝紀之¹・橋本哲夫²
- 1P13 放射線誘起ルミネッセンスからの地球化学的情報の利用 (1新潟大理・2新潟大院自然科学) ○橋本哲夫¹・杉山直弥²・西山笑子²
- 1P14 強硫酸酸性鉱山排水中の硫酸イオンと母岩硫黄の間に見られる硫黄同位体分別 (岩手大農) ○村野宏達・溝田智俊
- 1P15 古第三紀対州層群泥質岩の炭素同位体組成 (1九大理・2岡大固地セ) ○池見洋明¹・島田允亮¹・千葉 仁²
- 1P16 付加体中の石灰岩のPb-Pb年代 (1京大院理・2京大院人環・3京産大・4高知大理) ○可児智美¹・巽 好幸¹・石坂恭一²・能田成³・石塚英男⁴
- 1P17 東濃ウラン鉱床における風化花崗岩の希土類元素パターン (1熊本大理・2理研・3核燃料開発事業団) ○佐藤奈々¹・清水 洋²・國丸貴紀¹・吉田英一¹
- 1P18 水月湖の淡水-汽水環境変化にともなう堆積有機化合物の炭素同位体比記録の変動 (1都立大院理・2神奈川県衛生研) ○山田桂大¹・上村 仁²・石渡良志¹
- 1P19 日本海隠岐堆積物 (過去2万5千年前) 中の脂肪酸の炭素同位体比変動 (都立大院理) ○駒津美都紀・奈良岡浩・石渡良志
- 1P20 東シベリア乾燥タイガ林における土壌有機物の分解過程 (1名大院理・2名大大気水圏研・3京大院農・4京大生態学セ) ○山田智康¹・木平英一²・檜山哲哉²・福富義宏²・田中広樹³・杉本敦子⁴
- 1P21 油ガス田地帯と非油ガス田地帯の空気中の軽質炭化水素の比較 (地調) 猪狩俊一郎
- 1P22 別府・雲仙地域から採取したSulfolobus属古細菌とその抽出性脂質成分の性質 (九大理) ○北島富美雄・村江達士
- 1P23 河川から運ばれる懸濁態有機物の $\delta^{13}\text{C}$ と $\delta^{15}\text{N}$ の推定 (北大院地球環境) ○南川雅男・平山篤志
- 1P24 自動分画装置によるPAHsの精製と分子レベル炭素同位体比測定への応用 (都立大院理) ○奥田知明・奈良岡浩・石渡良志
- 1P25 カリフォルニア沖堆積物の過去4万年におけるステロールの変動: ODP Leg167 Hole1017Eの解析-III (都立大院理) ○松本公平・関 幸・石渡良志・ODPLeg167乗船研究者一同
- 1P26 刺針法による樹木年輪内の炭素同位体比の変化 (1名大院理・2鳴門教育大・3名大年測セ・4静岡大理) ○高橋 浩¹・米延仁志²・中村俊夫³・和田秀樹⁴
- 1P27 琵琶湖南岸のヒノキ年輪の炭素同位体比変動と気象要素との相関分析=第2報=(1名工大院・2名大院理・3名大年測セ) ○岩崎誠一郎¹・庄 建治朗¹・高橋 浩²・中村俊夫³
- 1P28 XAD-2樹脂を用いた骨化石試料の正確な¹⁴C年代および炭素・窒素同位体比測定 (名大年測セ) ○南 雅代・中村俊夫
- 1P29 植物中の希土類元素パターンの変化 (1農工大農・2理研・3宇都宮大農) ○付 鳳富¹・赤木 右¹・矢吹貞代²・岩木正哉²・深見元弘³・小倉紀雄¹
- 1P30 水素平衡法による極域雪氷試料の水素同位体比測定 (1富山大理・2極地研) ○佐竹洋¹・飯塚芳徳²
- 1P31 採石場の湧水からみた地質と地下水質との関係 -八溝山地周辺の例-(地調) ○関 陽児・金井 豊・上岡 晃・月村勝宏・浜崎聡・金沢康夫・中嶋輝允
- 1P32 岩石の溶出と河川水の化学組成の関係 (1琉球大理工・2琉球大理海洋) ○伊敷 牧¹・渡久山章²
- 1P33 深部花崗岩の鉱物組成と地下水の地球化学的性質 (核燃料開発事業団) ○岩月輝希・濱 克宏
- 1P34 地表物質中の水質とその変化 (2) (地調) 金井 豊・上岡 晃・金沢康夫・関 陽児・濱崎聡志・中嶋輝允・月村勝宏
- 1P35 沖縄本島北部地下水中における天然放射性核種について (琉球大理¹・琉球大機器分析セ²) ○狩俣栄作¹・棚原 朗²・平良初男¹
- 2P36 温泉から生成した鉄質沈殿物に関する研究: ヒシングライトとの比較 (1東工大総理工・2東大院総合・3九大理) ○宮崎あかね¹・松尾基之²・横山拓史³
- 2P37 アルミナおよびシリカゲルへのテトラクロロ金 (III) イオンの吸着挙動 (1九大工・2九大理) ○内田明子¹・横山拓史²・本村慶信²・渡辺公一郎¹・井澤英二¹
- 2P38 北太平洋及びベーリング海の植物プランクトン試料の主構成成分組成及び主微量元素組成 (名大大気水圏研) ○関 佳代子・増沢敏行
- 2P39 北太平洋海域における第一系列遷移元素の分布と特徴 (1京大化研・2金沢大工) ○香山晴彦¹・長谷川 浩¹・徳留慎子¹・則末和宏¹・宗林由樹²・松井正和¹
- 2P40 アルケノンによる北部日本海の水温変遷の復元 (地調) ○古宮正利・池原 研・寺島 滋
- 2P41 赤土流入による環境水の化学組成変化と生物への影響 (1琉球大理工・2琉球大理海洋) ○与那城麻里子¹・渡久山 章²
- 2P42 サンゴ飼育水槽における大気-海水間のCO₂フラックス (琉球大理) ○真栄平司・大森 保・藤村弘行
- 2P43 サルガソー海におけるランタニド・テトラド効果の深度プロファイルの顕著な特徴 (電通大) ○増田彰正・下田淳二
- 2P44 三陸沖海水中の粒子の化学的特徴 (東海大海洋) ○本田卓也・佐藤義夫・豊田恵聖・金森 悟
- 2P45 Variation of iron species in the subaquatic section of Erhai Lake Southwestern China (東大院総合) 鄭 国東
- 2P46 メタンハイドレート生成にともなう水の酸素・酸素同位体組成分別 (地調) ○前川竜男・今井 登
- 2P47 花崗岩風化土壌中の微量元素の挙動 (地調) ○上岡 晃・月村勝宏・金井 豊・金沢康夫・関 陽児・濱崎聡志・中嶋輝允
- 2P48 バイカル湖湖底堆積物コア(BDP96/2)の無機成分から推定したユーラシア大陸過去100万年の環境変動 (1東邦大理・2大妻女子大学社情・3東邦大医・4国立環境研) ○高松信樹¹・児玉 恵¹・松本源喜²・加藤尚之³・今橋正征¹・河合崇欣⁴
- 2P49 浜名湖堆積物中の元素の分布 (静岡県立大) ○谷 幸則・吉永正行・原川 洋・相馬光之
- 2P50 バイカル湖から採取した柱状堆積物試料中の気体の同位体比 (1防災科学技術研・2イルクーツク地球化学研) 吉田則夫¹・Gennadyi Kalmychikov²・Wladimir Geletyi²
- 2P51 山形市周辺地域の地球化学図 (II) (地調) ○今井 登・岡井貴司・遠藤秀典・田口雄作・石井武政・上岡 晃
- 2P52 地質調査所岩石標準試料「機器分析シリーズ」1998年値の編集 (地調) ○今井 登・寺島 滋・伊藤司郎・安藤 厚
- 2P53 美濃帯三疊紀層状チャートに記録された堆積環境変動について (1名大情報文化・2名大院理) ○杉谷健一郎¹・三村耕一²
- 2P54 東シナ海、揚子江沖における底質コアの堆積速度測定 (1地調・2中国国家海洋局) ○金井 豊¹・片山 肇¹・西村 昭¹・斎藤文紀¹・周 懷陽²・陳 建芳²
- 2P55 マンガン堆積物の化学組成と成長速度 (日大文理) ○小林貴之・永井尚生
- 2P56 浜名湖湖水と堆積物中の光合成色素 (静岡県大) ○伊藤信靖・谷幸則・相馬光之
- 2P57 ODP Site 808の堆積物コア中の火山ガラスの続成変質過程 (大阪市立大院理) ○中川聖子・益田晴恵・奥平敬元
- 2P58 形態別抽出法による湖底堆積物中の¹³⁷Csおよび²³⁸Uの結合状態 (環境技研) ○植田真司・長谷川英尚・川端一史・近藤邦男
- 2P59 北海道恵山・アトサヌプリ火山の噴気ガスについて (富山大理) ○清棲保弘・平井咲弥香
- 2P60 北陸地方の新第三紀-第四紀火山岩類のK-Ar年代 (地調) ○内海 茂・宇都浩三・鹿野和彦
- 2P61 蒸気井ガス流量の連続測定 (東大院理) ○森 俊哉・高嶺朋三・下池洋一・野津憲治
- 2P62 年輪中の金属分布を用いる環境分析の手法 (九大理) ○梅崎俊幸・百島則幸・前田米蔵・仁田純一
- 2P63 韓国の都市小河川における水質および負荷量特性 (韓国慶熙大) ○呉鍾敏・金学元・Hong Suk Kim・Jae Young Park・Dong Yub Shin
- 2P64 韓国の中小都市部でのnon-point汚染源負荷特性 (韓国慶熙大) ○呉 鍾敏・Jae Young Park・Sung Hyuk Ro・Jung A Lee・Sae Chul Youn
- 2P65 中国各地における大気中の鉛同位体比 (1国立環境研・2中国科学院) 向井人史¹・田中 敦¹・曾 毅強²
- 2P66 国立環境研究所 環境標準物質 -海底質、河川底質- (1国立環境研・2韓国麗水大・

³物質工学工業技術研) 吉永 淳¹・○田中 敦¹・高松武次郎¹・仲間純子¹・趙 顯書²・岡本研作³

- 2P67 速度論的現象としての疑似イオン集積効果 (AIMAI 効果) (農工大農) 赤木 右
- 2P68 逐次溶解/誘導結合プラズマ発光分析法による地質標準試料中ホウ素の分別定量 (地調) ○岡井貴司・寺島 滋・谷口政碩
- 2P69 地震地球化学観測データの自動処理システム (名大理) 伊藤貴盛
- 2P70 軸方向測光-半導体光検出器型 ICP-AES による炭酸塩岩石標準試料中主・微量成分の定量 (地調) ○岡井貴司・今井 登
- 2P71 LA-ICP-MS を用いた局所分析 (サンゴへの応用) (横河アナリティカルシステムズ・²地調・³東北大院) ○遠藤政彦¹・野原昌人²・齋藤 出³
- 2P72 名古屋大学タンデム加速器質量分析計による木曾ヒノキ年輪試料の¹⁴C年代測定 (名大年測セ・²鳴門教育大学・³四日市大学) ○小田寛貴¹・米延仁志²・池田晃子¹・中村俊夫¹・古川路明³

K 会場

(14:00-16:00)

総会

(16:00-18:00)

1998 年度日本地球化学会学会賞等受賞講演

第3日 (10月11日)

A 会場

一般講演 [有機物]

(9:00-10:30) 座長: 松本源喜

- 11A01 先カンブリア時代堆積岩中のマレイミド類の存在について (筑波大化・²名大院理) ○小園正樹¹・三田 肇¹・高野雅夫²・下山 晃¹
- 11A02 白亜紀-第三紀境界層での地球外起源有機化合物の探索 (筑波大化) ○三田 肇・下山 晃
- 11A03 始新世堆積物中の高等植物起源バイオマーカーとその個別炭素同位体比 (北大院理) ○亀井良哉・鈴木徳行
- 11A04 北海道始新世石炭中の長鎖アンテイスアルカンとその個別炭素同位体比 (北大院理) ○雨森郷太郎・鈴木徳行
- 11A05 新庄新第三系堆積岩中に存在するフラン類の分布とその特徴 (筑波大化) ○渡邊武俊・三田 肇・下山 晃

11A06 新庄新第三系堆積岩中のカダレンと多環芳香族炭化水素について (筑波大化) ○萩原正義・下山 晃

(10:45-12:00) 座長: 北島富美雄

- 11A07 新庄盆地と北部フォッサマグナ地域の第三系堆積岩中の脂質成分の比較-堆積有機物の獲得抵抗性と内因的抵抗性の検討 (筑波大化) ○沢田 健・下山 晃
- 11A08 ルテニウム酸化法によるケロジェン構造の解明 (都立大院理) ○吉岡秀佳・石渡良志
- 11A09 熱分析法による新庄新第三系堆積岩中のケロジェンの起源と続成変化の研究 (筑波大化) ○大庭雅寛・下山 晃
- 11A10 バイカル湖の湖底堆積物コア (BDP96/1) の有機成分による過去500万年の地球環境変動の解析 (大妻女子大社情・²農工大農・³東理大理・⁴東邦大理・⁵国環研) ○松本源喜¹・小作さゆり²・清野まゆ¹・山村和世¹・西みゆき²・吉野由美²・日向ルミ子¹・高松信樹⁴・竹村哲雄³・河合崇欣⁵・赤木 右²・安部喜也²
- 11A11 中国太湖湖底の6500年以前の堆積物の地球化学的特徴-主として炭化水素を指標として (日大生物資源・²日大文理) ○片瀬隆雄¹・津田和英²・田場 穰²・遠藤邦彦²・金 倫碩¹・水谷 広¹
- (13:00-14:00) 座長: 坂田 将
- 11A12 氷期-間氷期変動に伴うバイカル湖堆積物中n-アルカンの炭素同位体比の変動 (都立大院理・²神奈川県衛生研) ○デイビットプリンカット¹・山田桂大¹・石渡良志¹・上村 仁²・奈良岡浩¹
- 11A13 堆積物コアの窒素同位体比を用いた内湾の富栄養化過程の解析 (北大低温研・²都立大院理) ○中塚 武¹・石渡良志²・河村公隆¹
- 11A14 粘土存在下の加熱実験における尿素-ジカルボン酸からのポリマー生成とその化学進化的考察 (筑波大化) ○寺崎正紀・三田 肇・下山 晃
- 11A15 原始タンパク質様構造体としてのマリグラヌール生成過程におけるアミノ酸光学分割の可能性の検討 (九大理) ○井上陽介・村江達士
- (14:00-14:45) 座長: 山内敬明
- 11A16 亜硝酸細菌の脂質の分子組成と炭素同位体比: バイオマーカー記録解釈との関連 (地調・²ウッズホール研) ○坂田 将¹・ジョ

ン ヘイズ²

- 11A17 石狩湾沖における粒子態脂肪酸の動態 (北大地球環境・²筑波大生物) ○申キョン勲¹・乗木新一郎¹・濱 健夫²・吉江直樹¹・松原望美¹・角皆静男¹
- 11A18 バンコク湾 (タイ) における陸源有機物の分布 (名大気水圏研) ○大田啓一・渡辺陽巳
- (15:00-16:00) 座長: 三田 肇
- 11A19 低分子有機酸のガスクロマトグラフ燃焼安定同位体比質量分析計における分子レベル炭素同位体比測定 (都立大院理・²地調) ○奈良岡 浩¹・佐藤 龍¹・石渡良志¹・古宮正利²
- 11A20 石油鉱液中のモノカルボン酸の分子分布とその分子レベル安定炭素同位体比 (都立大院理・²石油資源開発) ○佐藤 龍¹・奈良岡 浩¹・石渡良志¹・鈴木 優²
- 11A21 溶存有機物の三次元励起・蛍光光度測定・蛍光強度の標準化と測定例について (名大気水圏研) 吉岡崇仁
- 11A22 マルチトレーサー法を利用した19種の金属イオンに対するフミン酸錯体の安定度の決定 (広島大理・²武蔵大人文・³理研) ○高橋嘉夫¹・葉袋佳孝²・安部静子³・榎本秀一³・安部文敏³

B 会場

一般講演 [陸水]

(9:00-9:45) 座長: 佐竹 洋

- 11B01 土壌水分の蒸発に伴う酸素・水素安定同位体分別 (秋田大工学資源) ○川原谷 浩・松葉谷 治・二木茂樹
- 11B02 水の安定同位体を用いた火山灰土層流域の水循環 (北大地球環境・²北大演習林) ○佐藤千佳¹・田中夕美子²・田中教幸¹
- 11B03 桜島火山周辺部の地下水の化学組成変化 (鹿児島大理) ○高木哲朗・坂本隼雄・富安卓滋・米原範伸
- (9:45-10:30) 座長: 川原谷 浩
- 11B04 地下水から見る茂住断層周辺の水の動き (富山大理) ○佐竹 洋・村田正信
- 11B05 カルスト地域における地下水の溶存無機炭素の炭素同位体比 (九大理・²九電産業) ○中尾彩弥子¹・吉村和久¹・能登征美²
- 11B06 湖沼における酸素酸アニオンの分布と動態 (京大総合人間・²京大院人間環境) ○張田裕之助¹・木邑奈美¹・杉山雅人¹・堀俊孝²

(10:45-12:00) 座長: 杉山雅人

- 11B07 琵琶湖水中溶存微量元素の分布におよぼす河川水の影響 (京大化研・²滋賀大教育) ○三戸彩絵子¹・長谷川 浩¹・松井正和¹・川島宗雄²
- 11B08 中部日本の湿原のメタンの同位体比と成因 (富山大理) ○作田修平・清棲保弘
- 11B09 本邦酸性湖堆積物にみられる anteiso 化合物群の起源について (信州大理・²北大理・³筑波大化・⁴秋田県環境技術センター) ○福島和夫¹・香山正幸²・三木誠道³・依田新¹・片野 登⁴
- 11B10 濃縮安定同位体を用いた陸水中高分子有機金属錯体のスペシエーション (名大難処理研・²名大院工) ○伊藤彰秀¹・岩田浩介²・原口紘き²
- 11B11 表面錯形成反応による土壌溶液中の亜鉛濃度の解釈 (弘前大理) ○吉田嘉江・鶴見 実
- (13:00-14:00) 座長: 坂本隼雄
- 11B12 沢水中の塩化物イオンと硝酸イオン濃度を予測する (弘前大理) ○鶴見 実・伊藤美和子・戸塚裕司
- 11B13 酸性降下物量の指標としてのトゥファ中の硫酸塩 (2) (九大理) ○藤野剛聡・吉村和久
- 11B14 ロシア、バイカル湖の湖水中溶存炭酸のC-14濃度測定と湖水循環 (名大年代測定資料研究セ・²国環研・³愛知医科大核医学研究セ) ○中村俊夫¹・小田寛貴¹・太田友子¹・河合崇欣²・小島貞男³
- 11B15 バイカル湖の生体系構造および近過去環境変動の安定同位体比による解析 (京大生態学研究セ・²ロシア科学アカデミー陸水学研・³ロシア科学アカデミーバイカル博物館・⁴北大院地球環境) ○小川奈々子¹・吉井浩一¹・和田英太郎¹・Smirnova-Zalumi, Natalia S.²・Smirnov, Vasily V.³・Melnik, Natalia G.²・Timoshin, Oleg A.²・南川雅男⁴

C 会場

一般講演 [岩石・火山]

(9:00-10:30) 座長: 鈴木勝彦

- 11C01 ザイールキュービックダイヤモンド中の水の存在状態 (東大院理・²農工大農・³東京医歯大教養) ○鯉 裕之¹・赤木 右¹・喜安明子²・奈良雅之³
- 11C02 天然キュービックダイヤモンドの炭素の同位体組成と包有物の炭酸塩/水比との相関

- (¹農工大農・²東大院理・³東京医歯大教養)
○喜安明子¹・奈良雅之³・鍵 裕之²・赤木
右¹
- 11C03 三郡変成岩に含まれる碎屑性ジルコンの
U-Pb 年代 (九大理) ○宮本知治・柳 哮
- 11C04 誘導結合プラズマ質量分析法による土壌及
び海底土中の U,Th 及び Pu 定量法の検討に
ついて (新潟保環研) ○葉薺久尚・加藤健
二・殿内重政
- 11C05 洞窟内堆積物表層の ²¹⁰Pb について—その 2
(¹琉大理・²琉大機器分析) ○津波綾乃¹・
棚原 朗²・平良初男¹
- 11C06 北部九州杷木花崗閃緑岩の黒雲母の粒径と
Rb-Sr 年代, 化学組成 (九大理) ○劉旭東・
柳 哮
(10:45-12:00) 座長: 宮本知治
- 11C07 二疊系小崎層・球磨層・水越層中の花崗岩
質礫の Rb-Sr 同位体系及び REE 存在度 (¹
熊大理・²理研・³科博) ○清水 洋¹・吉村
潤也¹・廣田 勲¹・山下雅司¹・高橋和也²・
米田成一³
- 11C08 アルナイトグループ鉱物のランタノイド元
素 (¹上智大理工・²武蔵工大原研) ○木川
田 喜一¹・宇留賀 恵¹・大井隆夫¹・本田
照幸²
- 11C09 地殻におけるヨウ素の分布と挙動 (その 2)
海底に沈んだヨウ素は何処にいくか? (放
医研) ○村松康行・吉田 聡
- 11C10 カナダ Rottenstone 硫化物鉱床の
Rhenium-Osmium systematics と白金族
元素存在度 (¹東大院総合・²カナダ地調・³
東大海洋研) ○鈴木勝彦¹・Larry
HULBERT²・宮田佳樹³・天川裕史³・野崎
義行³
- 11C11 海洋島玄武岩中の白金族元素含有量: 核一
マントル反応の証拠 (¹京大理・²京大人環)
○巽 好幸¹・下田 玄¹・大栗 究²
(13:00-13:45) 座長: 佐野貴司
- 11C12 SiO₂-Al₂O₃-FeO-MgO-K₂O 系におけるカ
ンラン石—シリケイトメルト間の Fe-Mg
分配実験および熱力学解析 (東工大理) 菅
原 透
- 11C13 北西九州松浦玄武岩類の起源マントルの地
球化学的特徴 (九大理) ○真島英壽・柳 哮
- 11C14 北フィジー海盆三重点における Back Arc
Basin Basalt の地球化学的進化 (¹地調・
²ORSTOM) ○野原昌人¹・J-P.Eissen²
(13:45-14:45) 座長: 野原昌人

- 11C15 雲仙火山岩類の Sr 同位体組成に現れた地殻
の同化作用 (九大理) ○杉本 健・柳 哮
- 11C16 火山岩のストロンチウム同位体組成と下部
地殻の更新 (九大理) ○柳 哮・一色弘充・
中田正夫
- 11C17 岩手火山の火山岩中のホウ素含有量からの
沈み込んだスラブの影響の見積り (¹京大地
熱研・²立正大・³東北大・⁴東大・⁵原研東
海) ○佐野貴司¹・福岡孝昭²・長谷中利昭³・
島岡晶子⁴・米沢伸四郎⁵・松江秀明⁵
- 11C18 玄武岩の斜長石における微量元素の分配の
斜長石組成依存性 (地調) ○富樫茂子・木
多紀子・森下祐一
(15:00-15:45) 座長: 富樫茂子
- 11C19 桜島火山南岳から放出された火山灰の水溶
性成分の化学組成変化と火山活動 (鹿大
理) ○坂元隼雄・藤田俊一・富安卓滋・米
原範伸
- 11C20 火山地帯周辺の環境大気中の水銀含有量と
その分布 (鹿大理) ○吉峯主税・坂元隼雄・
富安卓滋・米原範伸
- 11C21 南部マリアナトラフで発見された島弧と背
弧海盆の新しい火成作用の地球化学的性質
(¹大阪市大) ○益田晴恵¹・KH-98-1, Leg3
乗船研究者

K 会場

- 課題講演 [市民社会にかかわる地球化学]
コンピーナー: 百島則幸・横山拓史
(9:00-10:25) 座長: 百島則幸
- 11K01 地熱エネルギーと環境問題 (西日本技術開
発) 広渡和緒
- 11K02 福岡市のゴミ問題と焼却場の現状 (福岡市
環境局) 山崎敏隆
- 11K03 酸素・水素同位体比より考えられる土壌水
の挙動について (秋田大工資源) ○川原谷
浩・松葉谷 治
- 11K04 スチルベン型蛍光増白剤の水環境における
分布および挙動 (東農工大農) ○林 優子・
高田秀重・小倉紀雄
(10:35-11:55) 座長: 横山拓史
- 11K05 名古屋市における都市大気中メタン濃度の
連続モニタリングと人為的発生源の推定
(名大院工) ○伊藤彰記・高橋真人・高橋
一郎・永田陽子・千葉光一・原口紘き
- 11K06 環境中の硫黄と人間活動—植物中硫黄安
定同位体比に見られる人間活動の影響—(¹
九環協・²九電総研・³九大理) ○川村秀久¹・
松岡信明¹・高島良正¹・田脇紳次²・佐伯國

- 夫²・百島則幸³
- 11K07 森林生態系における放射性セシウムの挙動
とキノコへの蓄積 (放医研) ○吉田 聡・
村松康行
- 11K08 道東地域における環境放射能の調査 (北海
道衛研) ○福田一義・青柳直樹・横山裕之
(13:00-13:40) 座長: 吉田 聡
- 11K09 山上湖 (赤木小沼) 底質柱状試料中の光合
成色素、微量元素の垂直分布と周辺環境変
動 (¹国環研・²福岡保健環境研) ○相馬悠子
¹・高松武次郎¹・田中 敦¹・永淵 修²・佐
竹研一¹
- 11K10 堆積物に記録された人間活動の歴史的変遷
の解説 (¹近畿大理工・²滋賀琵琶湖研・³神
戸環境保健研) ○山崎秀夫¹・合田四郎¹・
横田喜一郎²・三谷明恒³
- 課題講演 [大陸と日本列島の環境地球化学的相
互作用]
コンピーナー: 鶴見実・吉村和久
(13:45-17:30)
- 11K11 アジア大陸からの越境大陸汚染 (国環研)
○村野健太郎・島山史郎
- 11K12 黄砂現象時におけるエアロソル粒子の粒径
と化学組成の時間変化 (¹東大海洋研・²九
大応力研・³長崎大環境科学) ○植松光夫¹・
鶴野伊津志²・荒生公雄³
- 11K13 アジア大陸から北太平洋への sulfate およ
び black carbon 粒子の輸送 (資環研) 兼保
直樹
- 11K14 わが国の降水組成の経年変化 (電中研)
○高橋 章・藤田慎一
- 11K15 富山の降水の安定同位体からみた大陸から
の長距離輸送の状況 (富山大理) ○池田知
哉・佐竹 洋
- 11K16 白神山地と酸性雨 (弘前大理工) 鶴見 実
- 11K17 屋久島と酸性雨 (国環研) 佐竹研一

1998年度第1回日本地球化学会評議員会議事録

日時：1998年2月14日(土) 13:30~17:30

場所：日本化学会館501A 会議室

出席者：石渡良志会長，松久幸敬副会長，脇田宏監事，海老原充，大隅多加志，齋藤和男，清水洋，日下部実，中井俊一，松田准一，佐野有司，高橋和也，長尾敬介，蒲生俊敬，川辺岩夫，中村昇，柳 哮，吉田尚弘，和田英太郎（以上評議員）

1. 1997年度第4回評議員会議事録の承認。
2. 1998年度評議員懇談会メモの確認

1997年9月19日(金)に都立大学91年館多目的ホールで開かれた，1998年評議員懇談会メモについて確認した。

3. 報告事項

- 3.1 庶務・幹事会（海老原評議員）：【庶務一般】1998年度学会事務センターとの契約締結（12/15）【文部省】平成10年度文部省科研費「研究成果公開促進費（学術定期刊行物）」の計画調書提出，平成9年度文部省科研費「研究成果公開促進費（学術定期刊行物）」の実績報告書提出，平成10年度文部省科研費「研究成果公開発表(B)」の計画調書提出，平成9年度文部省科研費「研究成果公開発表(B)」の実績報告書提出（以上，前庶務幹事），平成9年度科研費「研究成果公開発表(B)」の代表者（会長）変更届提出（2/3）【学術会議】会員推薦管理会へ代表者（会長）名変更届提出（2/3）【幹事会】1998年2月7日13:30~17:30に東京大学山手会館203室にて開催。出席者：石渡会長，松久副会長，海老原，篠原，高橋，中井，松田各評議員，赤木「地球化学」編集委員長。第1回評議員会の議事内容について整理。
- 3.2 会計（中井評議員）：1997年度の決算について概略の説明があった。詳細は監査を経た後に，次回評議員会で報告の予定。
- 3.3 編集・出版
- 3.3.1 GJ編集（松久前編集委員長）：Vol.31は年度内に出版終了。総ページ数（本文）412で，予定ページ数を30ページ超過。Vol.32より松田新編集委員長と交代。（松田新編集委員長）：新しい編集体制を発足。Associate editorを23名とし，うち海外から11名を加えた。ニュースとWWWのホームページに編集方針を掲載。ホームページに論文内容を掲載す

る予定。Vol.32, No.1は2月末に発送予定。Vol.32は総ページ数420（各号70）ページの予定。

- 3.3.2 GJ出版（大隅会員）：テラ学術出版との契約書はまだ完成していないが，近日中に完成の予定。基本的には前回評議会に報告，承認された内容となる見込み。
- 3.3.3 地球化学（赤木編集委員長—代理：蒲生評議員）：1997年度発行のVol.31は年度内に出版終了。総ページ245ページ。新年度に入って，編集体制を新しくし，おおむね順調に推移。1998年のVol.32, No.1はGJと一緒に2月末に発送予定。
- 3.3.4 ニュース（高橋評議員）：No.152を「地球化学」Vol.32, No.1と一緒に2月末に発行予定。No.153は5月10日発行予定。No.154は年会関係の記事を掲載して8月末に発行予定。学会のWWWのホームページをできるだけupdateするべく努力している。
- 3.4 行事
- 3.4.1 地惑関連学会合同大会連絡会（篠原評議員—代理：海老原評議員）：1998年合同大会が1998年5月26日~29日代々木国立オリンピック記念青少年総合センターにて開催される。
- 3.4.2 地球環境科学関連学会協議会（1997/12/22）（篠原評議員—代理：海老原評議員）：これから行うべきシンポジウム・講演会について協議した。国立環境研究所の野尻幸宏会員を委員として追加することにした。
- 3.4.3 1998年度日本地球化学会年会および公開講演会（柳評議員）：1998年10月9日(金)~11日(日)の間，九州大学箱崎キャンパスで開催の予定。また，10月18日(日)に「地球とわたしたち—21世紀のために今環境を考えよう」と題して，公開講演会をアクロス福岡国際会議場にて開催の予定。
- 3.4.4 1997年度日本地球化学会年会報告（石渡会長）：1997年9月17日~19日に東京都立大学教養部において開催された。参加登録者460名。講演数290。詳細はニュースに掲載の予定。
- 3.4.5 1997年公開講演会（石渡会長）：1997年9月13日午後1時半より，「生命の起源と惑星探査」と題して，科学技術館サイエンスホールにおいて開催した。参加者約150名。詳細は上記年会報告と一緒にニュースに掲載の予定。
- 3.5 委員会
- 3.5.1 学会賞受賞者選考委員会（清水評議員）：学会

賞（1件），奨励賞（3件），功労賞（1件）の推薦があった。

- 3.5.2 名誉会員推薦委員会（松久副会長）：該当者がいれば次回評議員会に推薦する。
- 3.5.3 鳥居基金委員会（代理：海老原評議員）：半田委員長より，海外派遣助成2件，国内研究集会助成2件の申請があった旨，報告があった。
- 3.5.4 将来計画委員会（松久副会長）：出版準備委員会が正式に発足したので，地球化学書に関してはそちらで具体化を目指すこととし，それ以外の事柄について今後議論をしていくことが報告された。
- 3.5.5 出版準備委員会（松久副会長）：地球化学書の出版計画について資料（「地球化学書出版準備委員会報告」）に基づいて報告が行われた。準備委員会の企画をめぐって意見交換が行われた。
- 3.6 学術会議
- 3.6.1 地球化学・宇宙化学研連（日下部評議員）：第17期第1回委員会（1997/11/13）が開かれた。第17期日本学術会議の発足についての報告があり，研究連絡委員会の見直しについての議論を行った。今回は1998年2月20日。
- 3.6.2 鉱物研連鉱床学専門委員会（代理：柳評議員）：第17期第1回委員会（1997/10/31）が開かれた。第17期の委員長は島崎英彦，幹事は松枝大治。IMAの委員改選（Inclusion in minerals：田口幸洋，Ore minerals：林謙一郎）。第16期鉱物学研連から出された「対外報告」についての検討を行った。今回は1998年2月27日。
- 3.6.3 陸水研連（赤木評議員，代理：海老原評議員）：第17期第1回委員会（1997/11/13）が開かれた。IAHSとの関係を確認。
- 3.7 その他
- 3.7.1 学校科目「地学」関連学会連絡協議会（蒲生評議員）：第12回の会議が1998年1月14日に開かれた。教育課程審議会中間報告についての報告と検討が行われた。また，各学会間の情報交換について話し合われた。
4. 審議事項
- 4.1 1998~1999年度幹事，会長委嘱評議員，委員会委員の承認
- 4.1.1 1998~1999年度幹事：会長提案に基づき，下記のように承認した。
庶務：海老原充，会計：中井俊一，会員：坂本尚義，行事：篠原宏志，ニュース：高橋和也，GJ編

集：松田准一，地球化学編集：赤木右，出版：大隅多加志

- 4.1.2 1998~1999年度会長委嘱評議員：本会役員選出細則第6条3項に定める会長が委嘱する追加評議員として，赤木右，大隅多加志の2会員に委嘱することを承認した。
- 4.1.3 各種委員会委員の承認：会長提案に基づき，委員会委員を下記のように承認した。
 - (1) 将来計画委員会（1998~1999）
委員長：松久幸敬副会長，委員：和田英太郎評議員，中井俊一評議員，坂本尚義評議員，植松光夫会員，高田秀重会員，野津憲治会員
 - (2) 出版準備委員会（1998）
委員長：松久幸敬副会長，委員：石渡良志会長，河村公隆評議員，蒲生俊敬評議員，田中剛会員，野津憲治会員
 - (3) 名誉会員推薦委員会（1998~1999）
委員長：松久幸敬副会長，委員：海老原充評議員，清水洋評議員，日下部実評議員，高岡宣雄会員，半田暢彦会員
- 4.2 平成10年度日産学術助成推薦委員会について：今年度は鳥居基金の委員が兼ねるという石渡会長よりの提案が承認された。
- 4.3 会員の異動
- 4.3.1 入退会者の承認：1997年8月1日から1997年12月31日までの入退会者を以下の通り承認した。
入会（12名，うち学生7名）：東久美子，紀岡秀征，渡辺陽巳，阿波根直一，坂井三郎，TARAN Yuri，今井志保，馬場直歩，土屋範芳，下田玄，浅川敬公，有信哲哉
退会（2名）：福永一哉，坂田朗（ともに逝去）
変更：（一般→名誉）P. K. Kuroda，（学生→一般）尹松，時枝隆之
この結果，会員数は以下の通りとなった

	正会員	(学生)	(シニア)	賛助会員	名誉会員	計	(在外)
1997年8月1日	1050	(140)	(4)	20	11	1080	(46)
入会	12	(7)	(0)	0	0	12	(1)
退会	2	(0)	(0)	0	0	2	(0)
変更	0	(-2)	(0)	0	0	0	(-1)
推挙	-1				1	1	
除籍	0	0	(0)	(0)	0	0	(0)
1997年12月31日	1059	(145)	(4)	20	12	1091	(46)

- 4.3.2 シニア会員の承認：1998年1月1日付けで正会員からシニア正会員への異動を以下の通り承認し

た。シニア正会員（1名）：岡部史郎

4.3.3 会員の除籍：日本地球化学会会則第5条（長期会費滞納）により、1998年2月14日付けで以下の会員の除籍を承認した。（国内会員）小西健二、福本浩敏、松本哲志（国外会員）JOHEMKO Jerome, KOLJONEN Tapio, MICHARD Gil (Univ. Paris VII, France)

4.4 日産学術助成推薦について：募集要項がまだ届いていないが、昨年の実績を考慮して、推薦依頼を7月末日締め切りで受け付ける旨ニュースで会員に知らせることを承認した。変更等が生じた場合の対処については会長に一任することが了承された。

5. 次回以降の予定

6月20日(土) 第2回幹事会（東大山上会館，13：30～17：00）

6月27日(土) 第2回評議員会（東大山上会館，13：30～17：00）

10月3日(土) 第3回幹事会（東大山上会館，13：30～17：00）

10月8日(木) 第3回評議員会（九州大学理学部）

10月10日(土) 総会（九州大学）

以上

第17期第2回地球化学・ 宇宙化学研究連絡委員会議事録

日時：1998年4月10日(金) 13：30～16：30

場所：日本学術会議第4部会議室（6階）

出席者：野津憲治（委員長，地球化学），青木謙一郎（会員），秋元肇（化学），田中剛（地球化学），中村栄三（岩鉱），半田暢彦（地球化学），松田准一（地球化学），山中健生（生化学）

1. 報告事項

(1) 学術会議関係（青木委員より）

第17期日本学術会議連合部会・第四部会が2月12日(木)に開催された。

A. 連合部会

○運営審議会附置委員会委員長から会員推薦手続きに係わる諸問題に関連し、125の領域別研連のそれぞれの学術研究領域の内容、範囲について100～150字に取りまとめるよう依頼があった。地質科学総合研連では(2)に記したように対応済みである。

○第17期研究連絡委員会及び専門部会の活動方

針に関するアンケートをとった。本研連は対応済みである。

B. 第四部会

○行革後も学術会議は存続するが、その在り方については総務省の総合科学技術会議で検討されることになった。

○平成10年度国際会議代表派遣は松田准一委員を第61回隕石学会に派遣することとした。

○第四部および研連附置小委員会の提案があり、第四部では科学教育の振興と人材の育成に関する小委員会が新規に、地質科学総合および地質研連では、応用地質、水文地質、地質年代、堆積学小委員会（いずれも継続）がそれぞれ組織される事となった。

○各研連の社会的貢献の内容をA4一枚に取りまとめて紹介することとなった。今回は核科学総合研連、植物科学研連、地質研連がレポートを提出した。本研連も準備したい。

(2) 地質科学総合研究連絡委員会（野津委員より）

○構成は鎮西清高委員長（会員・地質総合），木村学（地質），池谷仙之（古生物），斎藤常正（会員・地質），青木謙一郎（会員・鉱物），末野重穂（鉱物），野津憲治（地化），太田陽子（第四紀）および長瀬和雄（応用地質小委）と吉岡龍馬（水文地質小委）が交互，で平成9年12月22日と10年3月2日に会議を開いた。

○地質科学総合研連の研究領域の明確化について、次の案が出された。

地質科学全般。

1. 地球表層の構成物質および表層の諸過程，その歴史に関する研究領域（地質学，地形学，古生物学，岩石学，鉱物学，鉱床学，地球化学，水文学など）

2. 特定の時代を総合的に研究する領域あるいは地球外物質・宇宙空間に関する研究領域（第四紀学，宇宙化学など）

3. これらの応用に関する研究領域

○研連の見直し問題についてはこれまでの経過の説明につづいて議論を重ねたが、当面の推移を眺めることとした。

○地質科学関連学協会協議会について、再度その組織作りが提案されたが、その性格付けが先決との意見もあり、継続審議となった。

(3) 理学総合連絡会議（理総連）（野津委員より）

理学に関する諸研連の横の組織として「理総連」が設立され、最初の会議が平成10年3月24日に開かれた。諸報告に続き、研連間にまたがる問題の討議が行われたが、会議の目的等が必ずしも明確でなく、研連統合についての地ならし的な要素が感じられた。

(4) 雑報告

○国際対応の手引き1997年度版にIAGCとの連携に関する記事を提出した。

○平成10年2月16～17日にIGBP シンポジウム「21世紀へ向けての地球環境研究のありかた」が開かれた。

○理総連からの第17期研連活動計画アンケートに答えた。

○地球化学会との対応は日下部実委員が取ることとなった。

審議事項

(1) 第16期からの申し送り事項への対応について。

○本研連委員のうち、地球物理研連からの推薦はその推薦方法から常に発令が遅れ、研連発足時に全委員がそろわないことが問題となっている。18期以降も同様な研連推薦を続けるかについては、委員定数との絡みで様子を見ることとした。

○科研費審査委員の選考方法について、現在の方法は極めて繁雑であり、より簡単にできないかとの意見があったが、今期に1サイクル選考してから改善の余地があるかどうか考えることとした。

○対外報告に盛られた地球化学の将来計画の実現については、今期の活動の中で順次対応することとした。

(2) 他研連からの要望事項

○物理学研連から、平成10年度の大学関連研究施設経費・特別事業費の削減予算に対して、基礎研究の振興を望む要望書を出す、本研連もそれに賛同することにした。

○天文学国際共同観測専門委員会から依頼のあった、国際共同観測に関する諸問題の分析とその改善に向けての要望書の取りまとめ作業については、具体的に問題点を持つ委員が個別に対応することとした。

○SCOSTEP 専門委員会からの21世紀型共同利用研のあり方については、要望書の趣旨の明確化を待

つことにした。

(3) 今期の活動計画について意見を交換した。下記のような意見が述べられ、それを参考にして幹事が計画案を取りまとめることになった。

・化学教室／化学分野の再編成のなかで地球化学の重要性は増しているはずだが、その分野に地球化学の魅力をどのようにアピールするか。

・地球システムサイエンスとして化学系に食い込み、そのサイエンスの魅力を学生に伝える事が大切。

・工学系の環境研究はブラックボックスをそのままにしがちである。理学系は原理の追及に目的を置いている。

・国立研究所と教育機関の連携が大切。国研の人にオブザーバーとしてでも本研連委員会への参加を求めたい。

・設立準備中の地球環境科学研究所で十分な地球化学の研究がなされるよう働きかけを続けたい。

(4) その他

次回、第17期第3回の委員会は1998年7月14日(火) 13時30分から学術会議で開催予定。

以上

日本学術会議第17期第2回鉱床学 専門委員会議事録

1998年2月27日(金) 14：45～16：45

（鉱物学研連・鉱床学専門委合同会議後開催）

出席者：島崎英彦（委員長）・千葉仁・石渡明・溝田忠人・中嶋悟・根建心具・上野宏共・渡辺洵・松枝大治（幹事）（以上9名）

直前の合同会議で以下の報告および審議が行われた。

[報告事項]

1) 青木学術会議会員より、第17期日本学術会議連合部会・第4部会（2月12日開催）の報告がなされた。

2) 河村委員（末野研連委員長代理）より、地質科学総合研連（12月22日）の報告がなされ、それに関して意見の交換が行われた。

[審議事項]

1) 鉱物学研連の学術領域の内容について

2) 平成10年度国際会議への代表派遣の推薦追加について

鉱床学専門委員会審議事項

〔報告事項〕

- 1) 1998年シドニー開催予定のIAGODが、都合（主催者側が宗教的トラブルに巻き込まれたため）により1999年ロンドン開催に変更された。（島崎）
- 2) 「資源地質」（雑誌）のスタイルが国際誌に向けて変更（英文誌年4回、和文誌年2回）になった。（島崎）
- 3) 鉱物学会・岩鉱学会雑誌統合は、1999年1月より行う予定で準備中である。（中嶋）

〔議事〕

- 1) 島崎委員長より、前回の会議により決定した今期鉱床学専門委員会で作成する対外報告「鉱床学の研究・教育の推進について」の原案提示と主旨説明がなされた。「対外報告」の構成原案は以下のようである。
 - A) はじめに
 - B) 鉱床学の位置付けとその重要性
 - C) 鉱床学の研究・教育における問題点と改善への提言
- 2) 提案された原案について、委員相互で活発な意見交換を行った。以下にそれらの内容をまとめて列挙する。（順不同）
 - A) 日本の鉱床学の研究成果と国際貢献の強調
 - B) 鉱床学の特性と学問的意義
 - C) 物質循環と地球史における鉱床学の寄与
 - D) 地質学・鉱物学・地球化学への鉱床学の貢献
 - E) 環境問題と鉱床学
 - F) 鉱床成因モデルの構築
 - G) 資源リサイクルと低品位鉱の回収技術向上
 - H) 新たな鉱床学（現世における鉱化作用、有機物の作用等）の展開
 - I) 地球資源学としての鉱床学的重要性
 - J) スペース問題（資・試料の保存・記録、博物館等）
 - K) ボーリングコアの保存と活用（MMAJ, NEDO, 民間等）
 - L) 海外への研究・開発の展開
 - M) 実習鉱山・フィールド問題
 - N) 高校地学教育における鉱床学の位置付け

なお今回の議論を参考にして、次回までに島崎委員長がさらに原案の修正・加筆したものを用意することになった。

3) その他

- A) 議事録の関係各学会への報告は、各委員の選出母体となっている学会へそれぞれの委員が行うこととした。
- B) 次回の鉱物学研連・鉱床学専門委は、6月5日(金)に合同開催予定とする。

以上

第17期日本学術会議海洋科学研究 連絡委員会（第1回）議事録

日時：平成10年1月6日、14:00～17:00

場所：日本学術会議

出席者：田中正之、小泉千秋、隆島史夫、有賀祐勝、大谷清隆、河村章人、佐伯浩、芝山知也、杉本隆成、関文威、平啓介、平朝彦、谷口旭、角皆静男、野崎義行、半田暢彦、伏見克彦、松山優治

議事要旨

1. 委員長の選出を行い、田中正之委員を選出した。
2. 幹事として次の委員を選出した。
川口弘一（生物）、河村章人（水産）、平朝彦（地学）、花輪公雄（物理）、伏見克彦（化学）
3. 第17期の活動方針について
 - (i) 委員長より第17期の日本学術会議の活動全般について説明があり、とくに特別委員会の設置の紹介があった。
 - (ii) 角皆委員よりSCOR第33回執行委員会（リオデジャネイロ、1997年9月8日～9月12日）の出席報告があった。日本から副会長が選出される可能性がある旨説明があった。SCOR国内委員として平（啓）、角皆、有賀委員を選出、また角皆委員については副会長候補として推薦することとした。
 - (iii) 第17期の活動方針について議論を行った。その結果：
 - ・行政改革と関連し、今後の海洋科学の研究・教育の在り方について検討する。特に省庁再編と研究組織（例えば東大海洋研究所と海洋科学技術センター）、船の運航体制、学部・大学院教育、人材養成等について広い議論を起し、また関連研連とも連携しつつ、提言をまとめる。
 - ・田中委員長より地球環境研究の中核機関形成の検討会の審議、報告書作成、概算要求（1998年度に国立極地研究所に調査室）の状況について

説明があった。これを受けて、地球環境科学と海洋科学の関係と両者の推進方法について議論があり、今後の検討事項とした。

・本研連の議論の内容、提言をどのように行政等に反映させるのかについて議論があった。対外報告の作成と勧告が中心となることが確認された。

4. 東大海洋研究所の改組・拡充についての概算要求の状況について平（啓）委員より説明があった。また同研究所の協議会委員として淡路敏之（京大）、関文威（筑波大）、河村公隆（北大）、内藤靖彦（極地研）、奥田義久（地調）の各氏を推薦することとした。
5. 次回委員会は3月20日13時30分からはを予定することとした。

以上

1999年度「女性科学者に明るい未来をの会・ 猿橋賞」の受賞候補者及び 研究助成候補者の推薦依頼について

「女性科学者に明るい未来をの会」（1980年創立）は、自然科学の分野で、顕著な研究業績を収めた女性科学者に、毎年、賞（猿橋賞）を贈呈してまいりました。

1990年度からは、さらに、海外のシンポジウム等に参加し、論文を発表する若手の女性研究者にたいし、研究助成することにいたしました。

賞金と助成金は、本会を母体として新設された、公益信託（1990年3月13日文部省認可）「女性自然科学者研究支援基金」（受託者東洋信託銀行株式会社）から支出されます。つきましては、下記の要領により受賞候補者と研究助成候補者の推薦をお願いいたします。

記

猿橋賞

本賞は自然科学の分野で、顕著な研究業績を収めた女性科学者（ただし、下記の推薦締切日で50才未満）に贈呈します。

1. 本賞は賞状とし、副賞として賞金（30万円）をそえます。
2. 本賞の贈呈は1年1件（1名）です。
3. 所定の用紙に受賞候補者の推薦対象となる研究題目、推薦理由（400字程度）、略歴、主な業績リスト、主な論文別刷10編程度を、本会事務局までお送

り下さい。

4. 締切は1998年11月30日（必着）。
 5. 第18回の賞贈呈式は、1999年5月、東京において行なう予定です。
- なお、最近3年間の猿橋賞受賞者は次の通りです。

猿橋賞受賞者

- 第16回（1996）理化学研究所主任研究員
川合真紀博士
「固体表面における化学反応の基礎研究」
- 第17回（1997）名古屋大学生物分子応答研究センター
助教授 高倍鉄子博士
「植物耐塩性の分子機構に関する研究」
- 第18回（1998）千葉大学大学院自然科学研究科教授
西川恵子博士
「超臨界流体の研究」

研究助成

1. 海外のシンポジウム等に参加し、論文を発表する女性研究者に対し、研究助成をいたします。
 2. 助成金は1件10万円とし、年に数件とします。
 3. 所定の用紙に推薦対象者（各締切日において満40才未満）の略歴、研究業績、国際会議名（主催団体、開催場所、年月日）、発表論文題目、推薦理由を記入して、本会事務局までお送りください。
- 締切は1998年11月末日と、1999年4月末日の2回。

女性科学者に明るい未来をの会

〒166-0002 東京都杉並区高円寺北4-29-2-217

Tel: 03-3330-2455 (Fax 兼用)

平成10年度（第20回）沖縄研究奨励賞 候補者推薦について

平成10年度の沖縄研究奨励賞候補者の学会推薦に関する連絡が本学会宛参りましたのでお知らせいたします。

学会推薦の詳細は、庶務幹事までお問い合わせください。

1. 推薦応募開始：平成10年7月15日
2. 推薦応募締め切り：平成10年9月30日（当日消印有効）
3. 受賞者発表：平成10年12月7日
4. 贈呈式・受賞者記念講演：平成11年1月20日、那覇市内のパシフィックホテル沖縄で開催

問い合わせ先：〒100-0013 東京都千代田区霞ヶ関
3-6-15 グローリアビル7階
（財）沖縄協会「沖縄研究奨励賞」係
Tel：03-3580-0641, Fax：03-3597-5854
ホームページ：http://village.infoweb.ne.jp/~fvgm
0090/index.htm
E-mail：fvgm0090@mb.infoweb.ne.jp

1998年度地球化学若手会のご案内

地球化学若手会は、主に大気圏や水圏の地球化学に
携わる全国の若手研究者が一同に会し、共に議論し、
情報交換を行い、親睦を深めることを目的に活動して
います。今年も研究活動の報告と観測の体験談等を兼
ねた一般講演と、参加者全員による自己紹介（5分程
度、OHPシート2枚程度）の時間を設ける予定です。
日程：11月21日(土) 15：00 受付開始

11月22日(日)

11月23日（勤労感謝の日） 昼食後解散

場所：培本塾会館(財)

〒421-0600 静岡県榛原郡榛原町静波108番地

Tel：0548-22-0136

参加費：一般 ￥12,000, 学生 ￥9,000

（宿泊費・食費・交流会費を含む）

申し込み・お問い合わせ（締め切りは10月3日です）

〒577-0818 大阪府東大阪市小若江3-4-1

近畿大学理工学部化学科 平木敬三教授気付

鈴木康弘

Tel：06-730-5880 (4103), Fax：06-723-2721

E-mail：r7yasu@chem.kindai.ac.jp

（9月下旬から10月中旬まで不在）

又は

〒670-0092 姫路工業大学環境人間学部

社会システム環境学講座 杉山裕子

Tel：0792-92-1515 (258), Fax：0792-93-5710

E-mail：sugiyama@hept.himeji-tech.ac.jp

第2回「海洋と二酸化炭素」 国際シンポジウムのお知らせ

（1999年1月18日～22日科学技術庁つくば研究交流セ
ンター）

第1回「海洋と二酸化炭素」国際シンポジウム
は、1996年1月22日から26日にかけてプエルトリコ大
学マヤグエスキャンパスで行われ、26カ国から75名の

科学者が集い65の研究が発表され、成功のうちに幕を
閉じました。この第1回国際シンポジウムはFrank J.
Millero教授の提案で、IOC（政府間海洋学委員会）
とJGOFS（世界海洋フラックス研究計画）のもとに
組織されているCO₂パネル（海洋二酸化炭素諮問委員
会）によって実現されました。このシンポジウムは、
現在大いに注目されている海洋二酸化炭素の問題につ
いて深く議論する機会を持つことを目的としました。
研究発表は次の4分野に分類されました。

1. 観測手法とサンプリング
2. 大気と海洋の二酸化炭素の交換
3. モデリング
4. 観測

IOC-JGOFS CO₂パネ ル は、1997年6月 Warne-
muende での第8回会議で、日本のつくば市で行われ
る第2回国際シンポジウムを全面的に支援し、第9回
会議を国際シンポジウムとあわせて同市で行うことを
合意しました。第2回の国際シンポジウムは最新の研
究成果や新しい考え方をもちより、この分野の科学的
理解をより深めることを意図するものです。

研究発表の募集

本シンポジウムの研究発表では、海洋生物学も含
む、海洋環境と二酸化炭素が関係するすべての研究成
果を対象としています。発表者は100～200語の要約
を、1998年10月1日までに事務局に提出してくださ
い。

発表の要旨

A4 かレターサイズの用紙に通常4ページもしくは
は、8ページ以下の要旨原稿をお送りください。要旨
原稿の作成のしかたはセカンドサーキュラーに記載し
ます。要旨原稿の締め切りは1998年11月15日です。

口頭発表・ポスター発表

研究発表は原則として口頭発表になりますが、ポス
ターによる発表も可能です。ポスターでの発表を希望
する方は、研究発表の申し込みと同時の1998年10月1
日までに国際会議事務局までお知らせください。

出版物

研究発表の要旨集は会議の初めに参加者に配布いた
します。

本シンポジウムの研究発表は「Marine Chemistry」
の特集号としてまとめることを計画しています。ただ
し通常の査読を経ることになります。

招待講演者

招待講演者のリストはセカンドサーキュラーに掲載

します。

登録

1998年12月15日までに参加登録された方は登録無料
となります。登録参加者にはセカンドサーキュラーを
送付いたします。登録参加者には要旨集が無料で頒布
されます。

バンケット

国際シンポジウムのバンケットは1月21日木曜日の
夜、会議会場のパーティールームで行うことを予定し
ています。

研究発表者への旅費補助

若手研究者の旅費補助の計画がありますので、希望
する参加者は参加登録と発表の要旨をできるだけ早く
事務局にお送りください。

交通

研究交流センターはつくば市中心部にある会議施設
です。つくばセンターバス発着所から徒歩約10分
です。JR東京駅からは、高速バス利用（15分間隔）が
便利です。JR常磐線利用の場合は、ひたち野うしく
駅下車、バスで約20分です。

宿泊施設

シンポジウム参加者用の標準ホテル（第一ホテル）
はシングルルームで10,000円、ツインルーム14,500円
（消費税、サービス料込み）で、会場徒歩範囲です。
低料金のホテル（スワホテル）は、消費税、サービ
ス料、朝食込みで、シングル7,300円、ツインが12,800
円です。スワホテル利用者には朝のバスを手配しま
す。

宿泊施設の予約申込締切は1998年11月15日とします。

締め切り

研究発表募集：1998年10月1日

要旨原稿：1998年11月15日

宿泊予約申込：1998年11月15日

登録：1998年12月15日

事務局、通信の宛先

事務局：野尻幸宏 国立環境研究所

〒305-0053 つくば市

Tel：0298-50-2499, Fax：0298-50-2569

E-mail：co2intheoceans@nies.go.jp

ホームページ：http://www-cger.nies.go.jp

第8回世界湖沼会議のお知らせ 8th International Conference on the Conservation and Management of Lakes (—Lake99—)

表記シンポジウムの案内がまいりましたのでご紹介
いたします。

主催：コペンハーゲン市／

（財）国際湖沼環境委員会（ILEC）他 NGO

開催地：デンマーク王国コペンハーゲン市

テーマ：持続可能な湖沼管理

プログラム：基調講演、セッション、特別セッショ
ン、現地視察（デンマークの代表的な湖
を1日）

参加：制限無し大会運営基金の募集を行っています。

企業、個人の協力を歓迎いたします。

問い合わせ先：Peter Skat Nielsen City of Copenha-
gen, Chair of Organising Committee

ウェブページ：http://www.lake99.dk

（国内）（財）国際湖沼環境委員会

〒525-0001 滋賀県草津市下物1091番地

Tel：077-568-4573, Fax：077-568-4568

E-mail：ilec@mail.ilec.or.jp

ウェブページ：http://www.ilec.or.jp

第21回極域気水圏シンポジウムのお知らせ

本年帰国した第38次南極地域観測隊をもって「氷床
ドーム深層掘削観測計画」が終了しました。本観測で
は2,500mの氷床コアの採取に成功し、現在は分析が
国内で本格的に行われています。同隊では、ドームふ
じ観測拠点で「南極大気・物質循環観測計画」の内陸
の大気観測を行い、興味深いデータが得られていま
す。一方、第39次南極地域観測隊の夏期間には、大気
球による対流圏、及び成層圏の大気のサンプリングに
成功し、大気微量成分に関する研究の今後の発展が期
待されます。北極域ではスバルバル、グリーンラン
ド等多地域において、地球科学に関する様々な観測が
実施されております。特に、本年3月には日本、アラ
スカ、ノルウェーを結ぶ長距離の航空機観測が行われ
ました。

国内ではこれから得られた試資料、衛星データ等
の解析が実施されております。つきましては、南北極
域並びにそれらと関係する諸領域を主な研究対象とし
た大気科学、雪氷学、海洋学等に関する研究成果、研

究展望などを議論するシンポジウムを開催いたします。

広く研究発表を受け付けておりますので、ふるってご参加ください。

記

日時：平成10年11月25日(水)・26日(木)

会場：国立極地研究所・講堂

発表申込締切：平成10年9月30日(水) 必着

連絡先：国立極地研究所 気水圏シンポジウム係

平沢尚彦

〒173-8515 板橋区加賀1-9-10

Tel：03-3962-5904, Fax：03-3962-5719

E-mail：hira@nipr.ac.jp

東京大学大学院理学系研究科教官 公募のお知らせ

表記公募の案内がまいりましたのでお知らせいたします。

公募人員：惑星進化グループ、助教授 and/or 助手1名あるいは2名

研究分野：惑星科学

着任時期：決定後できるだけ早い時期

提出書類：

- (1) 履歴書
- (2) これまでの研究の概要 (A4紙2枚以内)
- (3) 業績リスト
- (4) 主要論文3編
- (5) 研究計画書 (A4紙2枚以内)
- (6) 他薦の場合は推薦状、自薦の場合は応募者に関する所見をいただける方2名の氏名と連絡先
- (7) 応募対象の職名

応募締め切り：平成10年9月16日(水)必着

書類送付先並びに問い合わせ先：

〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1

東京大学理学部地球物理学専攻 杉浦直治

Tel：03-3812-2111内4507, Fax：03-3818-3247

応募提出書類：封筒に応募書類在中と朱書の上、書留で送付のこと

東京農工大学農学部環境資源科学科 助教授公募のお知らせ

表記公募の案内がまいりましたのでお知らせいたします。

募集人員：助教授1名

所属：環境保護学講座

専門分野：無機地球化学

担当授業：無機化学、溶液化学、化学、化学実験など

資格：博士の学位を有すること。35歳未満が望ましい。

着任時期：平成11年4月予定

提出書類：履歴書

研究論文と総説のリスト、学位論文題目等

主要研究論文別刷 (5編以内、各1部)

これまでの研究経過 (2,000字以内)

今後の研究・教育についての抱負 (2,000字以内)

応募〆切：平成10年9月20日(日)消印有効

「環境資源科学科助教授応募」と朱書し、簡易書留とすること。

提出先：〒183-8509 東京都府中市幸町3-5-8

東京農工大学農学部環境資源科学科教官選考

委員会 中田宗隆

選考委員会構成：牛木秀治 (分子ダイナミックス)

久野勝治 (環境毒性学)

中田宗隆 (分子物理化学)

赤木 右 (無機地球化学)

高柳正夫 (分子物理化学)

粕谷夏基 (植物繊維化学)

昨年度の名簿作成の際 (1997年6月) にアンケートに答えていただいた集計結果を報告します。

A. 地球化学の教科書として出版を要望する対象について (円グラフの外側から第1, 第2, 第3希望, 回答数：各745)

全般を通じて化学学部学生向け教科書の要望比率が小さかった。これは地球化学を化学の一分野としてよりも、地球惑星科学の一分野としてとらえる会員が増加しているためかもしれない。

教科書の第1希望は、地球化学講座、地球化学関連学部向け、学部低学年向け、大学院生向けの順であった。地球化学講座はかなり専門的内容を含んでいることを考えると、入門用と専門用の教科書の要望がほぼ等しいことになる。これは地球化学分野全般にわたり適当な教科書が不足していることを意味しているのかもしれない。

第2希望では、大学院生向きの教科書の要望比率が高い。

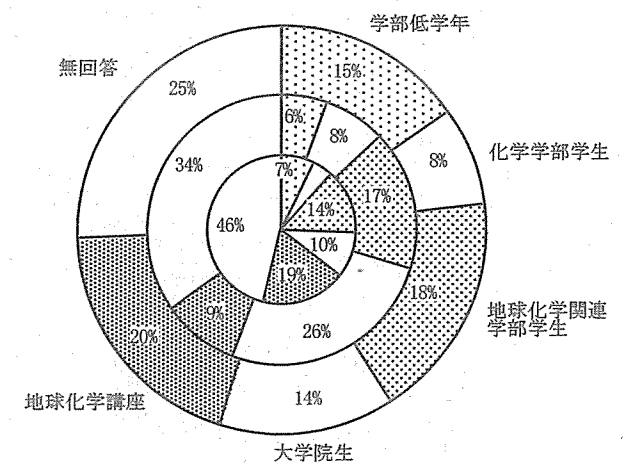
B. 新「地球化学」でよかった点を2つ、不満な点を1つ選んで下さい。(円グラフの外側：よかった点, 回答数：1088; 内側：不満な点, 回答数：766)

アンケートは地球化学が改訂された直後であったが、年四冊化、企画総説等の新編集方針が良く評価されている。顕著な不満点は報告されていない。

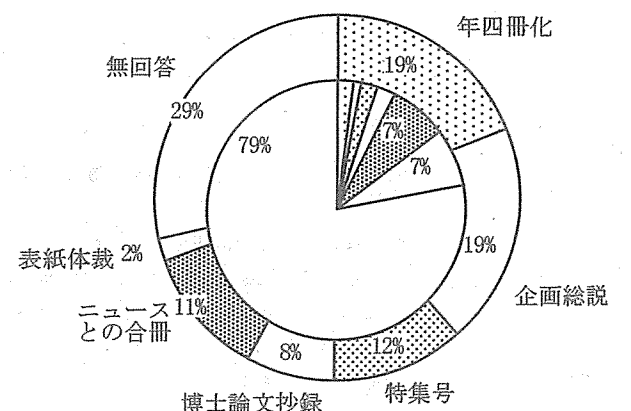
C. シニア会員制度について知っていますか。

本アンケート実施時ではあまり周知されていないようである。執行部の一層の努力が必要である。

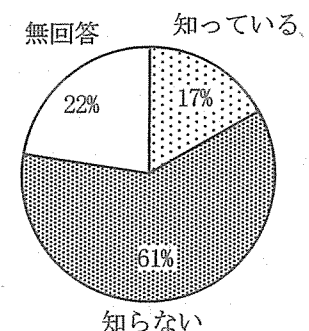
会員担当幹事〔坂本尚義〕



A. 地球化学の教科書について



B. 新「地球化学」について



C. シニア会員制度について

地球惑星科学関連学会連絡会ニュース

No. 15

(1998 年6月)

お知らせ:

地球惑星科学関連学会 1999 年合同大会のセッション、
シンポジウム提案の一般公募について

1999 年合同大会実行委員会

1999 年合同大会は 6 月 8 日 (火) ~ 11 日 (金) に国立オリンピック記念青少年総合センター (東京都渋谷区代々木神園町 3-1) で開催されます。この合同大会においては、1998 年大会と同様に、共通・固有セッションの区別はありません。また、セッション・シンポジウムは、各学会プログラム委員等からの申し出と一般公募の両方で募集します。各学会宛には提案方法について別途連絡致しますので、以下では一般公募について述べます。

セッション・シンポジウムを提案される方は、次の情報を合同大会組織委員会まで電子メールあるいは郵送にてお送り下さい。地球惑星科学の将来展望や社会的位置づけ等に関連するセッション・シンポジウムの提案も歓迎します。

○ 提案項目は以下の通り

1. セッション・シンポジウム名 (全角換算 40 字以内)
2. 提案者名・連絡先
(所属機関, 住所, 電話, FAX 番号, [必ず] 電子メールアドレス)
3. コンビナ候補者 2,3 名のリストと連絡先
(所属機関, 住所, 電話, FAX 番号, [必ず] 電子メールアドレス)
4. 内容の簡単な説明 (1 行全角 40 字以内で 3-5 行)
5. 合同大会で行うことの意義 (1 行全角 40 字以内で 3-5 行)
6. 予想される発表論文数 (口頭発表, ポスター発表それぞれの概数も)
7. 会場に必要な収容人数

ニュースへ記事やご意見をお寄せください

今後とも従来と同様、皆様の情報・原稿をお待ちしています。地球化学に関連した研究集会、シンポジウムの案内、人材募集、書評、研究機関の紹介など何でも結構です。編集の都合上、電子メール、フロッピー (マックもしくは Dos/V いずれでも結構です) での原稿を歓迎いたしますので、ご協力の程よろしくお願いいたします。次号の発行は 1998 年 11 月下旬頃を予定しています。ニュース原稿は 10 月下旬までにお送りいただくよう、お願いいたします。また、ホームページに関するご意見もお寄せください。

(編集担当 高橋和也)

編集担当者

高橋和也

〒351-0198 埼玉県和光市広沢2-1

理化学研究所 核化学研究室

Tel: 048-467-9420

Fax: 048-462-4662

E-mail: kazuyat@postman.riken.go.jp

米田成一

〒169-0073 新宿区百人町3-23-1

国立科学博物館 理工学研究部

お詫びとお願い

地球化学, 31巻, 27-34 (1997) は, 著者単独の研究成果ではなく, 謝辞に記載されている方々との共同研究で行われたことを, あらためて申し上げます。そして, 著者が, 本論文を共同研究者の承諾を得ぬまま投稿してしまったものであることを, ここで紙面を借りて関係者各位にお詫びいたします。

また, 著者は, 冒頭の英文アブストラクトと4章で, 未発表図表とそれに基づく新しい知見を無断で公表してしまい, 関係の方々に多大な迷惑をかけてしまいました。あらためてお詫びするとともに, この部分

の originality と priority は, あくまでも飯塚義之氏 (現カーネギー研究機構地球物理学研究所所属; yij-zuka@gl. ciw. edu), 中野俊夫氏 (岡山大学・固体地球研究センター; tnakano@misasa. okayama-u. ac. jp), 中村栄三氏 (同; eizonak@misasa.okayama-u.ac.jp) のものでありますので, 引用する際は, 関係の各氏にご一報くださるよう, よろしく願いいたします。

牧嶋 昭夫

Vol. 32の査読者一覧 (50音順)

赤木 右	石渡 良志	今村 峯雄	蒲生 俊敬	川邊 岩夫
下島 公紀	島村 匡	鈴木 德行	鈴木 款	平良 初男
高田 秀重	高橋 和也	千葉 仁	玉山 明	長尾 敬介
中山英一郎	中森 亨	成田 尚史	野津 憲治	乗木新一郎
日高 洋	比屋根 肇	平田 岳史	福岡 孝昭	牧嶋 昭夫
松本 源喜	楊 宗興	米田 成一	和田 秀樹	

博士論文の抄録の募集

日本地球化学会会員 (近日入会予定を含む) の博士論文の抄録を『地球化学』誌に掲載しています。博士論文の内容は地球化学および関連する分野とします。過去3年間に提出した論文の抄録を募集します。締め切りはありません。集まり次第, 逐次, 掲載します。

博士論文の題目 (和文・英文), 博士論文提出先 (和文), 提出年, 所属 (和文・英文), 氏名 (和文・英文), 博士論文の内容を電子メール, またはテキストファイル入りのフロッピーディスクでお送り下さい。原稿は論文の内容を2000字以内厳守 (題目, 提出先, 氏名を除く) をお願いします。刷り上がり1ページになります。図または表を掲載する場合, カメラレディーの原稿を郵送下さい。その際, 図, 表1枚につき, 500字としてカウントして下さい。なお, 連絡先も忘れずにお知らせ下さい。

原稿送り先

地球化学編集委員長

赤木 右 (akagi@cc. tuat. ac. jp)

(フロッピーディスク, 図表の原稿は下記にお送り下さい。)

〒183-8509 東京都府中市幸町3-5-8

東京農工大学農学部環境資源科学科 赤木 右

日本地球化学会ニュース

No. 155

1998. 12. 15

主な記事

●学会記事

□ 1998年日本地球化学会総会報告及び事業報告

□ 学会賞 (日本地球化学会1999年度「柴田賞・学会賞・奨励賞・功労賞」候補者推薦について

□ 鳥居基金の募集

□ 日本地球化学会よりのお知らせ (GJのホームページについて, シニア会員について)

□ 評議員会議事録

□ 鳥居基金実施報告

●その他の研究助成, シンポジウム, 人事公募等の各種情報

□ 多摩川研究助成など

●日本地球化学会1997年度決算, 1998年度中間決算及び1999年度予算

●1999年度地球惑星科学関連学会合同大会のお知らせ (連絡会ニュース)

現在, 日本地球化学会のホームページを学術情報センターのホームページ内の Academic Society Home Village の中で公開しております。URL アドレスは, <http://wwwsoc.nacsis.ac.jp/gsj2/index.html> です。

また従来通り, <http://info.riken.go.jp/lab-www/nuc-chem/GSHOME.HTM> にも, 公開しておりますので, ご覧の上, ご意見, ご要望をお寄せください。みなさまのご協力で, より魅力的でアップデートなものにしていきたいと思っています。

1998年度日本地球化学会総会報告

(1) 1998年度日本地球化学会総会は、10月10日14時00分より、K会場において、下記の総会次第に従って行われた。

1998年度日本地球化学会総会 議事次第

1. 開会宣言
2. 議長選出
3. 会長挨拶 石渡良志会長
4. 大会実行委員長挨拶 村江達士会員
5. 議事
 - 1) 1997年度事業報告ならびに決算報告および監査報告
 - 2) 1998年度事業中間報告ならびに決算中間報告
 - 3) 1999年度事業計画ならびに予算
 - 4) 各種報告
 - (4.1) 地球化学書編集委員会
 - (4.2) 将来計画委員会
 - (4.3) 地球化学宇宙化学研連
 - 5) その他
6. 1998年度日本地球化学会賞・奨励賞・功労賞授賞式
 - 1) 学会賞 佐野有司会員
「揮発性元素同位体による火山化学・環境化学の研究」
 - 2) 日本地球化学会奨励賞 鍵裕之会員
「分光学的アプローチによる地球・惑星炭素物質の物性と起源に関する研究」
 - 3) 日本地球化学会奨励賞 大河内直彦会員
「バイオマーカーによる太平洋域深海堆積物の地球化学的研究」
 - 4) 日本地球化学会功労賞 矢内桂三博士
「南極隕石による宇宙化学研究への貢献」
7. 閉会宣言

(2) 1997年度事業報告

1. 会員状況

	正会員 (学生) (シニア)	賛助会員	名誉会員	計	(在外)
1997年1月1日	1050 (126)	(0)	21	11	1082 (48)
入会	56 (35)	0			56 (1)
退会	46 (6)	(0)	1	0	47 (2)
変更	0 (-24)	(4)	(-1)	推挙1	1
除籍	0 (0)	(0)	0	0	0 (0)
1997年12月31日	1059 (131)	(4)	20	12	1091 (46)

2. 年会、委員会等開催

年会 (9/17~19; 八王子, 東京都立大学教養部), 春期シンポジウム (3/26; 名古屋, 地球惑星科学関連学会1997年合同大会, 名古屋大学東山キャンパス), 総会 (9/18; 八王子, 都立大学教養部), 評議員会4回 (2/15, 6/14, 9/16, 9/19), 幹事会3回 (2/8, 6/7, 9/6), GJ編集委員会4回, 地球化学編集委員会1回, 学会賞等受賞者選考委員会1回, 将来計画委員会1回, 名誉会員推薦委員会1回, 選挙管理委員会2回

3. 会誌発行
Geochemical Journal: Vol. 31 (1~6), 地球化学: Vol. 31 (1~4), 索引号 (Vol. 1~30), 特別号 (会員名簿)

4. ニュース発行 No. 148 (1/31), 149 (5/31), 150 (8/5), 151 (12/10) (「地球化学」と合本)

5. 1998~1999年度日本地球化学会役員選挙

6. 日本地球化学会賞等の授与 (柴田賞1件, 奨励賞2件)

7. 1997年度鳥居基金助成: 第1回 (なし), 第2回 (海外派遣1件)

8. 日産学術助成推薦 (奨励研究1件)

9. 公開講座「生命の起源と惑星探査」(9/13; 東京, 科学技術館サイエンスホール; 科学研究費補助金研究成果公開発表B)

10. 「GJ」+「地球化学」販売促進キャンペーン (181機関・会社へ free copy 送付)

11. 学会などの共催, 後援, 協賛

1997年度質量分析連合討論会 (共催) 奈良 (5/14~16), 第13回 ESR 応用計測研究会 (協賛) 新潟大学 (8/28~29), 酸性雪 (雨) に関する国際会議 (後援) 新潟 (10/6~8), 国際会議「MIGRATION 97」(共催) 仙台 (10/26~31), 「生物・環境試料の超長期保存ネットワークに関する国際ワークショップ」(後援) 大阪 (11/3~6), 第8回「ヒ素シンポジウム」(協賛) 大阪市立大学 (11/20~21), 第5回「環境と化学」講演会 (共催) 東京 (11/27~28), 第12回「大学と科学」公開シンポジウム (セッション名: マグマと地球) (後援) 新潟 (11/1~2)

(3) 1998年度事業中間報告

1. 会員状況 (1998年8月31日現在)

	正会員 (学生) (シニア)	賛助会員	名誉会員	計	(在外)
1998年1月1日	1050 (145)	(4)	20	12	1091 (46)
入会	29 (12)		1		30 (2)

退会	33	(0)	(0)	3	0	36	(1)
変更	0	(-4)	(1)	(-2)	推挙0	0	
除籍	6	(1)	(0)	0	0	6	(3)
1998年8月31日	1049	(152)	(5)	18	12	1079	(42)

2. 年会、委員会などの開催

年会 (10/9~11; 福岡, 九州大学箱崎キャンパス), 地球惑星科学関連学会1998年合同大会 (5/26~29; 東京, 国立オリンピック記念青少年総合センター), 総会 (10/10; 福岡, 九州大学箱崎キャンパス), 評議員会3回 (2/14, 6/27, 10/8), 幹事会3回 (2/7, 6/20, 10/3), GJ編集委員会1回, 地球化学編集委員会1回, 学会賞等受賞者選考委員会1回, 将来計画委員会1回

3. 会誌発行

Geochemical Journal: Vol. 32 (1~4), 地球化学: Vol. 32 (1~3)

4. ニュース発行 No. 152 (2/20), 153 (5/15), 154 (8/25), (「地球化学」と合本)

5. 日本地球化学会賞等の授与 (学会賞1件, 奨励賞2件, 功労賞1件)

6. 1998年度鳥居基金助成: 第1回 (海外派遣2件, 研究集会2件), 第2回 (海外派遣2件, 研究集会1件)

7. 日産学術助成推薦 (一般研究1件, 奨励研究2件)

8. 公開講演会「地球とわたしたち—21世紀のために今の地球を考えよう」(10/18; 福岡, アクロス福岡国際会議場; 科学研究費補助金研究成果公開発表B)

9. 学会などの共催, 後援, 協賛

1998年度日本質量分析総合討論会 (共催) 高崎 (5/13~15), 第35回理工学における同位元素研究発表会 (共催) 東京 (6/29~7/1), 第32回宇宙空間科学 CO-SPAR 総会 (共同主催) 名古屋, 7/6~11) 第6回地下水・土壌汚染とその防止策に関する研究集会 (後援) 立正大学 (9/17~18)

(今後の予定)

第14回 ESR 応用計測研究会 (協賛) 大阪大学 (11/21) 第13回「大学と科学」公開シンポジウム (セッション名: 生きている地球の新しい見方—地球・生命・環境の共進化) (後援) 東京 (11/21~22)

(4) 1999年度事業計画

1. 年会 (9月29日~10月1日: つくば, 地質調査

所)

2. 総会 (9月30日: つくば, 地質調査所)

3. 地球惑星科学関連学会1999年合同大会 (6/8~11日: 東京, 国立オリンピック記念青少年総合センター)

4. 評議員会4回

5. 幹事会3回

6. 会誌発行

Geochemical Journal: Vol. 33 (1~6), 地球化学: Vol. 33 (1~4), ニュース No. 156, 157, 158, 159

7. 会員名簿の発行

8. 日本地球化学会役員選挙

9. 日本地球化学会賞等の授与

10. 名誉会員の推挙

11. 1999年度鳥居基金助成, 2回

12. 学会などの共催, 後援, 協賛

第36回理工学における同位元素研究発表会 (共催) 東京, 1999/7/5~7

(5) 1998年度第1回鳥居基金

1998年度第1回「鳥居基金」交付決定

1) 研究集会旅費の助成

TE-12: Dragusanu Cristian

名古屋大学大学院理学研究科博士課程

会議名: Ninth International Conference on Geochronology, Cosmochronology and Isotope Geology by the Great Wall

期 間: 1998年8月20~26日

渡航先: 中国, 北京

助成金額: 金10万円

TE-13: 久野章仁 東京大学大学院総合文化研究科博士課程1年

会議名: Tenth International Conference on X-ray Absorption Fine Structure (XAFS-X)

期 間: 1998年8月9~15日

渡航先: アメリカ合衆国

助成金額: 金10万円

2) 研究集会への助成

TE-14: 斎藤元治

地質調査所環境地質部研究員

集会名: 火山性流体討論会

期 間: 1998年6月17~19日

助成金額：金5万円

TE-15：時枝隆之 気象庁気象研究所研究官
集会名：第11回海洋物質循環セミナー—物理、
化学、生物の接点を求めて—

期 間：1998年8月上旬

助成金額：金5万円

日本地球化学会

「柴田賞・学会賞・奨励賞・功労賞」

1999年度受賞者候補者推薦の募集

応募期限 1999年1月30日(土)

日本地球化学会受賞規定により、柴田賞・学会賞・奨励賞・功労賞受賞候補者の推薦を募集いたします。つきましては、下記ご参照のうえ、会員各位のご関係で適当と思われる受賞候補者を自薦他薦を問わずご推薦くださるようお願いいたします。

候補者の資格

(柴田賞) 地球化学の発展に関し、学術上顕著な功績のあったもの。

(学会賞) 地球化学の分野で特に優秀な業績を収めた本会会員。

(奨励賞) 1964年4月2日以降に生まれた本会正会員(学生会員を含む)で、地球化学の進歩に寄与する優れた研究を為し、なお、将来の発展を期待しうる者。

(功労賞) わが国の地球化学あるいは本会の発展に関し特に寄与のあった者。

募集の方法：本会会員の推薦による。

推薦の方法：所定用紙に記載した推薦者を1月30日(土)までに学会事務局へ(当日消印有効)。

提出先：〒113-8622 文京区本駒込5-16-9

日本学会事務センター内

日本地球化学会受賞者選考委員会

推薦の書式は、会員名簿(1997年度版)のハンドブック部に記載されています。これをコピーして使用するか、同様の書式をワープロ等で作成して使用してください。なお、書式のわからない場合や、この件についてのお問い合わせは本会庶務担当幹事(下記)まで。

庶務幹事：海老原 充

東京都立大学理学部化学教室

〒192-0397 八王子市南大沢

TEL：0426-77-2553

FAX：0426-77-2525

E-mail：ebihara-mitsuru@c.metro-u.ac.jp

1998年度第2回鳥居基金の応募について

1998年度第2回鳥居基金の募集の締切は、1999年1月末締切となります。

募集要項をご参照の上(ホームページ、もしくは会員名簿号の該当項目をご覧ください)。

〒113-8622 東京都文京区本駒込5-16-9

日本学会事務センター内、日本地球化学会鳥居基金委員会まで、応募書類を提出してください。

またこの件についてのお問い合わせは、本会庶務担当幹事(下記)まで。

庶務幹事：海老原 充

東京都立大学理学部化学教室

〒192-0397 八王子市南大沢

TEL：0426-77-2553

FAX：0426-77-2525

E-mail：ebihara-mitsuru@c.metro-u.ac.jp

Geochemical Journalの 新しいホームページについて

9月よりGeochemical Journalの新たなホームページを立ち上げました。新しいホームページにはこれまで掲載されていた投稿規定とEditorial Board Memberのリスト以外に、Vol.32(1998年度)からの目次とアブストラクト、近日掲載予定の論文のリストが含まれています。新しいホームページのURLアドレスは

<http://psmac0.ess.sci.osaka-u.ac.jp/GJ>

です。また地球化学会のホームページからもリンクしています。ぜひ御一覧下さい。また、こういった風が良いなどの御提案がございましたら、松田までお知らせください。

Geochemical Journal 編集長

松田准一 (e-mail: gj@ess.sci.osaka-u.ac.jp)

シニア会員について

昨年、ご承知のように、日本地球化学会では、会則改正を行い、シニア会員制度を設けましたが。しかし

ながら、まだ、幅広い御認識がいただけていない様にも思われます。会員歴35年以上かつ年齢70歳以上の方は、申告いただければシニア会員となります(会費は年額5,000円になります)。どうか、該当する方がいらっしゃれば、御申告くださるようお願いいたします。申告は、名簿号等についている「日本地球化学会(入会・変更)申込書」に、記入の上、日本学会事務センターにご送付ください。評議員会で承認の上、シニア会員へ移動させていただきます。

1998年度第1回「鳥居基金」 助成実施報告(TE-15)

氏名：時枝隆之(気象庁気象研究所研究官)

助成：研究集会

課題：第11回海洋物質循環セミナー

—物理、化学、生物の接点を求めて—

本年度の「海洋物質循環セミナー」は、8月21日から23日までの3日間の日程で、つくば市の筑波研修センターにおいて開催されました。今年度の参加者はこの時期、他の行事と重なっていた関係で例年より多少少ない21名で、うち学生の参加者は8名でした。

本セミナーは1988年から年1回ずつ開催されてきたもので、もともとは東北大や北大を中心とした学生の研究交流会でしたが、近年参加者に占める国立研究機関等の若手研究者の割合が高くなってきました。それに伴って講演分野の広がりや講演内容の充実がみられるようになってきました。タイトルにもありますように、本セミナーは化学のみでなく、物理や生物といった異なった分野の研究者が集まり、「物質循環」という共通の研究領域について話題を持ち寄りそれぞれの立場で議論しあうことで、理解をより深めることを目的としています。

本年度は16件の講演があり、その内容を大まかに分類しますと、モデリング関係(5件)、大気海洋物質交換(2件)、古環境関係(2件)、北太平洋中層水(3件)、観測その他(2件)など幅広いものでした。例年のことではありますが、1講演30分をお願いしてはいるのですが、活発な質疑応答のために1時間を超える講演も少なくなく、連日夜遅くまでセミナーは続けられました。

分野の異なる研究発表を聞くことは新鮮で、興味を持ちやすい反面、多少難しく思える部分もあるようですが、それがむしろ各参加者の勉強不足、努力不足を

自覚させるよい機会となっているように思われます。本セミナーは、現在の海洋を含む地球環境の問題が、化学や生物、物理がそれぞれ単独では説明が困難であることを考えると、学会等ではなかなかできない、分野を越えた情報交流が自由な雰囲気の中で行える貴重な機会であると思えます。今後は、さらに多面からの参加を募っていきたいと考えています。

来年度は、横浜、横須賀地区での開催を計画しています。興味のある方は是非ともご参加ください。最後に、本セミナーに御理解いただき助成を決定して下さった方々にこの場をお借りしてお礼申し上げます。

1998年度第2回「鳥居基金」 助成実施報告(TE-14)

氏名：斎藤元治(地質調査所)

助成：国内研究集会

課題：火山性流体討論会

1998年6月17日～19日にかけて、茨城県水海道市の学童農園「あすなろの里」において、表記の討論会を開催した。本討論会は、地球化学に関する様々な講演について徹底的な討論を行い、学問の内外での知己と見聞を得ること、および学生・若手の発表・質疑の鍛錬の場を提供することを目的としている。

本討論会は十数年前から名称を変えつつも毎年行っているもので、近年は火山ガス・熱水・マグマなどを包括する名称として「火山性流体」を会の名称として掲げてあるが、会の名称によって参加者や発表内容を縛ることはしていない。本会の趣旨である徹底的な討論を行い、参加者全員が討論に参加できるよう、一人当たりの講演時間をできるだけ長く(一時間以上)とり、発表途中での質疑や初歩的な質問も奨励している。学生の参加を支援するために、社会人のカンパにより学生の交通費の補助を行うことを慣例化しているが、本年は鳥居基金助成も加えることにより、学生に対して交通費の全額補助をすることができた。関係各位に感謝したい。

今回は大学や研究所等から14名の参加者があり(うち学生6名)、例年よりは弱冠少ない人数であったが、その代り、参加者全員が講演を行えたので、少数精鋭の有意義な討論会になった。発表内容も、マンツルの進化といった地球深部での物質移動の話から、マグマの脱水、火山ガスや温泉の起源、鉱床の成因と

いった地殻内での物質移動に関する研究、火山噴火の様式変化や噴出率データなどから噴火メカニズムの解明を試みた研究、降水の化学同位体組成変化といった地球表層での物質移動に関する研究、水の酸素同位体分別係数に関する基礎研究など、多岐にわたり、様々な研究分野の研究成果や研究動向、背景を聴くことができた。夕食後の講演では、良い酒のつまみ？になって活発な議論に展開した発表もあった。討論の合間には、スポーツ・宴会およびバーベキューも行われ、参加者同士の親睦も深められた。各講演や討論そのものも興味深いものが多く、有意義であったが、なにより、多くの参加者が相互理解に時間をかけて努力してくれたことで、討論会の目的は達成されたと考える。

議 事 録

1998年度第2回日本地球化学会評議員会議事録

日時：1998年6月27日(土) 13:30~17:30

場所：東京大学山上会館001会議室

出席者：石渡良志会長、松久幸敬副会長、脇田宏監事、赤木右、海老原充、蒲生俊敬、川辺岩夫、河村公隆、日下部実、齋藤和男、篠原宏志、下山晃、高橋和也、中井俊一、長尾敬介、柳峰、坂本尚義、吉田尚弘（以上評議員）

1. 1998年度第1回評議員会議事録の承認。
2. 報告事項

2.1 庶務・幹事会（海老原評議員）：【庶務一般】出版者著作権協議会より出版物著作権料の分配通知（10万円）（3/9）、小山忠四郎会員逝去に対する弔電発送（4/16）【文部省】平成10年度科学研究費補助金「研究成果公開促進費（研究成果公開発表(B)）」審査結果（採択）の通知受領（4/8）、平成10年度科学研究費補助金「研究成果公開促進費（学術定期刊行物）」（182万円）交付内定の受領（5/20）、同交付申請書の提出（5/30）、平成10年度科学研究費補助金「研究成果公開促進費（研究成果公開発表(B)）」（140万円）交付内定の受領（6/4）、同交付申請書の提出（6/15）、平成10年度学会法人等連絡協議会の開催通知受領および参加通知発送（6/15）【研究助成】鳥居基金委員会から1998年度第1回助成決定の報告と実施（2/27）、1998年地球化学研究協会学術賞「三宅賞」受賞候補者推薦の依頼（3/9）、日産科学振興財団より研究助成候補者推薦の依

頼（5/6）、1999年度女性研究者に明るい未来をの会研究助成候補者推薦の依頼（6/15）、科学研究費補助金に係わる審査委員候補者の推薦の依頼（地球化学・宇宙化学研連）（6/3）【後援・共催等】「第6回地下水・土壌汚染とその防止対策に関する研究集会」（1998/9/17~18 立正大学）後援【幹事会】1998年6月20日13:30~17:00に東京大学山上会館001室において開催。出席者：石渡会長、松久副会長、赤木「地球化学」編集長、海老原幹事、高橋幹事、中井幹事。1998年度第2回評議員会の議事内容について整理した。

2.2 会計（中井評議員）：1997年度の決算について報告があった。

2.3 編集

2.3.1 GJ（松田評議員）：Vol. 32はNo. 1・No. 3まで出版が完了した。

2.3.2 地球化学（赤木評議員）：Vol. 32は、No. 1及びNo. 2まで出版が完了した（論文8編、うち企画総説2編、報文6編）。No. 3は8月下旬出版予定。

2.3.3 ニュース（高橋評議員）：No. 153が5月下旬、地球化学 Vol. 32, No. 2と合本で出版。No. 154は地球化学 Vol. 32, No. 3とともに8月下旬発行予定。

2.4 行事

2.4.1 地球惑星科学関連学会連絡会（篠原評議員）：1999年合同大会は1999年6月8日・11日に国立オリンピック記念青少年総合センターにて開催される予定（幹事大学：北大）。プログラム委員に中井俊一、河村公隆両評議員を推薦。2000年度は同じく6月にWPGMと相前後して同じ会場で行われる計画（幹事大学：九大）。

2.4.2 1998年度日本地球化学会年会（柳評議員）：1998年度年会（九州大学、10月9日・11日）の計画および進捗状況（要旨集のデータベース化への協力、企画展示、研究会などについて）について報告があった。

2.5 会員（坂本評議員）：昨年会員名簿作成の際に行ったアンケートの結果について報告があった（ニュース154号に掲載予定）。

2.6 委員会

2.6.1 学会賞受賞者選考委員会（清水評議員一代理：石渡会長）：学会賞選考委員会を5月16日に開催し、本年度の学会賞候補者を選考した旨報告があった。

2.6.2 名誉会員推薦委員会（松久副会長）：今年は推薦を行わない旨の報告があった。

2.6.3 鳥居基金委員会（松久副会長）：1998年前期は、海外派遣（2件）、国内集会（2件）を採択したとの報告があった。

2.6.4 将来計画委員会（松久副会長）：6月27日に本年度第1回目の委員会が開催され、省庁再編による研究機関への影響と、地球環境研究所（文部省）をめぐる問題について議論した旨報告があった。これらの問題に関しては年会時に夜間集会を開催し、会員も交えて広く議論する予定である。

2.6.5 出版準備委員会（松久副会長）：「地球化学書出版準備委員会報告(2)」と題する報告書が配布され、準備委員会でのこれまでの議論内容が報告された。具体的には、前回の評議員会で議論のてたモノグラフの出版に関しては将来計画委員会で積極的に検討すること、準備委員会としての活動は終了したので編集委員会を発足させてそちらに引き継ぐ段階に来ていることが報告された。

2.7 学術会議

2.7.1 地球化学・宇宙化学研連（日下部評議員）：第17期第2回委員会が1998年4月10日に開かれた。研連見直し問題、行革における学術会議のあり方、今期の活動計画などについての報告、審議を行った。議事録はニュースに掲載予定。

2.7.2 鉱物研連鉱床学専門委員会（代理：日下部評議員）：第17期第2回委員会が1998年2月27日に開かれた。今期専門委員会で作成する対外報告についての意見交換を行った。

2.7.3 海洋科学研連（蒲生評議員）：第17期第2回委員会が1998年6月10日に開かれた。研連委員長に田中正之（東北大）が選出された。今期活動方針についての意見交換が行われた。

2.7.4 地球物理学研連惑星科学専門委員会（坂本評議員）：第17期第2回委員会が1998年3月11日に開かれた。委員の紹介が行われ、将来計画面や対外報告等についての検討が行われた。

2.8 その他

2.8.1 学校科目「地学」関連学会連絡協議会（蒲生評議員）：第13回協議会が1998年4月21日に開かれた。地学教育に関する情報を関連学会間で交換するシステムをどう作るかについて議論された旨の報告があった。

3. 審議事項

3.1 入退会者の承認：1998年1月1日から1998年4月30日までの入退会者を以下の通り承認した。

【入会】（20名）寺田健太郎、高橋善行、豊田栄、谷水雅治、笹木圭子、付鳳富、可児智美、横山祐典、篠塚一典、植田真司、柴田知之、柚原雅樹、濱本拓志、森泉純、SAHOO Saratakumar、杉山裕子、木下昌幸、村野宏達、足立賢一、晴山美保子

【退会】（32名）端山好和、平野富雄、北村弘行、北山憲三、窪田康宏、松本 夫、中館興一、太田一也、佐藤壮郎、椎川誠、寺島美南子、石神工、大井幸雄、本間弘次、高橋敏夫、合田耕一、小野寺毅、酒井隆太郎、青木延浩、井関和夫、伊勢明広、永瀬廣江、原久雄、樋口敬二、林秀、小山忠四郎、大八木義彦、玉生志郎、阿達一宏、（以下賛助会員）ドリコ(株)岡本昌巳、(株)新潟県環境衛生研究所、大阪ガス(株)企画部多木秀雄

【除名】（6名）小西健二、福本浩敏、JOHEMKO Jerome、松本哲志、KOLJONEN Tapio、MICHARD Gil

この結果、会員数は以下の通りとなった。

	正会員（学生）	（シニア）	賛助会員	名誉会員	計	（在外）
1997年12月31日	1059	(145)	(4)	20	12	1091 (46)
入会	20	(9)	(0)	0	0	20 (1)
退会	29	(0)	(0)	3	0	32 (0)
変更	0	(-1)	(1)	0	0	0 (-2)
推挙	0				0	0
除籍	6	(1)	(0)	0	0	6 (3)
1998年4月30日	1044	(152)	(5)	17	12	1073 (42)

3.2 学会賞受賞者の承認：松久選考委員から1998年度日本地球化学会学会賞等受賞者（学会賞、奨励賞及び功労賞）の選考結果、および選考理由の報告が行われた。選考結果は以下の通り：（日本地球化学会賞）佐野有司、（日本地球化学会奨励賞）鍵裕之（同）大河内直彦、（日本地球化学会功労賞）矢内桂三。また、推薦、選考に関する申し送り事項についての意見交換を行い、97年9月の評議員会での審議結果の通りとすることが確認された。

3.3 平成11年度科学研究費（細目「地球化学」）審査員候補者（第1段審査員2名）の推薦：投票により大気水圏生物圏関係として吉田尚弘、河村公隆、蒲生俊敬、固体地球関係として海老原充、松田准一を選出した。会長と副会長によって分野等を考慮して、上記5名のうち2名が研連へ推薦されることが

了承された。

3.4 1999年度日本地球化学会年会開催地について：篠原行事幹事から地質調査所で実行委員会を組織し、つくばで開催することが提案され、承認された。なお、日時は9月29日(水)～10月1日(金)、場所は工業技術院共用講堂と地質調査所を予定している旨、説明があった。

3.5 地球化学書編集委員会の発足について：地球化学書出版準備委員会の任務終了に伴い、地球化学書編集委員会を発足させることについて議論し、了承された。委員会メンバーの構成に関して意見交換を行った。その結果、委員会の構成に関しては編集委員長(松久副会長)へ一任し、準備委員会を中核としたメンバー構成の原案を作成し、評議員会で持ち回りの承認を得た後、活動を開始することが了承された。

4. 次回以降の予定

10月3日(土) 第3回幹事会

(東大山上会館13:30・17:00)

10月8日(木) 第3回評議員会(九州大学理学部)

10月10日(土) 総会(九州大学)

“多摩川およびその流域の環境浄化に関する基礎研究、応用研究、環境改善計画のための研究”募集

標記研究助成の案内が参りましたので、ご連絡いたします。

財団法人とうきゅう環境浄化財団は昭和50年より多摩川及びその流域の環境浄化を促進するために必要な研究を毎年公募してきました。既に359件の研究に対して助成を行い、283件の研究成果が完成しています。

平成11年度も引き続き首都圏における「多摩川およびその流域の環境浄化に関する基礎研究、応用研究、環境改善計画のための研究」を下記のとおり募集いたします。

1. 研究対象者

学識経験者の方はもちろん、一般の方でも研究に意欲のある方であれば、どなたでもご応募いただけます。

2. 研究対象テーマ

(1) 産業活動または住生活と多摩川およびその流域との関係に関する調査および試験研究産業構造の変革

により多摩川流域においても従来型の産業が減少し、ハイテク産業が上流域に立地するようになり、自然環境に影響を与えております。

また、住生活においては、中流域で人口の過密化があり、最上流域では過疎化が顕著になっています。これ等都市問題を解決すべく今後の土地利用、都市計画、文化活動等視野の広い観点に立った研究が望まれます。

(2) 排水・廃棄物等による多摩川の汚染の防除に関する調査および試験研究

産業排水は法規制等により減少し、現在は家庭雑排水が汚染の原因の多くを占めているといわれています。多摩川流域においても河川、地下水の有害金属、発癌性物質、農薬汚染、酸雨等問題化しております。これ等が人間を含む生物にどのような影響を与えるのか、その実態、解決策などの調査、研究を望みます。

(3) 多摩川およびその流域における水の利用に関する調査・研究

毎年夏の水不足は全国各地に深刻な影響を与えております。雨水による地下水の涵養等が各地で試みられています。多摩川流域における水循環システムについてあらゆる角度から調査研究をして頂きたいと思います。

(4) 多摩川をめぐる自然環境の保全、回復に関する調査・試験研究

建設省は「多自然型川づくり事業」「魚がのほりやすい川づくり事業」を推進しております。多摩川もモデル河川として親水護岸整備、堰の魚道整備を行っています。多摩川には年間を通して1,600万人もの人々が訪れています。川の自然と人間が以下に共生できるか、環境管理のあり方の研究を含め、課題となっています。地域住民の視点、研究者の視点で自然環境の保全、回復のあり方についての調査、研究、提言を望みます。

◆公募締切日 平成11年1月18日

応募についての詳細は下記事務局までご連絡下さい。

〒150-0002 東京都渋谷区渋谷1-18-14

(渋谷地下鉄ビル内)

電話 (03)3400-9142 (財)とうきゅう環境浄化財団

人事公募のお知らせ(東京大学地震研究所助手)

表記公募についてご案内いたします。

1. 公募人員：助手 1名

2. 所属：採用決定後本人と相談のうえ決定する

3. 専門分野：地球化学(現在、主に微量元素または同位体を用いて地球化学的研究を行っており、今後マグマあるいはマントル物質を対象とした研究、および、分析手法の開発に意欲的である者)

4. 応募資格：博士の学位を有する者、または着任時に博士の学位取得が確定している者

5. 採用予定時期：平成11年4月1日

6. 提出書類

(1) 履歴書(書式自由)

(2) 研究業績リスト(査読の有無を区別すること)

(3) 主要論文の別刷3編以内(業績リストに○印を

付すこと)

(4) これまでの研究概要(2,000字程度)

(5) 将来の研究計画(2,000字程度)

(6) 応募者を熟知し、意見を伺える2名の氏名、連絡先、応募者との関係を記載した書類

7. 公募締め切り：平成11年1月14日(木) 必着

8. 問い合わせ先：

東京大学地震研究所火山噴火予知研究推進センター

中田節也

電話 03-3812-2111 内線5695

E-mail: nakada@eri.u-tokyo.ac.jp

9. 提出先：封書を用い、表に「地球化学助手応募書類在中」と朱書し、郵便書留で郵送のこと

東京大学地震研究所人事掛宛て

〒113-0032 東京都文京区弥生1-1-1

日本地球化学会1997年度決算、1998年度中間決算及び1999年度予算

(1998年度日本地球化学会総会にて承認)

(1) 1997年度日本地球化学会決算報告 (1997年1月1日～12月31日)

収入の部

科 目		収入額(円)		予算額(円)
1. 会費収入		9,914,950		10,100,000
(内訳)	一般正会員		8,497,000	8,380,000
	学生正会員		546,000	530,000
	シニア正会員		20,000	205,000
	賛助会員		575,000	700,000
	海外会員		264,950	285,000
	入会金		12,000	0
2. 刊行物売上		4,431,326		4,100,000
(内訳)	講読料		4,412,100	4,100,000
	別刷		19,226	0
3. 広告料		1,216,660		1,300,000
(内訳)	地球化学		859,580	800,000
	会員名簿		357,080	500,000
4. 出版助成		1,790,000		1,740,000
5. 公開発表(B)助成		1,400,000		0
6. 雑収入*		318,579		20,000
7. 前年度名簿積立金		400,000		500,000
8. 前年度基本財産引当金		3,400,000		3,400,000
9. 前年度繰越金		2,220,163		1,600,000
収入合計		25,091,678		22,760,000

*1997年年会準備委員会からの寄付金30万円を含む。

支出の部 (1997年1月1日～12月31日)

科 目		支出額(円)		予算額(円)
1. 事業費		15,989,681		14,790,000
	11. 出版費		11,071,516	10,930,000
	印刷費		8,823,672	8,910,000
	編集費		1,450,000	1,400,000
	発送費		797,844	620,000
	12. 行事費		460,100	450,000
	13. 公開発表(B)		1,400,115	0
	14. 学会賞経費		98,752	80,000
	15. 委員会活動費		215,626	150,000
	16. 名簿積立金		0	0
	17. 名簿作成費		878,054	1,360,000
	18. 会員業務委託費		1,751,148	1,710,000
	19. 会員業務郵便		114,380	110,000
2. 管理費		1,579,563		1,880,000
	21. 庶務費		200,000	200,000
	22. 会議費		95,100	70,000
	23. 通信費		36,785	40,000
	24. 旅費		1,077,000	1,260,000
	25. 選挙費		9,875	90,000
	26. 雑費		34,803	90,000
	27. 雑誌保管費		126,000	130,000
3. 予備費*		0		740,000
4. 基本財産引当金		3,400,000		3,400,000
5. 次年度繰越金		4,122,343		2,290,000
支出計		25,091,678		22,760,000

*予備費予算額には、予備費予算¥400,000及び消費税+2%, 予算¥340,000を含む。

11. 出版費明細

事 項	英文誌	和文誌	ニュース	その他	支出計
111. 印 刷	6,014,718	2,318,674	0	490,280	8,823,672
112. 編 集	1,000,000	400,000	50,000	0	1,450,000
113. 発 送	777,934	0	0	19,910	797,844
出版費計	7,792,652	2,718,674	50,000	510,190	11,071,516

英文誌：Geochemical Journal Vol. 31, 1～6。

和文誌：地球化学 Vol. 31, 1～4 (ニュース No. 148～151, 連絡会ニュース No. 13, 14を合本発行)。

印刷費その他は地球化学索引 (Vol. 1～30)。

編集費和文誌には索引 (Vol. 1～30) の編集費¥50,000を含む。

和文誌4号, 索引号および会員名簿は、全て英文誌と同時発送し、発送費英文誌に含まれる。

発送費その他は、地球化学31[1]とGJ31[1]のフリーコピー181件の発送費。

貸借対照表 (1997年12月31日現在)

資産の部	
現金	0
普通預金	1,596,289
定額貯金(1)	3,400,000
定額貯金(2)	4,200,000
学会事務センター	3,718,614
計	12,914,903

負債・正味財産の部	
前受会費	3,632,000
名簿積立金	0
基本財産充当引当金	3,400,000
未払費用*	1,760,469
正味財産	4,122,434
計	12,914,903

*1998年1月26日に以下2件を支払った。

テラ出版へ ￥1,182,969

電算印刷へ ￥577,500

1997年度鳥居基金決算報告 (1997年12月31日現在)

収入の部

科目	金額 (円)
1. 前年度繰越金	4,111,618
2. 利息	3,112
3. その他	0
収入計	4,114,730

支出の部

科目	金額 (円)
1. 助成	200,000
内訳 助成100,000円 2件	
2. その他	0
3. 次年度繰越金	3,914,730
支出計	4,114,730

資産状況

科目	金額 (円)
普通貯金	414,730
定額貯金	3,500,000
資産計	3,914,730

(2) 1998年度日本地球化学会中間決算報告 (1998年1月1日～6月30日)

収入の部

科 目		収入額(円)		予算額(円)
1. 会費収入		9,196,000		10,050,000
(内訳)	一般正会員		7,937,000	8,400,000
	学生正会員		519,000	600,000
	シニア正会員		20,000	50,000
	賛助会員		425,000	640,000
	海外会員		295,000	360,000
2. 刊行物売上		2,337,150		4,400,000
(内訳)	講読料		2,337,150	4,400,000
3. 広告料		0		820,000
(内訳)	地球化学		0	820,000
4. 出版助成*		0		1,790,000
5. 公開発表(B)助成**		0		0
6. 雑収入***		113,704		20,000
7. 前年度名簿積立金		0		0
8. 前年度基本財産引当金		3,400,000		3,400,000
9. 前年度繰越金		4,122,343		3,980,000
収入合計		19,169,288		24,460,000

* 1,820,000円入金 (9月22日)

** 1,400,000円入金 (8月4日)

*** 出版者著作権協会からの100,000円を含む。

支出の部 (1998年1月1日～6月30日)

科 目		支出額(円)		予算額(円)	
1. 事業費		7,477,199		13,340,000	
	11. 出版費		6,346,394		10,280,000
	印刷費		4,728,649		8,320,000
	編集費		1,400,000		1,400,000
	発送費		217,745		560,000
	12. 行事費		449,300		460,000
	13. 公開発表(B)		0		0
	14. 学会賞経費		0		40,000
	15. 委員会活動費		300,285		250,000
	16. 名簿積立金		0		400,000
	17. 名簿作成費		0		0
	18. 会員業務委託費		359,780		1,800,000
	19. 会員業務郵税		21,400		110,000
2. 管理費		770,721		1,320,000	
	21. 庶務費		150,000		150,000
	22. 会議費		62,205		100,000
	23. 通信費		18,554		40,000
	24. 旅費		531,000		850,000
	25. 選挙費		0		0
	26. 雑費		8,962		50,000
	27. 雑誌保管費		0		130,000
3. 予備費		0		400,000	
4. 基本財産引当金		0		3,400,000	
5. 次年度繰越金		0		6,000,000	
支出計		8,247,920		24,460,000	

11. 出版費明細

事 項	英文誌	和文誌	ニュース	その他	支出計
111. 印 刷	3,074,637	1,654,012	0	0	4,728,649
112. 編 集	1,000,000	350,000	50,000	0	1,400,000
113. 発 送	217,745	0	0	0	217,745
出版費計	4,292,382	2,004,012	50,000	0	6,346,394

英文誌：Geochemical Journal Vol. 32, 1～3。

和文誌：地球化学 Vol. 32, 1～3 (ニュース No. 152～154, 連絡会ニュース No. 15を合本発行)。ニュース印刷費は和文誌に含まれる。

和文誌3号は、全て英文誌と同時に発送し、発送費英文誌に含まれる。

(3) 1999年度日本地球化学会予算 (1999年1月1日～12月31日)

収入の部

科 目		収入額(円)		予算額(円)
1. 会費収入		9,780,000		10,050,000
	(内訳)			
	一般正会員		8,400,000	8,400,000
	学生正会員		600,000	600,000
	シニア正会員		30,000	50,000
	賛助会員		450,000	640,000
	海外会員		300,000	360,000
2. 刊行物売上		4,900,000		4,400,000
	(内訳)			
	講読料		4,900,000	4,400,000
3. 広告料		1,250,000		820,000
	(内訳)			
	地球化学		800,000	820,000
	会員名簿		450,000	0
4. 出版助成*		1,820,000		1,790,000
5. 公開発表(B)助成		0		0
6. 雑収入		20,000		20,000
7. 前年度名簿積立金		400,000		0
8. 前年度基本財産引当金		3,400,000		3,400,000
9. 前年度繰越金		6,900,000		3,980,000
収入合計		28,470,000		24,460,000

支出の部（1999年1月1日～12月31日）

科 目		支出額(円)		予算額(円)	
1. 事業費		14,010,000		13,340,000	
	11. 出版費		10,410,000		10,280,000
	印刷費		8,400,000		8,320,000
	編集費		1,400,000		1,400,000
	発送費		610,000		560,000
	12. 行事費		450,000		460,000
	13. 公開発表(B)		0		0
	14. 学会賞経費		40,000		40,000
	15. 委員会活動費		250,000		250,000
	16. 名簿積立金		0		400,000
	17. 名簿作成費		950,000		0
	18. 会員業務委託費		1,800,000		1,800,000
	19. 会員業務郵税		110,000		110,000
2. 管理費		1,480,000		1,320,000	
	21. 庶務費		150,000		150,000
	22. 会議費		100,000		100,000
	23. 通信費		40,000		40,000
	24. 旅費		850,000		850,000
	25. 選挙費		160,000		0
	26. 雑費		50,000		50,000
	27. 雑誌保管費		130,000		130,000
3. 予備費*		400,000		400,000	
4. 基本財産引当金		3,400,000		3,400,000	
5. 次年度繰越金		9,180,000		6,000,000	
支出計		28,470,000		24,460,000	

11. 出版費明細

事 項	英文誌	和文誌	ニュース	その他	支出計
111. 印 刷	6,150,000	2,250,000	0	0	8,400,000
112. 編 集	1,000,000	350,000	50,000	0	1,400,000
113. 発 送	610,000	0	0	0	610,000
出版費計	7,760,000	2,600,000	50,000	0	10,410,000

英文誌：Geochemical Journal Vol. 33。

和文誌：地球化学 Vol. 33（ニュース No. 156～159）。ニュース印刷費は和文誌に含まれる。

和文誌4号と名簿は、全て英文誌と同時に発送し、発送費は英文誌に含まれる。

ニュースへ記事やご意見をお寄せください

今後とも従来と同様、皆様の情報・原稿をお待ちしています。地球化学に関連した研究集会、シンポジウムの案内、人材募集、書評、研究機関の紹介など何でも結構です。編集の都合上、電子メール、フロッピー（マックもしくはDos/Vいずれでも結構です）での原稿を歓迎いたしますので、ご協力の程よろしく願いたします。次号の発行は1999年2月下旬頃を予定しています。ニュース原稿は1月初旬までにお送りいただくよう、願いたします。また、ホームページに関するご意見もお寄せください。

（編集担当 高橋和也）

編集担当者

高橋和也

〒351-0198 埼玉県和光市広沢2-1

理化学研究所 核化学研究室

Tel：048-467-9420

Fax：048-462-4662

e-mail：kazuyat@postman.riken.go.jp

米田成一

〒169-0073 新宿区百人町3-23-1

国立科学博物館 理工学研究部